

第5章 第3調査地の調査

第1節 調査の概要

第3調査地は名和川東岸縁に位置し、南東には丘陵の尾根先端が迫っている。調査前は水田として利用されており、圃場整備が行われていた。このため地形の改変が著しく、特に調査地の西側は大きく段切りされて崖となっているほか、調査地内も削平が著しい部分がある。したがって、本来の微地形は不明であるが、大きく見ると丘陵の控える南東側が高く、名和川側の西に向けて下る地形をなしていたようである。

本調査地では遺構面を2面確認している。表土直下の層上面で第1遺構面を確認し、古墳時代中期～後期や中世の遺構を検出した。層は遺物包含層で縄文時代から弥生時代後期にかけての遺物が出土した。層除去後、層上面で第2遺構面を確認し、縄文時代や弥生中期～後期の遺構を検出した。層以下では遺構や遺物は確認できず、第2遺構面の完掘をもって調査を終了した。

(北)

第2節 調査地内の堆積(図17～23、図版7・8)

土層堆積の方向は地形の高低に従って南東から西に向かっており、名和川や東谷川および南東の丘陵の谷からの流水による沖積作用で形成されたものと思われる。圃場整備による段切りや削平の影響を大きく受けており、プライマリーな土層の状況は不明な部分が多い。表土・耕作土の下面には水田に由来する鉄分の沈着する層が見られる。この層の下に、黒褐色の粘性砂質土～シルト層の層が堆積している。この上面で第1遺構面、下面で第2遺構面を確認した。層以下は遺物を含まない河川堆積で、砂層・砂礫層と砂礫混じりの黒色土が互層に堆積している。層、層は暗褐色の砂層をベースに砂礫が混じる。層中には拳大ほどの円礫がレンズ状堆積をなす部分が見られる。また、B区とE区では層の上面で河道堆積を確認している。層堆積後に形成された河道であろう。いずれの河道とも遺物を含んでおらず、第2遺構面の遺構が掘りこまれることから、遺跡内で人間活動が開始される以前の堆積と考えている。層、層はクロボク起源とおもわれるガラスを含む黒色土に砂礫が混じる黒色砂質土である。層は砂礫を含む粘性、しまりの非常に強い粘土層である。これら～層の堆積後、離水し安定した状況になってから人間活動が始まったものと思われる。(北)

基本層序

- 層 黒褐色(7.5YR 2/2)粘性砂質土
- 層 暗褐色(10YR 3/3)砂 5mm前後の礫をまれに含む
- 層 黒色(10YR 1.7/1)砂質土 1～20mmの礫を多く含む
- 層 暗褐色(10YR 3/4)砂 5mm前後の礫を多く含む
- 層 黒色(7.5YR 2/1)砂質土 5～30mmの礫を多く含む
- 層 黒褐色(10YR 3/2)粘質土 白色の細礫多く含む
- 層 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質土 小礫多く含む

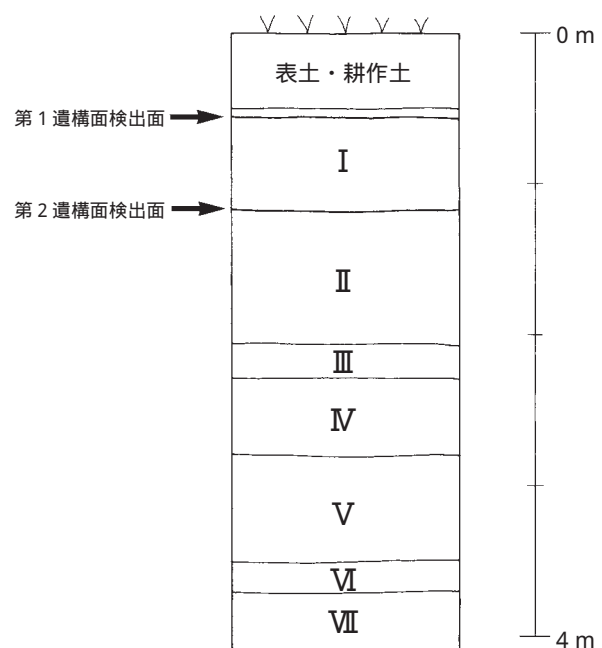


図17 第3調査地内土層断面模式図

第5章 第3調査地の調査

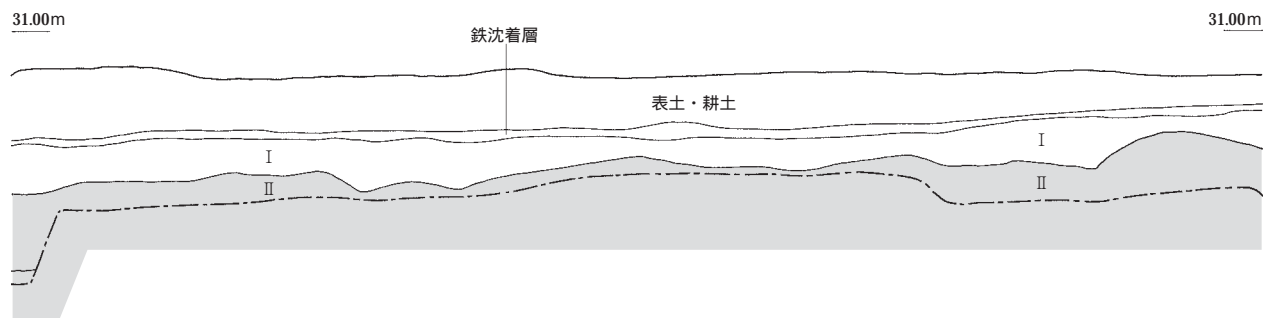
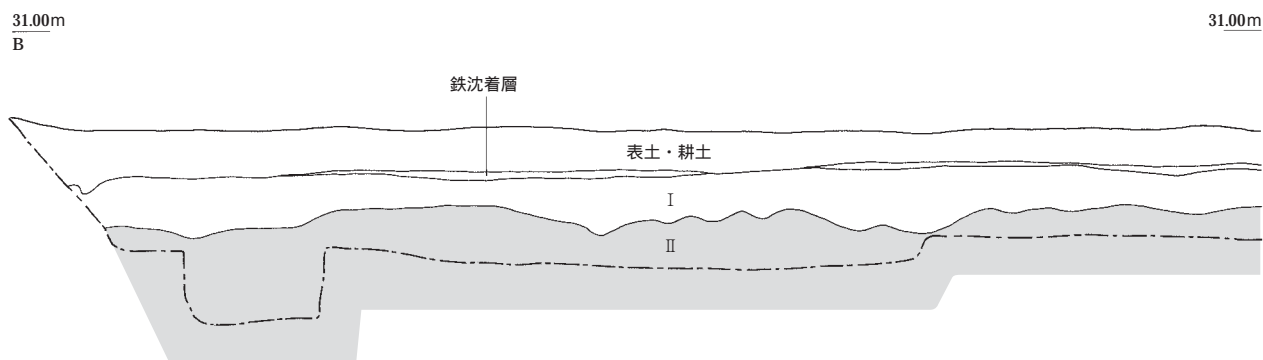
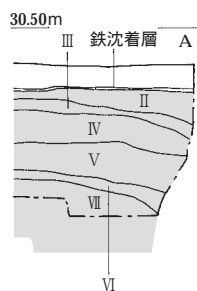
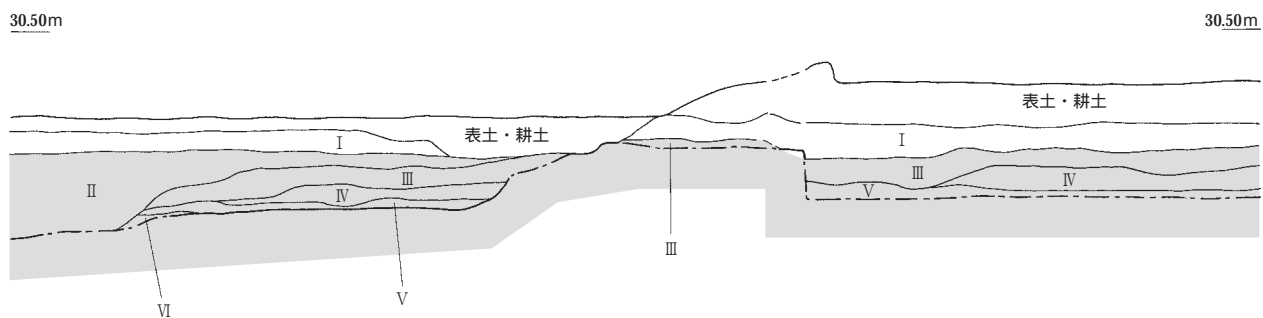
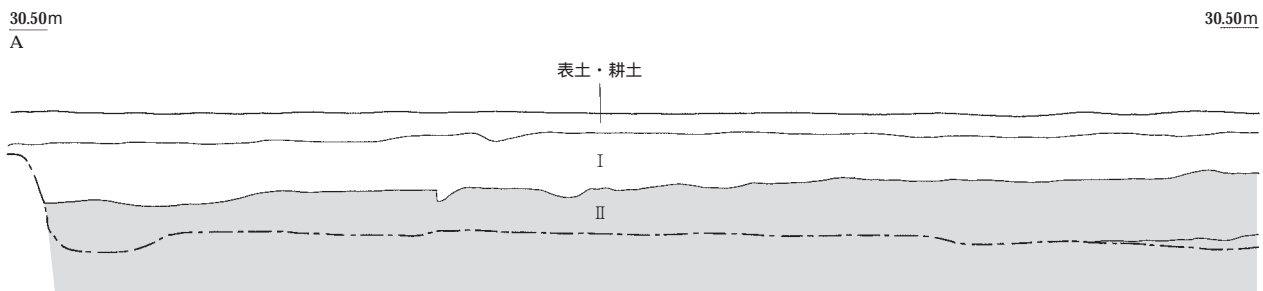
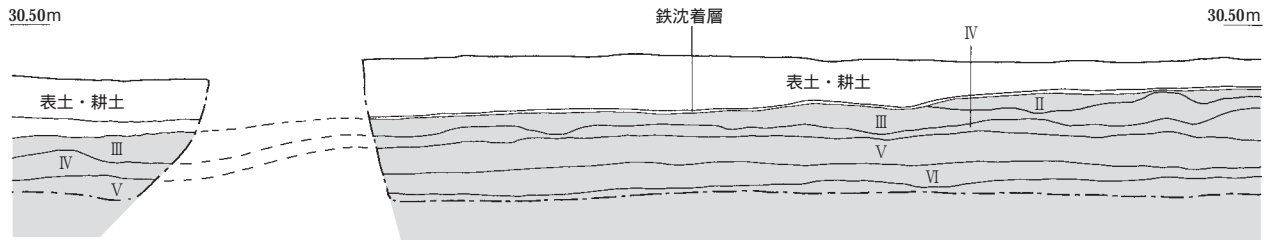
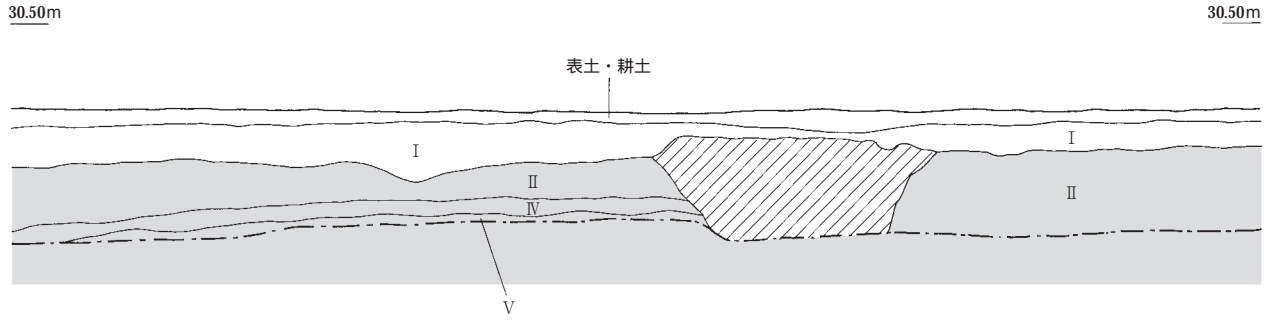



図18 第3調査地内土層断面図(1)



 : 礫層

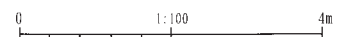
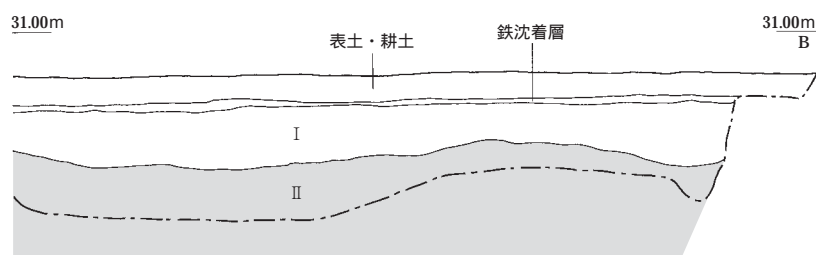
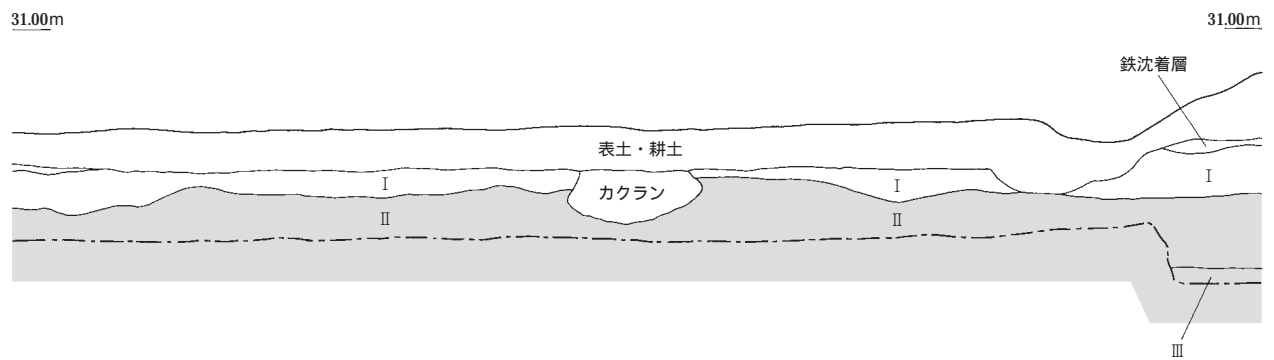
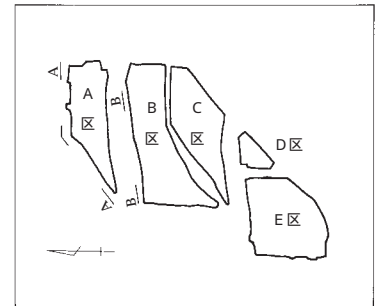


図19 第3調査地内土層断面図(2)

第5章 第3調査地の調査

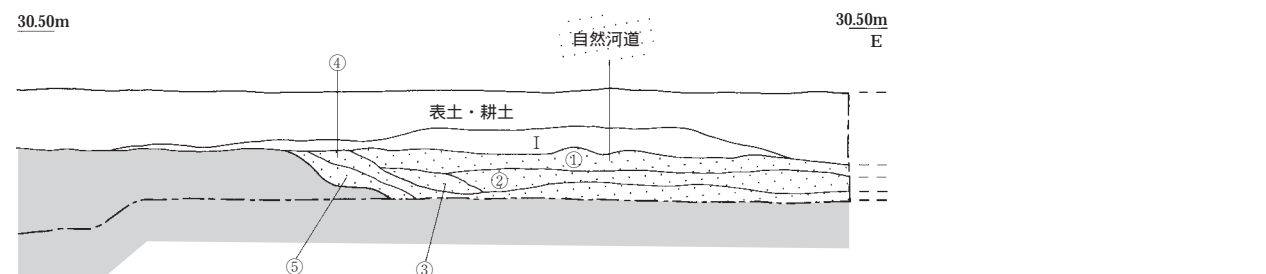
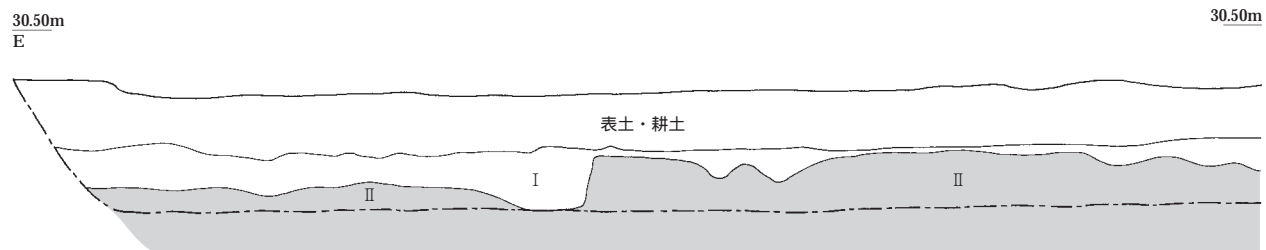
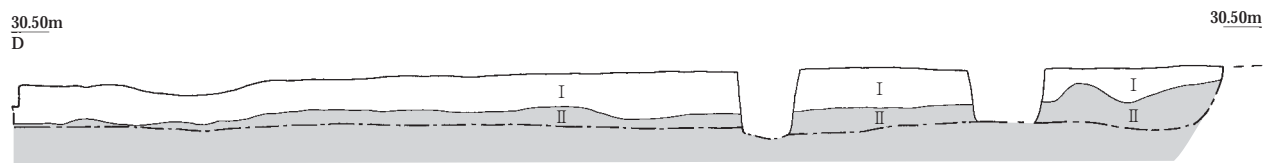
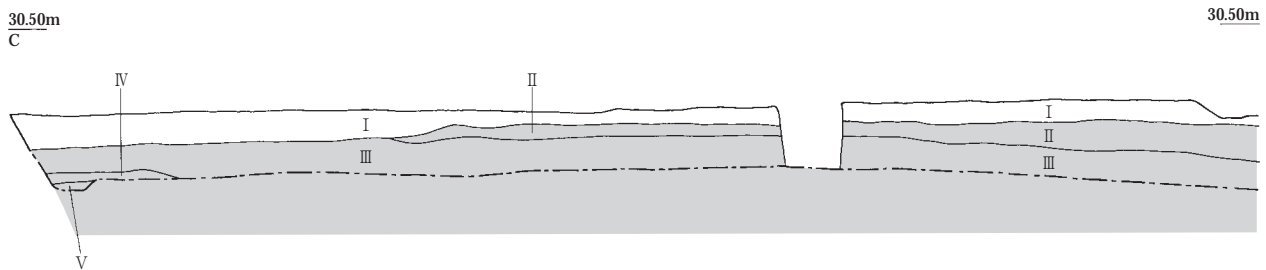


図20 第3調査地内土層断面図(3)

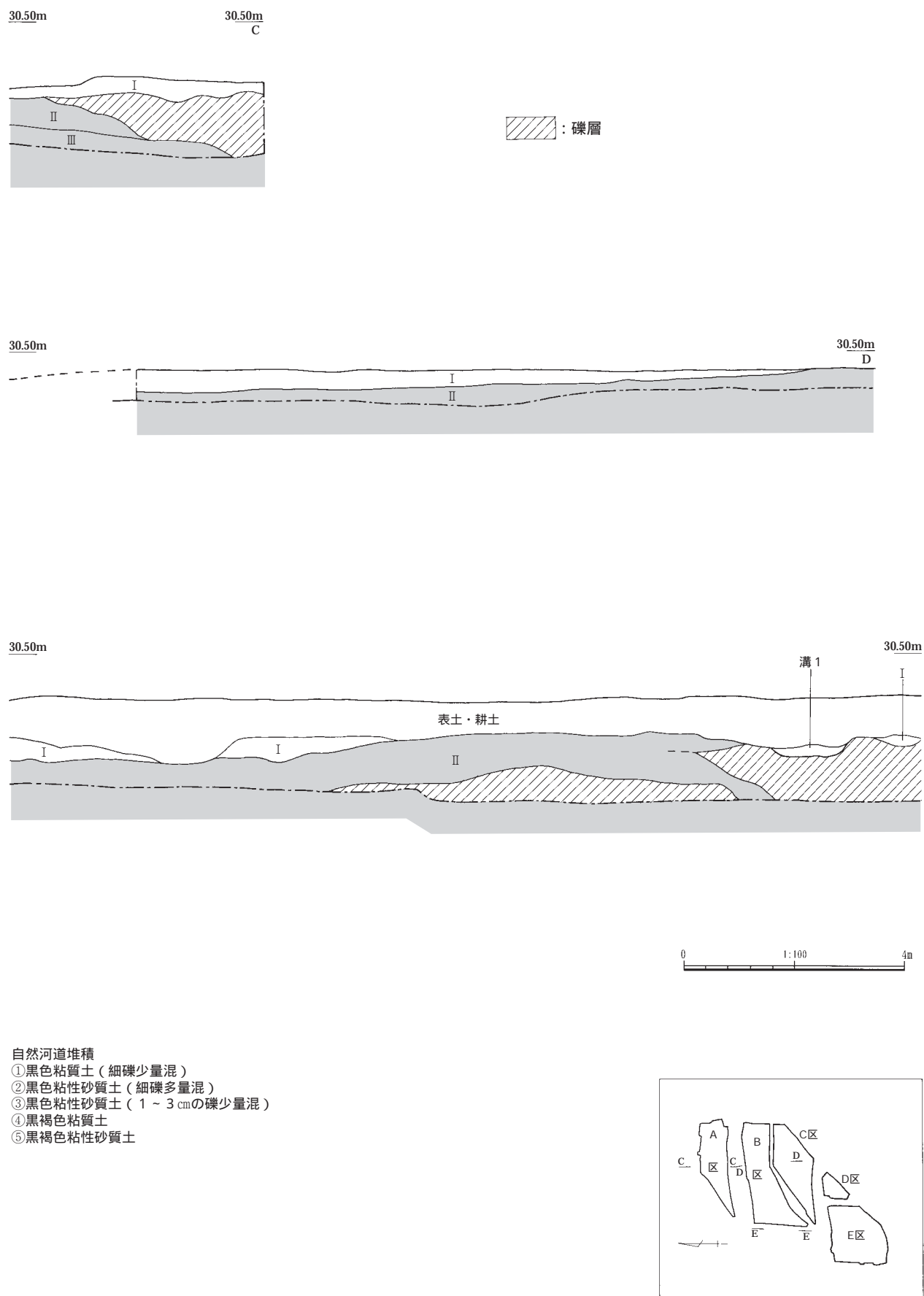


図21 第3調査地内土層断面図(4)

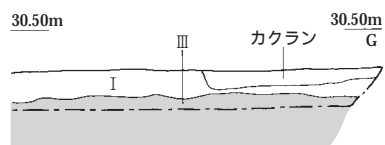
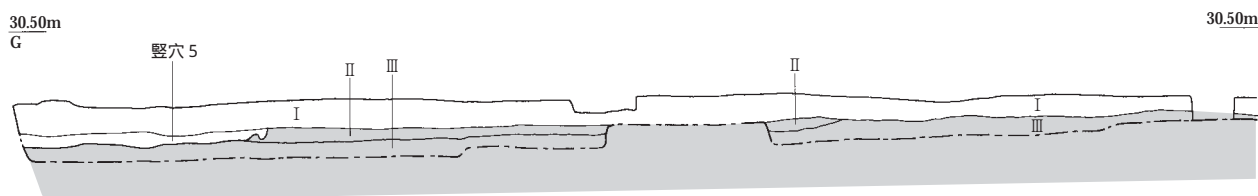
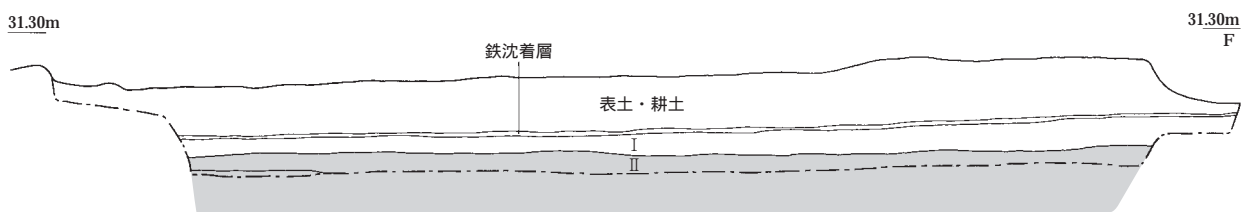
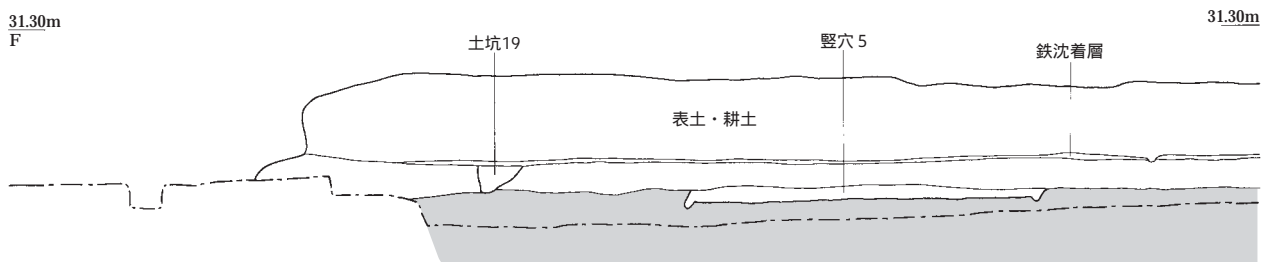


図22 第3調査地内土層断面図(5)

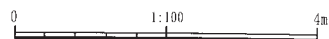
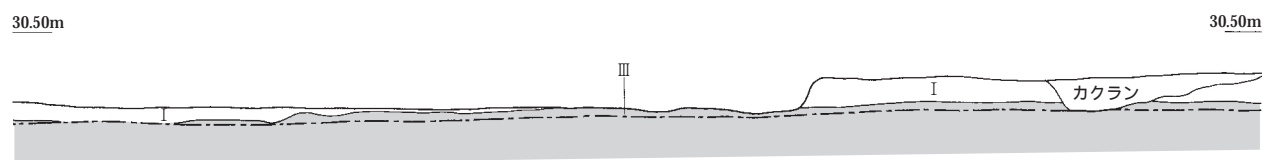
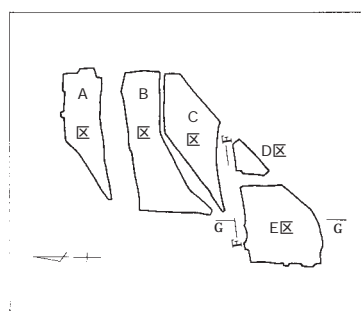
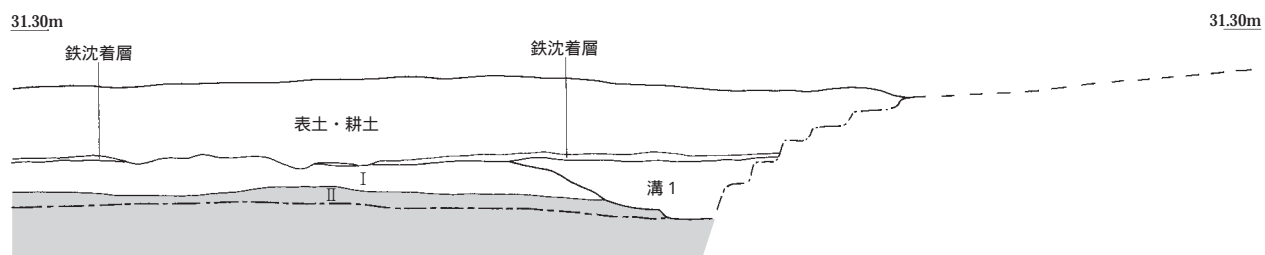


図23 第3調査地内土層断面図(6)

第3節 第1遺構面の調査

1. 概要

第1遺構面は表土・耕作土下の鉄分の沈着層を除去し、層上面を検出した段階で確認した。前述のように全面で削平をうけており、本来的な遺構面上面を残している部分はない。特にC区の東南部（J2・J3・J4・J5・K3・K4・K5グリッド付近）は削平が著しく層まで削られている。この区域では第1面の遺構を検出していないが、本来的に遺構が存在しなかったのではなく、削平によって完全に破壊された可能性もある。

検出した遺構は中世と古墳時代中期～後期の2時期に大別できる。2時期の遺構を1面で検出したが、削平の状況や周辺地形、あるいは第2調査地の調査結果から考えると、本来的には検出面よりも上に別の遺構面が存在した可能性が高く、中世の遺構はここから掘り込まれたものと思われる。したがって、中世の遺構は一部が遺存しているに過ぎず、大半は削平により消滅した可能性がある。

（北）

表6 第3調査地内第1遺構面新旧遺構対照表

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
竪穴住居1	S I 1	溝1	S D 1	土坑13	S K 11
竪穴住居2	S I 2	土坑4	S I 1	土坑14	S K 15
竪穴住居3	S I 3	土坑5	S K 20	土坑15	S K 14
竪穴1	S K 63	土坑6	S K 13	土坑16	S K 16
竪穴2	S I 4	土坑7	S K 50	土坑17	S K 52
掘立柱建物1	S B 13	土坑8	S K 56	土坑18	S K 53
掘立柱建物2	S B 11	土坑9	S K 55	土坑19	S K 58
掘立柱建物3	S B 15	土坑10	S D 5		
掘立柱建物4	S B 12 S A 10 S A 11	土坑11	S K 12		
		土坑12	S K 7		

2. 中世の調査

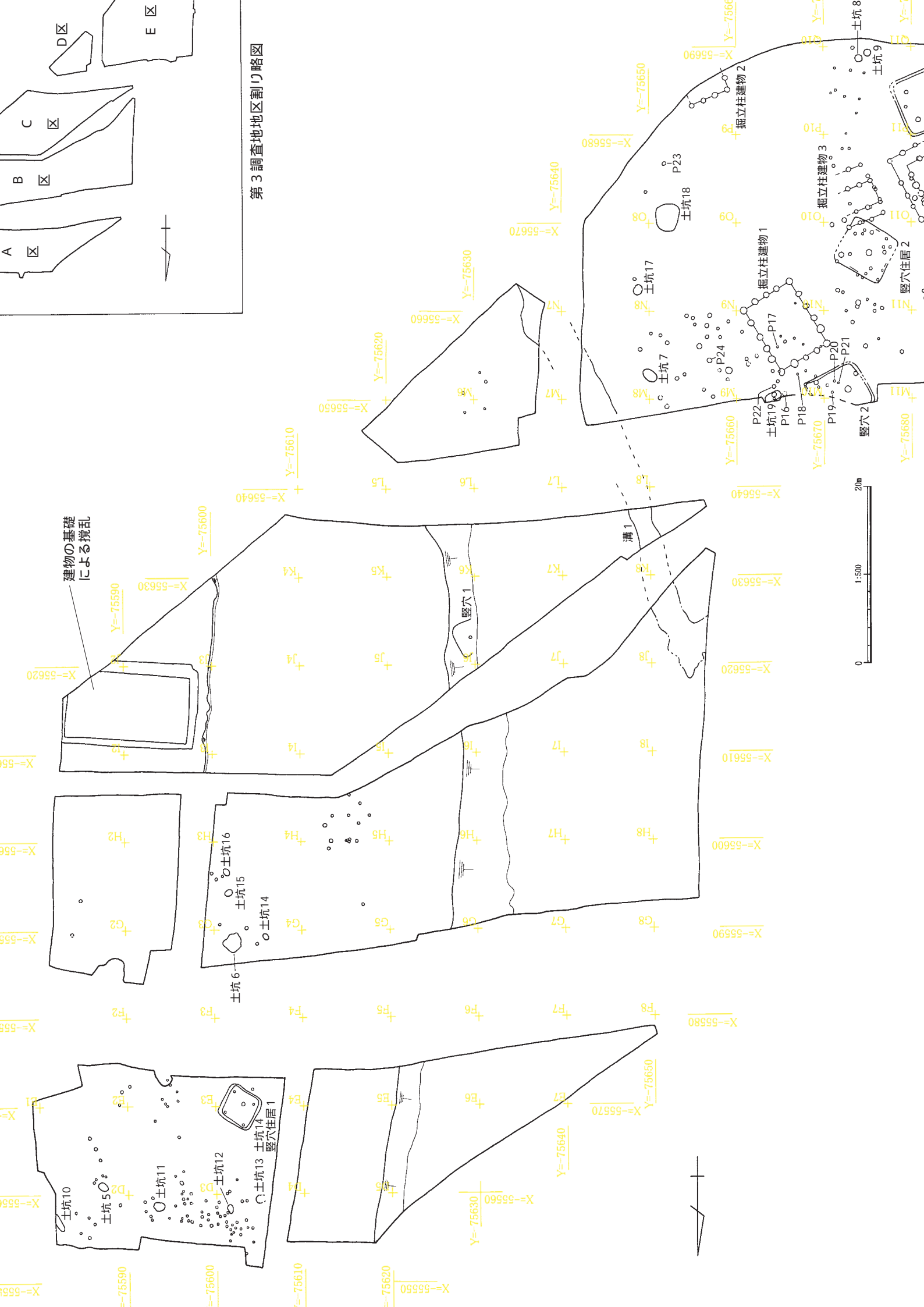
第1遺構面で検出できたピットの内、粘質の明るい灰色系土を埋土に持つピット35基が、主にE区西半で検出された。そのうちのM9・10グリッドに集中する7基からは、時期を同じくする土師皿が出土している。このことから、この灰色土系のピットはいずれも中世のものであると判断した。ただし、これらのピットは掘立柱建物などの構造物を構成する配置をとらない。圃場整備によって上面が大きく削平されていることもあり、不明な点が多いが、少なくとも土師皿などの出土した7基のピットは地鎮などの祭祀に伴う遺構であると考えている。

（三木）

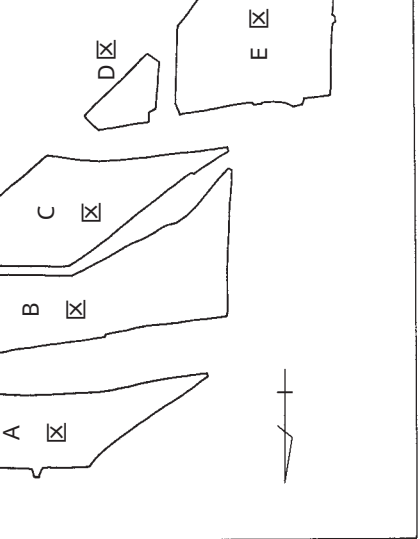
P16～22（図24・26～28、図版26・27・50・80、表28・34・61）

<形態と規模>

P16はM9グリッドの北端に位置する。径55cm、検出面からの深さは87cm、底面の標高は28.49mを測る。P17はM9グリッドの中央部に位置する。径20cm、検出面からの深さは46cm、底面の標



第3調査地区区割り略図



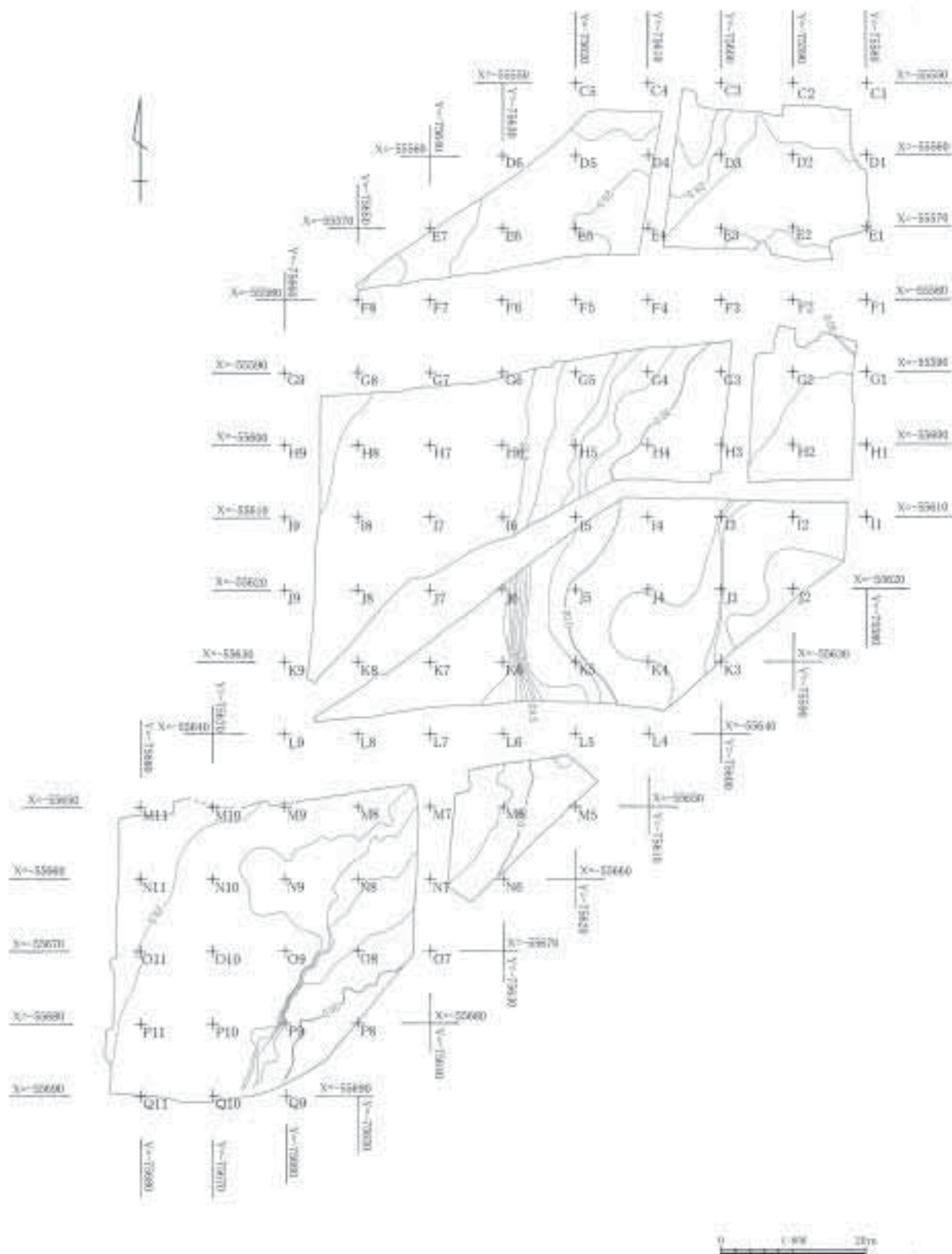


図25 第3調査地第1遺構面地形測量図

第5章 第3調査地の調査

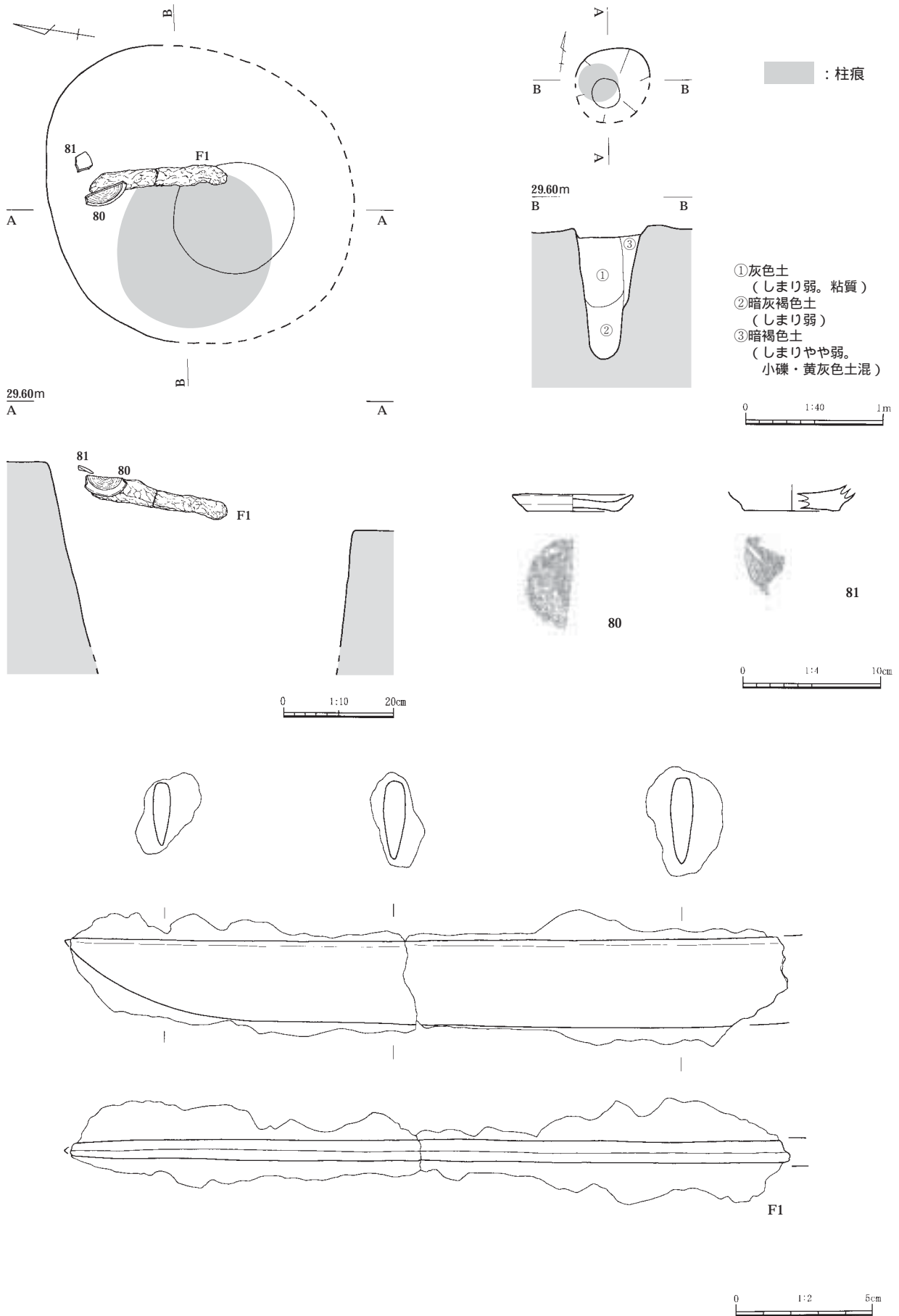


図26 中世ピット(1) P16

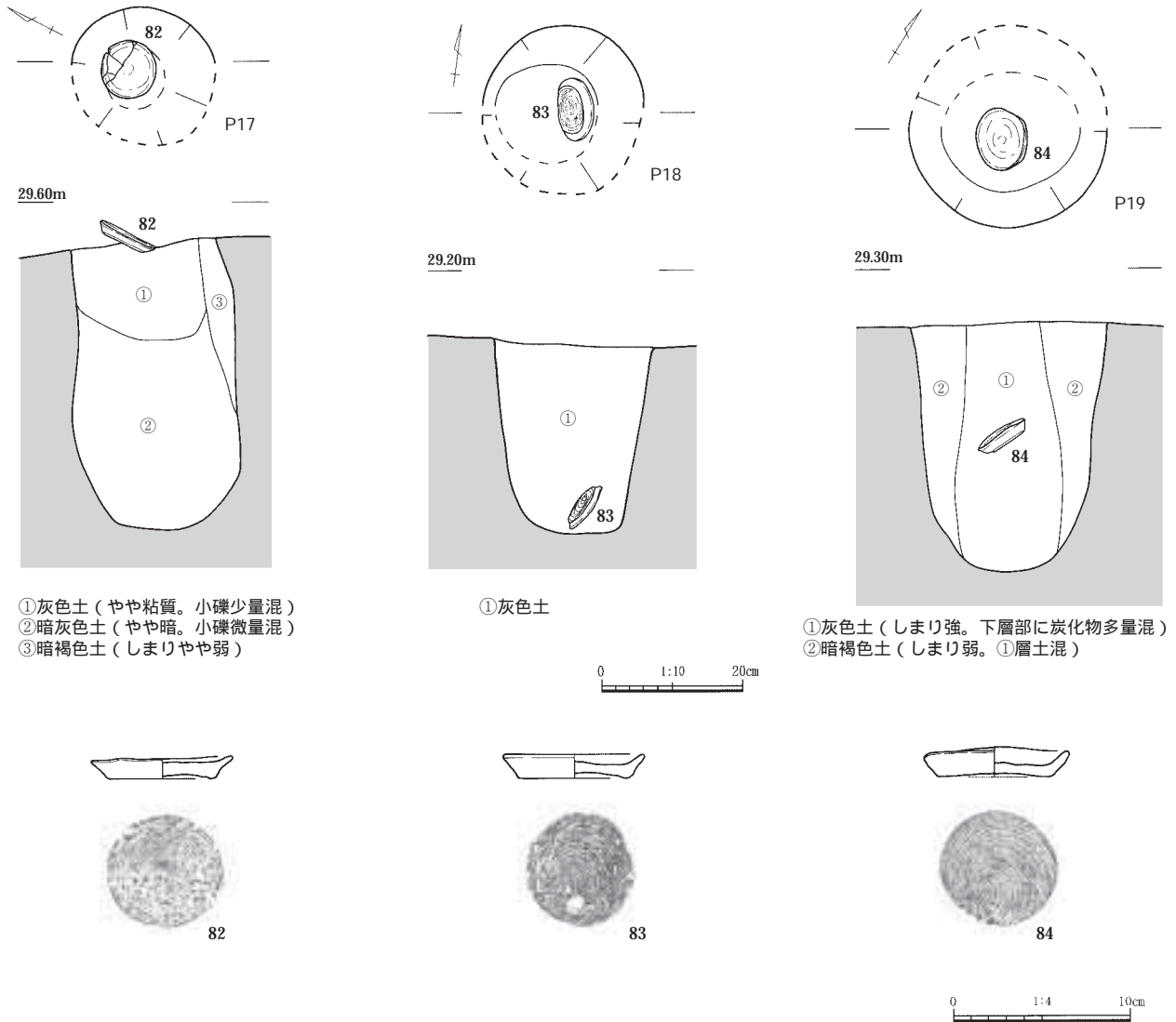


図27 中世ピット(2) P17～19

高は29.14mを測る。P18はM9グリッド北西部に位置する。径23cm、検出面からの深さは29cm、底面の標高28.81mを測る。P19はM10グリッドの北東隅付近に位置する。径29cm、検出面からの深さは34cm、底面の標高28.88mを測る。P20はM10グリッドの北東部に位置する。径29cm×24cm、検出面からの深さは42cm、底面の標高28.97mを測る。P21はM10グリッドの北東部に位置する。径18cm×16cm、検出面からの深さは19cm、底面の標高29.15mを測る。

<遺物の出土状況>

P16の上面からは土師皿（80・81）と刀（F1）が出土している。刀に土師皿を伏せるような状態で出土している。P17の上面からは完形の土師皿（82）が上向きで出土している。P18からは完形の土師皿（83）が底面近くで、やや下向きの状態で出土している。P19からも完形の土師皿（84）が中層から出土している。P20の上層からは完形の土師皿（85）が上を向いた状態で出土しており、その下からは人頭大の礫が出土している。礫には一部被熱痕が見られた。P21からも完形の土師皿（86）が出土している。検出が竪穴2の床面であったため、本来の出土層位は下層になると考えられる。埋土中からは工具痕流入滓（鍛冶炉内壁面についた工具痕のなかに溜まった滓）（F2）も出土している。P22埋土中からは土師皿（87）が出土している。

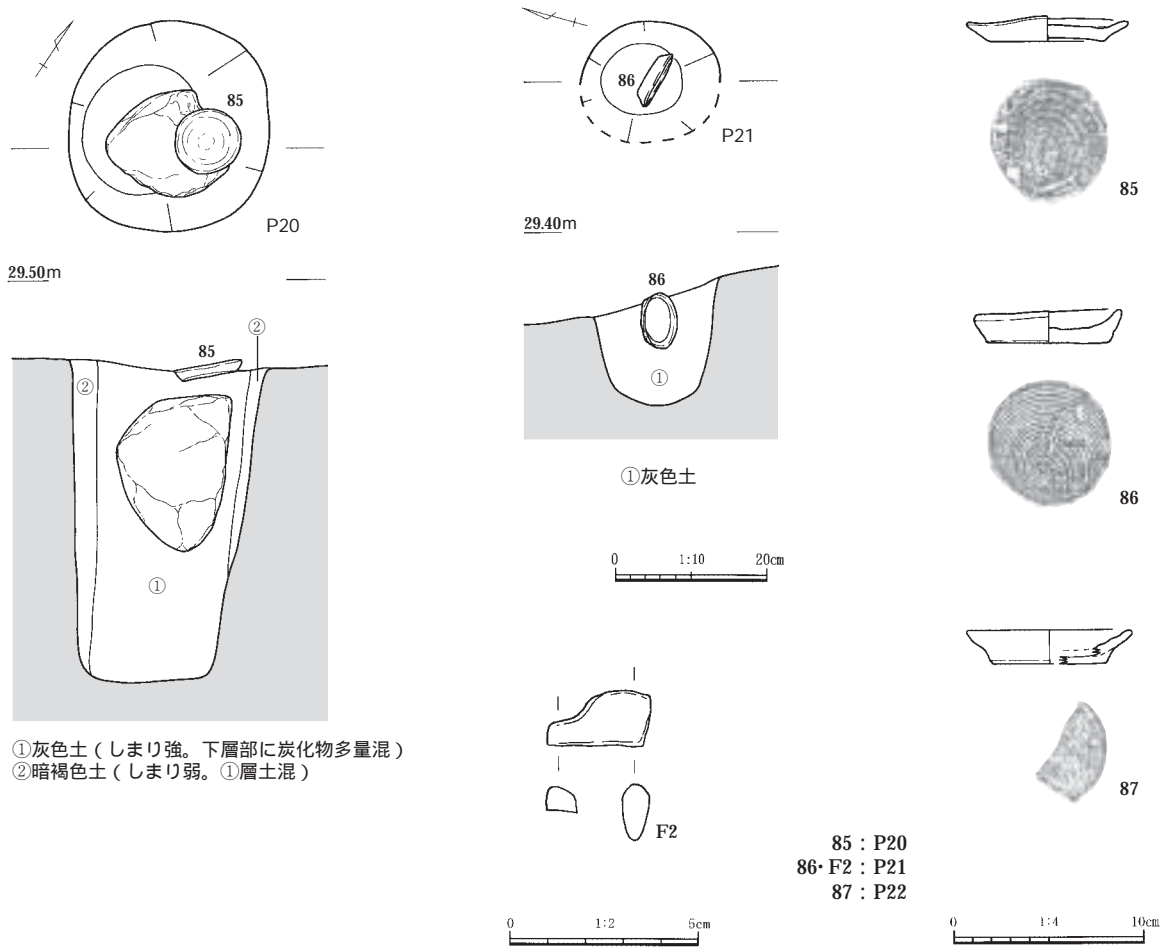


図28 中世ピット(3) P20・21

< 出土遺物 >

80は土師皿である。風化のため底部の調整は不明瞭であるが回転系きりの痕跡が認められる。底部がやや盛り上がっている。口縁部は外反している。81は土師皿もしくは杯の底部である。底部は回転系きり痕が残りに、器壁は厚い。F 1は刀である。長刀か短刀かは不明である。82~87は土師皿である。すべて底部調整は回転系きりである。82は底部が厚く、立ち上がりは浅く口縁端部は外反している。83は底部がやや盛り上がっており、口縁部は外反している。84はやや口縁部がいびつな形を呈し、端部は内傾気味である。85は口縁部がいびつな形を呈しており、立ち上がりは浅く端部は外反している。86はやや厚手のつくりである。87は底部をつぎたして体部を作っており、粘土のつなぎ痕が明確にみられる。いずれも平安時代末~鎌倉時代の所産である。(三木)

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺物が出土し、時期の確定できた遺構は、竪穴住居3棟、竪穴2基、掘立柱建物3棟、土坑6基(土坑4を含む)、溝1条、ピット11基である。また、遺物が出土しておらず、時期が確定できない第1遺構面の他の遺構(土坑10基、ピット209基)も、中世の可能性が高いとしたもの以外は、埋土から考えてほぼすべてが古墳時代の遺構である可能性が高い。

遺物が出土した主な遺構の時期は中期末頃か後期末頃のいずれかで、大きく見て2時期の集落形

- ①黒褐色土（しまりやや強。
粘性弱。小礫多量混。土坑4埋土）
- ②黒褐色土（しまりやや弱。
粘性やや強。小礫多量混。土坑4埋土）
- ③黒褐色土
（しまり弱。粘性やや強。小礫多量混）
- ④黒褐色土（しまり弱。粘性強。
③層より赤色弱。小礫多量混）
- ⑤褐灰色土（しまり弱。粘性強。小礫混）
- ⑥黒褐色土（しまり弱。粘性やや強。）
- ⑦黒色土（しまり非常に強。
粘性弱。小礫非常に多く混）
- ⑧黒褐色土（しまり弱。粘性やや強。）
- ⑨黒褐色土（しまり強。粘性やや弱。）
- ⑩黒褐色土（しまり強。粘性やや弱。やや黄色強）
- ⑪黒色土（しまり弱。粘性強。
炭が土壌化し⑧層土と混ざったもの）
- ⑫黒色土
（しまり強。粘性やや強。小礫少量混）

■：硬化面

■：焼土

0 1:80 2m

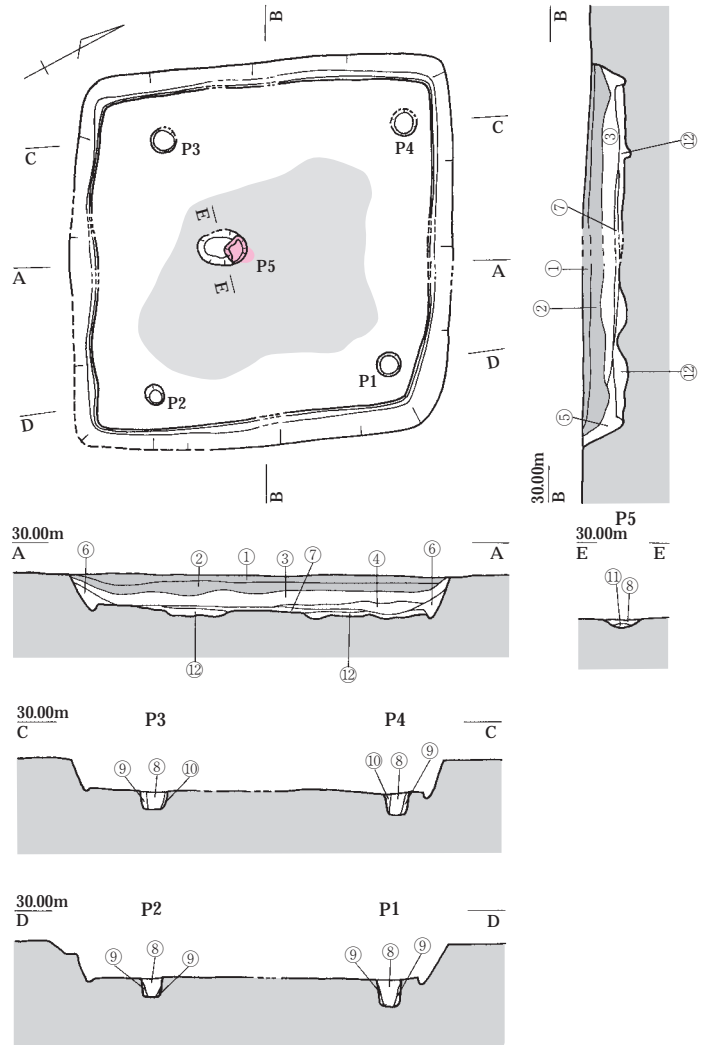


図29 竪穴住居1(1)

成が見られる。中期末と考えられる遺構には竪穴住居1、竪穴1、土坑4・5があり、後期末と考えられる遺構には竪穴住居2・3、竪穴2、掘立柱建物1・3・4、土坑6～9などがある。このうち、後期末の遺構には土器型式に差をもつものや切り合い関係を持つものが確認でき、少なくとも新古の2段階に分かれ

る。遺構の分布はピットも含めてA区東部とE区の二か所に大きく分かれている。A区東部には中期末の竪穴住居1と土坑4・5などが位置し、一方のE区には後期末の主要な遺構がまとまって分布している。なお、E区の遺構は時期的にまとまるだけでなく、配置も遺構間の有機的な関連性をうかがわせており、竪穴住居3、竪穴2、掘立柱建物1～4は遺構の軸方向がほぼ揃っている。遺構の分布域が時期的に異なっていることから、中期末と後期末では集落の範囲や中心域が違っていたと思われる。中期末の集落は、第2調査地で当該期の遺物が多く見つかったことをあわせて考えると、第3調査地北東部から北側および東側へと広がり、少なくとも第2調査地周辺までは展開していたと思われる。一方の後期末の集落はE区の北側、西側、南側それぞれに広がっていたと思われる。なお、現況ではE区の北側と西側は大きく掘削が行われているため、遺構の存在は見込めない。南側は調査地内と同じく圃場整備がなされ水田として利用されているが、遺構は残っているものと思われる。

(北)

竪穴住居1（図29～31、図版11・12・50・52、カラー図版2、表34・35）

<形態と構造>

A区東部、D3・E3グリッドにおいて現耕作土下層上面で検出した。なお、竪穴住居1は廃



図30 竪穴住居1(2)

絶後に掘り方の一部を改変して廃棄土坑としたようである（埋土①層・②層部分）。この部分は土坑4として後述する。竪穴住居1は平面方形を呈し、規模は掘り方上面で一辺4m、床面で一辺3.5m、検出面からの深さ32cm、床面積12m²である。埋土は土坑4の底面以下を竪穴住居1のものと認識した。黒褐色土、灰褐色土、黒色土の3層の堆積が見られた。これらは別の土が混ざらず、地形が高い南東から北西に向かって堆積しており、自然堆積したものとおもわれる。後述するとおり、同一個体の遺物がそれぞれまとまって出土した状況からも、短期間のうちに堆積したとおもわれる。床面は⑫層を貼り床とし平坦でほぼ水平である。周壁下に1条の周壁溝がめぐる。⑦層が硬化層である。住居中央の方は硬化し光沢を帯びていた。床面でP1～P5を検出した。主柱穴はP1～P4である。P1～P4はいずれも径24～32cm、床からの深さ28～32cmと小型である。柱穴の埋土はいずれも3層に分けられ、⑧層が柱痕もしくは抜き取り穴、⑨層と⑩層が掘り方埋土である。⑧層の幅から柱の太さは16cm程度と考えられる。P5はごく浅く底面に凹凸があるもので、底面と埋土中に炭が残り、土器の細片も含む。P5の南側底面から上端辺りには焼土面が広がる。この場で火を焚き、片付けた痕跡であるとおもわれる。

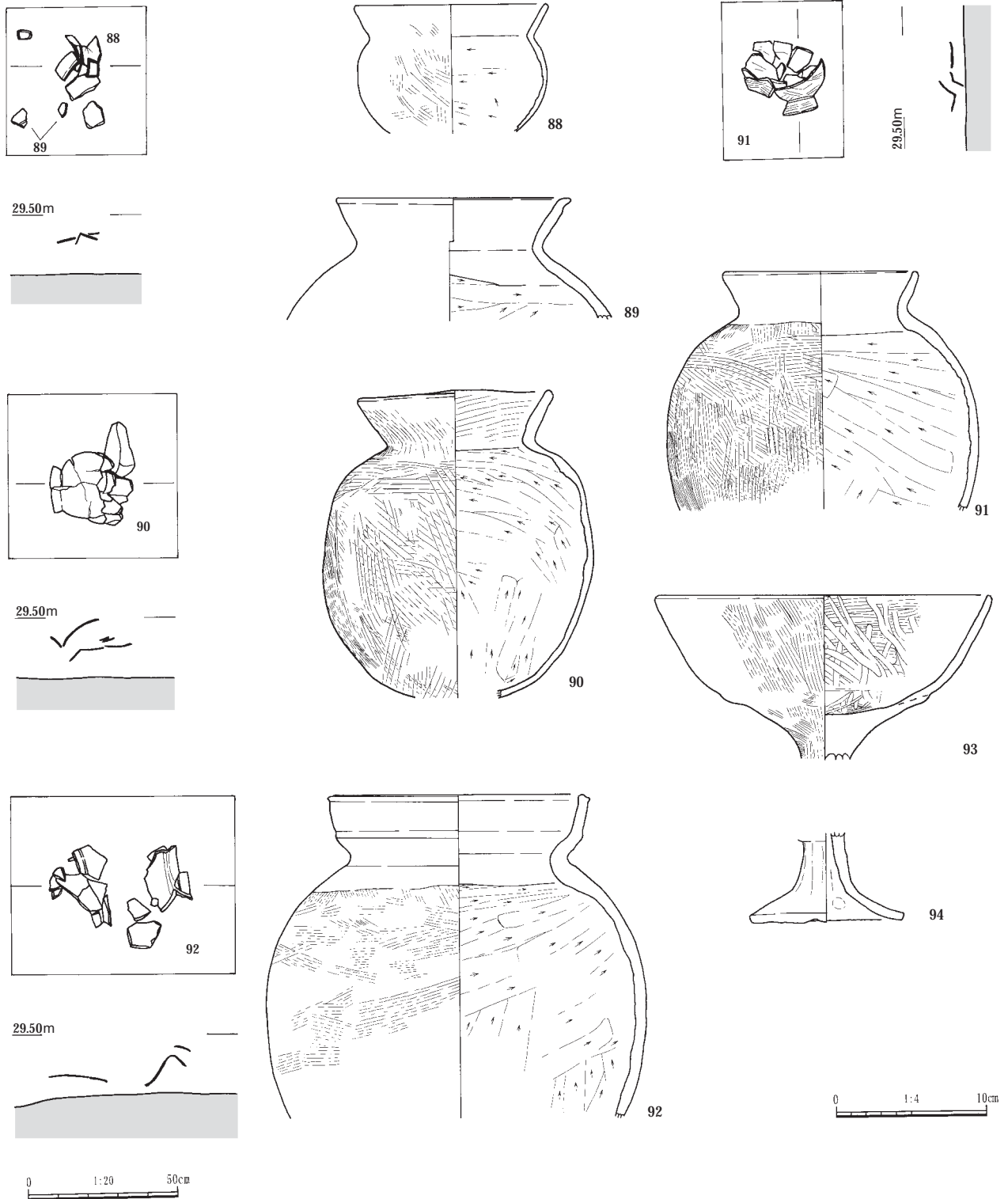


図31 竪穴住居 1(3)

< 遺物の出土状況 >

竪穴住居 1 からは多量の土器が出土した。出土した土器は全て土師器である。遺物の出土分布をみると、いずれもの土器も同一個体のものは、同一箇所にとまって出土した。しかし、垂直分布をみると、甕91以外、石も含めて多くは床面から数cm～十数cm浮いて出土している。住居床面直上から出土したのは甕91である。甕91は住居の北東隅、P 1 南側に隣接して出土した。住居廃絶時の原位置を留めていると考える。甕88～90・高杯93・高杯94は、住居の中央寄り、埋土③層中より出

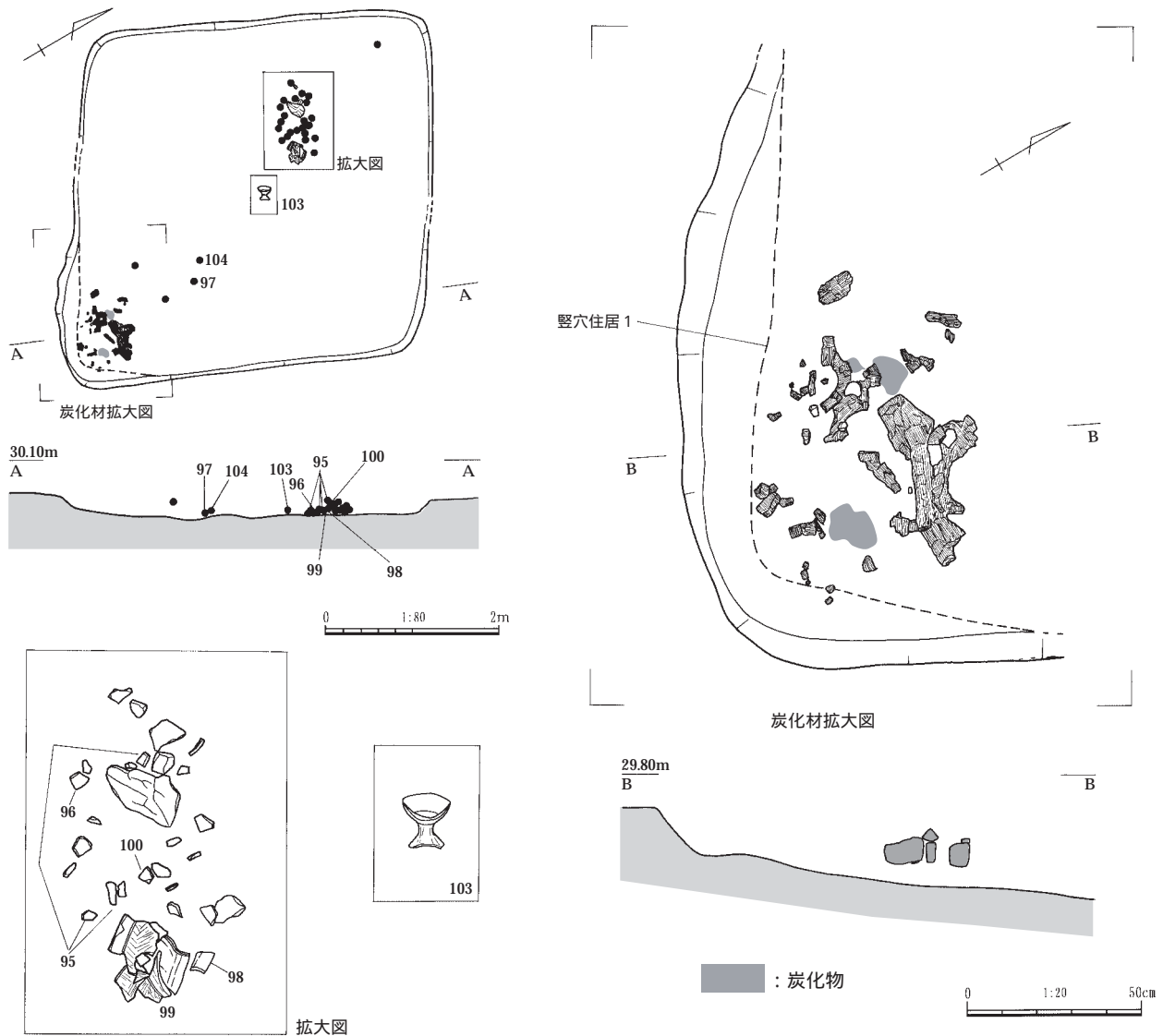


図32 土坑4(1)

土した。甕92は住居の南東隅でまとまって出土した。これらは住居廃絶時に残されものとするが、廃絶後わずかに埋土が堆積した後に廃棄された可能性もある。

<出土遺物>

出土した土器は全て土師器である。甕88～92、高杯の杯部93、高杯の94がある。これらは全体的に遺存状況がよい。出土した甕は92が複合口縁系のもの、それ以外は口縁部が頸部で「く」字状に屈曲して、そのまま上方へ開く単純口縁の形態をとる。91は肩部があまり張らず、頸部から口縁部は内湾気味に上方に開き、端部はそのまま丸く収める。体部から口縁部にかけての約3分の1には黒斑がのこる。以下の遺物は床面から浮いて出土した。甕92は、口縁部がほぼ直立する複合口縁をなす。口縁部下端はわずかに稜をなし、口縁部上端部は強くナデて外方に突出部をつくる。肩部より下半は煤が付着し、内面にも煤が付着する箇所がある。甕88は底部を欠損する。器高が低く、器高に対し口径が大きい。肩部は張らず、口縁部は直線的に伸びて、端部をそのまま丸く収める。器壁は薄い。甕89は、頸部から口縁部は斜め上方に開く。口縁端部は強くナデて面をなす。甕90は底部が欠損する。肩部はあまり張らず、頸部から口縁部は斜め上方へ直線的に開く。端部はそのまま丸く収める。口縁部の器壁は厚い。高杯93は、杯底部からの立ち上がり部に緩い段を有する。内

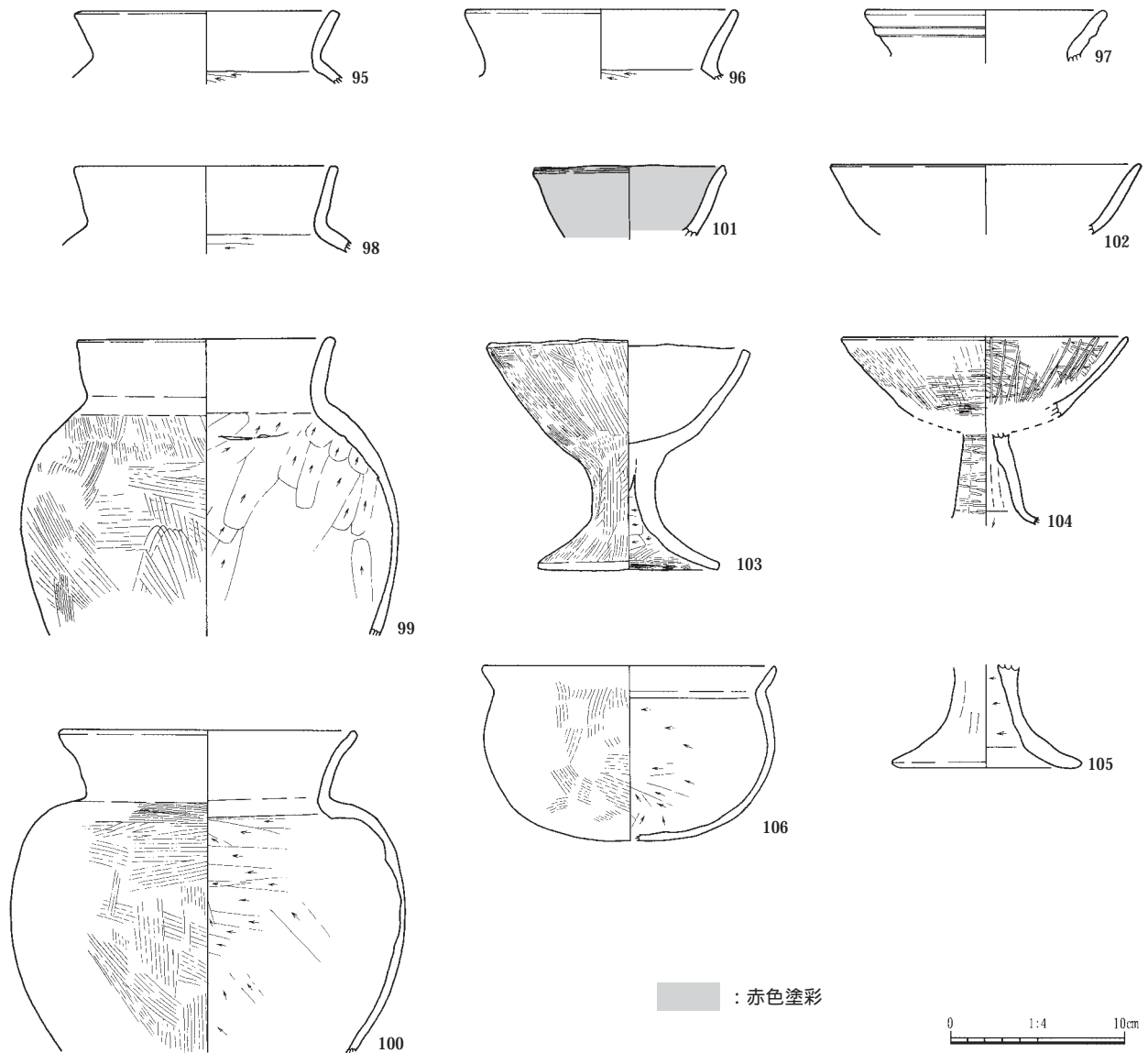


図33 土坑4(2)

面・断面に接合痕が明瞭にのこる。94は高杯脚部である。やや粗雑な作りである。これらの土器は調整がいずれも類似し、ハケは条間が広く明瞭であり、ナデは丁寧なものが多い。

これらの遺物はほぼ古墳時代中期末の様相を示すことから、竪穴住居1は古墳時代中期末のものと考えられる。
(日置)

土坑4 (図32・33、図版24・51・52、表35)

竪穴住居1を埋没過程で土坑として利用したものである。竪穴住居1の埋没の途中で竪穴部掘り方の南東隅部を掘削して拡張している点や、拡張がなされた面で炭や土器がほぼそろって出土したことから、この面以上の埋土上層部分を別の土坑として認識した。

土坑4からは、基盤土中に含まれる人頭大の垂角礫や炭化材と共に、多量の土器が出土した。土器は竪穴部北西側で、垂角礫と共にまとまっており、竪穴部南東隅部では炭化材がまとまって出土している。この付近は竪穴部掘り方を再掘削して拡張している。ほかに焼土や被熱痕跡は認められなかった。土坑4の埋土は2層に分けたが、基盤土と近似したもので、混入物も少ない。自然堆積

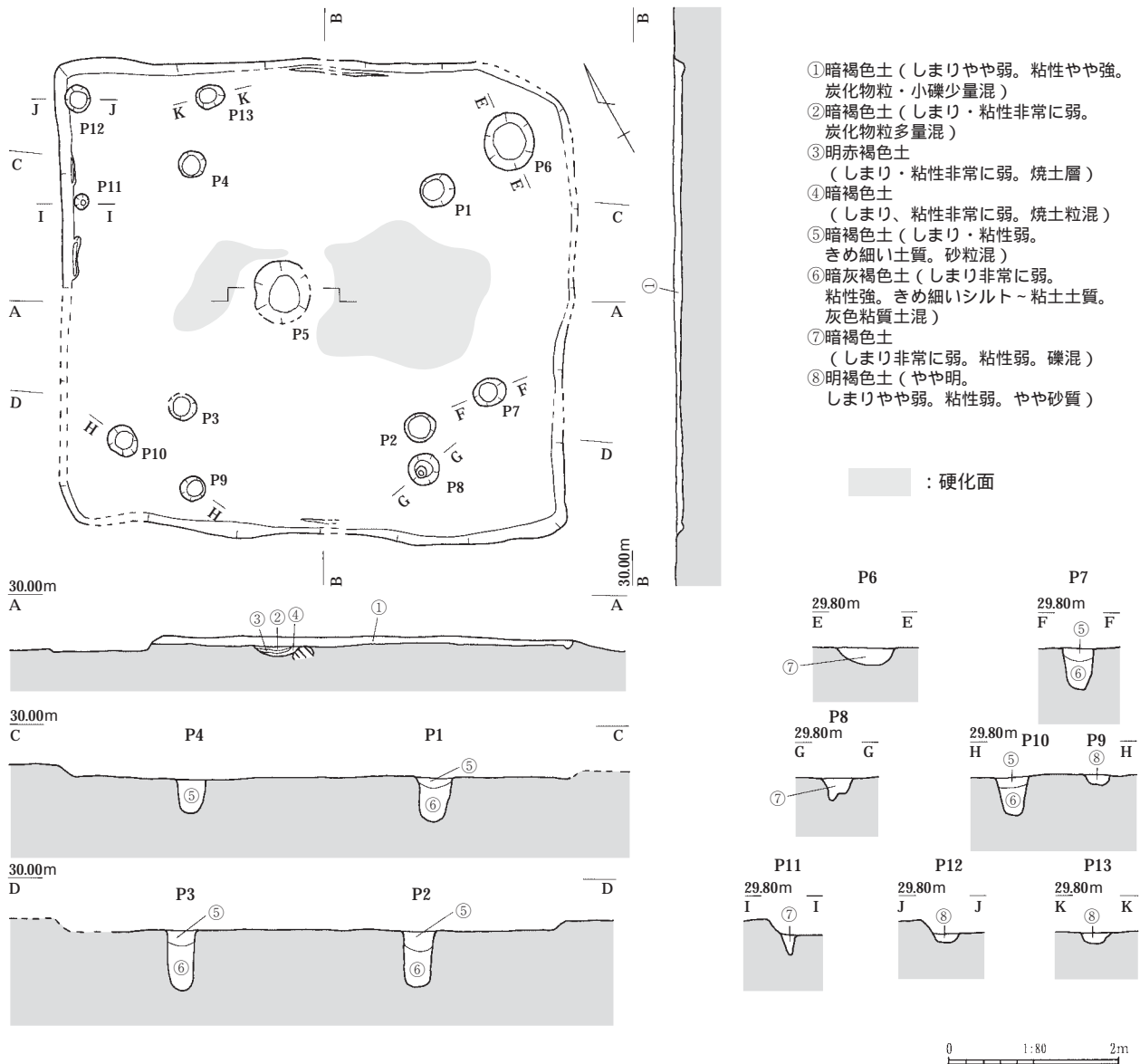


図34 竪穴住居2(1)

とおもわれる。

出土した土器は全て土師器である。95～100・106は甕、101～105は高杯である。全体的に遺存状況がよい。甕は97を除いて、口縁部が、頸部で「く」字状に屈曲しそのまま直線的にやや開くもので、横ナデ整形するものである。95は口縁部の立ち上がりは短く、端部は面をなす。96は口縁部を内湾気味に開き、端部は丸く収める。98は頸部から直上に近く口縁部が傾き、端部は面をなす。99は頸部から直立に近い角度で、口縁部が立ち上がり、端部は面をなす。頸部から口縁部の器壁は厚い。100は肩部が張り、口縁部は上位がわずかに内湾させ、端部は丸く収める。97は口縁部が頸部から外傾し中位に稜をなす。複合口縁が退化したものである。106は器高が低く、胴径に対し口径が大きい。口縁部は頸部から外傾し、端部はそのまま丸く収める。高杯101は内外面とも赤色塗彩している。103はやや粗雑な作りである。杯部は深く下位でゆるく立ち上がる。口縁端部は面をなす。甕100はやや古い要素をもつが、甕97などは新しい。これらの土器はおおよそ古墳時代中期末の様相を示している。

出土土器からこの土坑は古墳時代中期末のものと考えられる。各遺物の出土状況には規則性が求

められないことから、埋没しつつあった竪穴住居掘り方を廃棄土坑としたものであろう。（日置）

竪穴住居2（図34～36、図版13・14・51・52、カラー図版1・2、表35）

<形態と構造>

E区西部、N10グリッドに位置する。前述のように、E区に集中する主要遺構はほぼ軸方向が揃うが、これのみほかのものと軸があわない。掘立柱建物3のP1・13・14に切られる。長軸5.8m×短軸5.6mの、ほぼ正方形に近い平面形を呈する。圃場整備によって上面を大きく削平されており、検出面からの深さは6cm前後と非常に浅い。床面までの埋土①層は自然堆積層で、層近似土をベースに土壌化した層が含まれる。床面は地山で、床中央が高く、端が低くなっていた。床面積は29.5m²を測る。床中央には地山が硬化した部分が見られる。床面端では周壁溝を確認しているが、遺存状態が非常に悪く一部にしか残っていない。周壁溝は残存状況のもっとも良好な部分で幅8cm、深さ4cmほどである。周壁溝の遺存状態が悪いことや、硬化範囲が床中央の一部に限られることから、本来の床面上面は大半が流失ないしは土壌化してしまったものと思われる。床面でピットを13基検出した。支柱穴はP1～P4でほぼ正方形に配置され、規模は径約35～40cm、深さは約40cm～65cmを測る。柱間距離は2.8mでそうろう。埋土はそれぞれ同じ層を含み、P4は⑤層の単層、ほかは⑤層と⑥層の2層で構成される。いずれの層とも柱穴の掘り方に流入した自然堆積である。P5が中央ピットで、浅い土坑状を呈する。埋土は3層確認した。中層の③層は焼土層で、②層には多量の炭化物が、④層には焼土粒が含まれることから、P5は火処であったと思われる。残りのピットはその機能、性格が不明なものである。P7とP10は埋土やサイズが支柱穴と共通しているので、この遺構に伴う柱穴である可能性が高いものの、配置に規則性を見出せない。そのほかのピットはいずれも柱穴とするには十分な大きさ、深さを備えていない。

<遺物の出土状況>

削平を大きく受けていたため、出土遺物は床面直上かそれに準じる位置に包含されていたもののみである。遺物の垂直分布を見ると、いずれも床面から数cm前後浮いている。また、前述したように床面自体の遺存状態が悪く、本来的な床面がほとんど残っていない。こうした点から、これらは厳密な意味での床面直上出土遺物ではなく、廃棄時の原位置を完全には保ってはいないだろう。遺物は北東部にまとまりをもち、須恵器杯身112、土師器碗116、土師器甕118・120・121・122などが出土している。土師器甕122は大部分の破片がかたまってつぶれた状態で出土したが、一部離れた場所に散らばっていたものもあるため、二次的な移動があった可能性が高いだろう。ほかに西壁際中央部付近でほぼ完形の須恵器杯蓋107と土師器甕119が隣り合って出土している。遺物以外にも、住居内からは粘土やこれらの粘土が焼けてできた焼土の広がる範囲をいくつか見つかっている。これらは2～3cmほどの厚さで、数cmから30cmほどの大きさをもつ。北西部と北東部に分布のまとまりがある。粘土はローム起源のものと思われ、遺跡内の地山にはない。近隣の丘陵から持ち込んだものであろうか。これらの粘土は住居の構築材に由来するものと思われるが、出土状況からはこれらの性格を判断できない。

<出土遺物>

出土遺物は土器のみで、107～113が須恵器、114～122が土師器である。

須恵器の器種には蓋杯の蓋と身、甕がある。107～111は杯蓋である。108・109は外面肩部に沈線

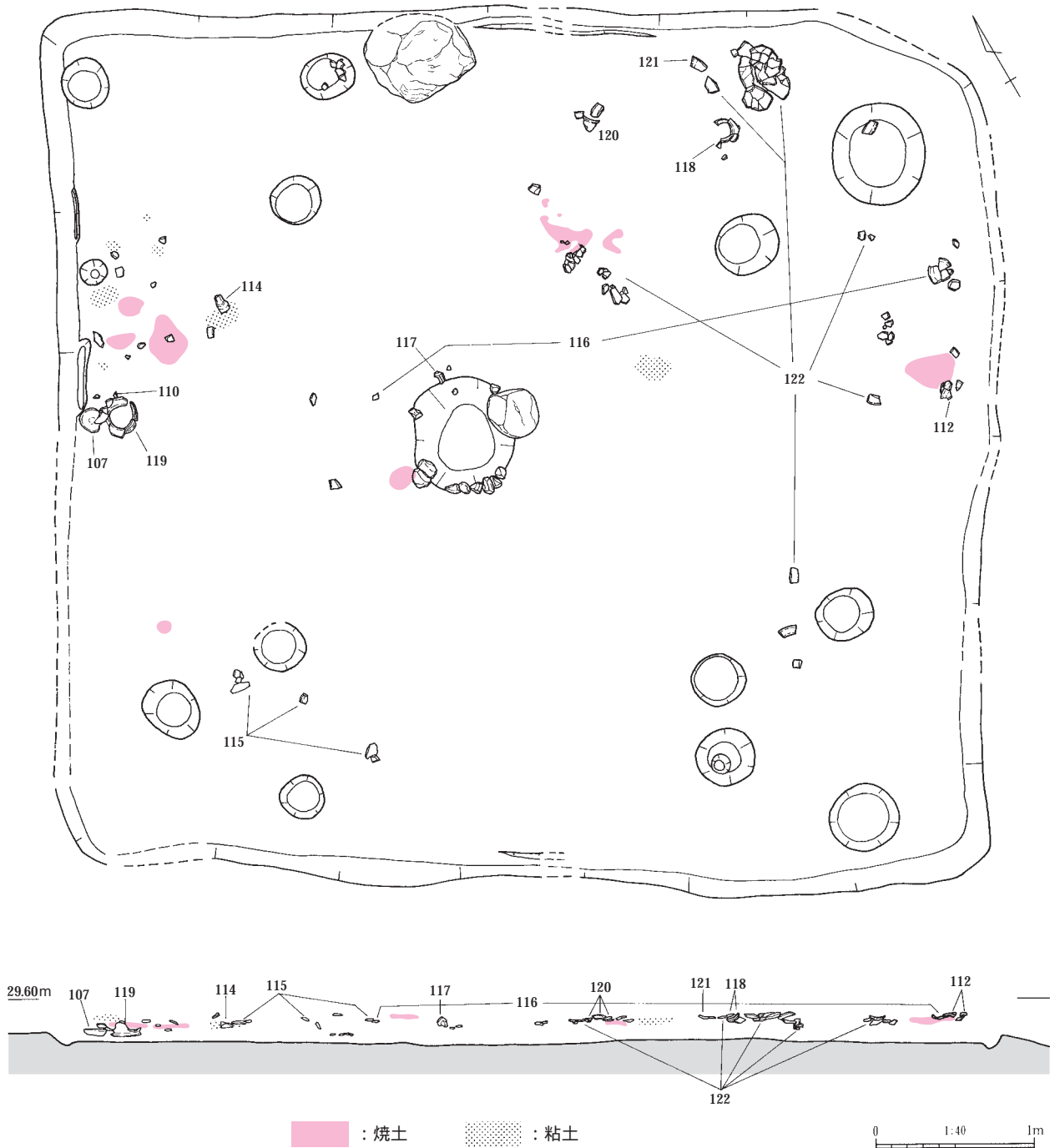


図35 竪穴住居 2(2)

を施して稜をつけ、口縁内面には端部からわずかに上に浅く沈線を入れて段を作る。107・111は外面の稜や口縁内面端に段を持たないタイプ。ほぼ完形の107の天井部は外周に3周ほどケズリを施し中央をナデで処理する。以上の特徴からこれらの杯蓋は大谷分類のA5型に相当し、大谷編年の出雲4期、陶邑編年のTK209型式併行にあたる。112は杯身。立ち上がり部分が高く、かなり内傾し、全体のバランスが悪い。立ち上がりの高さ以外では杯蓋と同様A5型の特徴を備えているので、蓋と同型式期のものとおもわれる。この杯身には外面に赤色顔料で記号状のものが施されている(これを「彩色記号」と呼ぶ。以下同)。現状ではケズリとナデの境に器体横方向に引かれた一本線の記号が二箇所観察できる。本住居内からは彩色記号の見られる須恵器はこれ1点のみの出土であるが、竪穴住居3からも出土している。彩色記号須恵器は一般に古墳などから出土するもので、祭

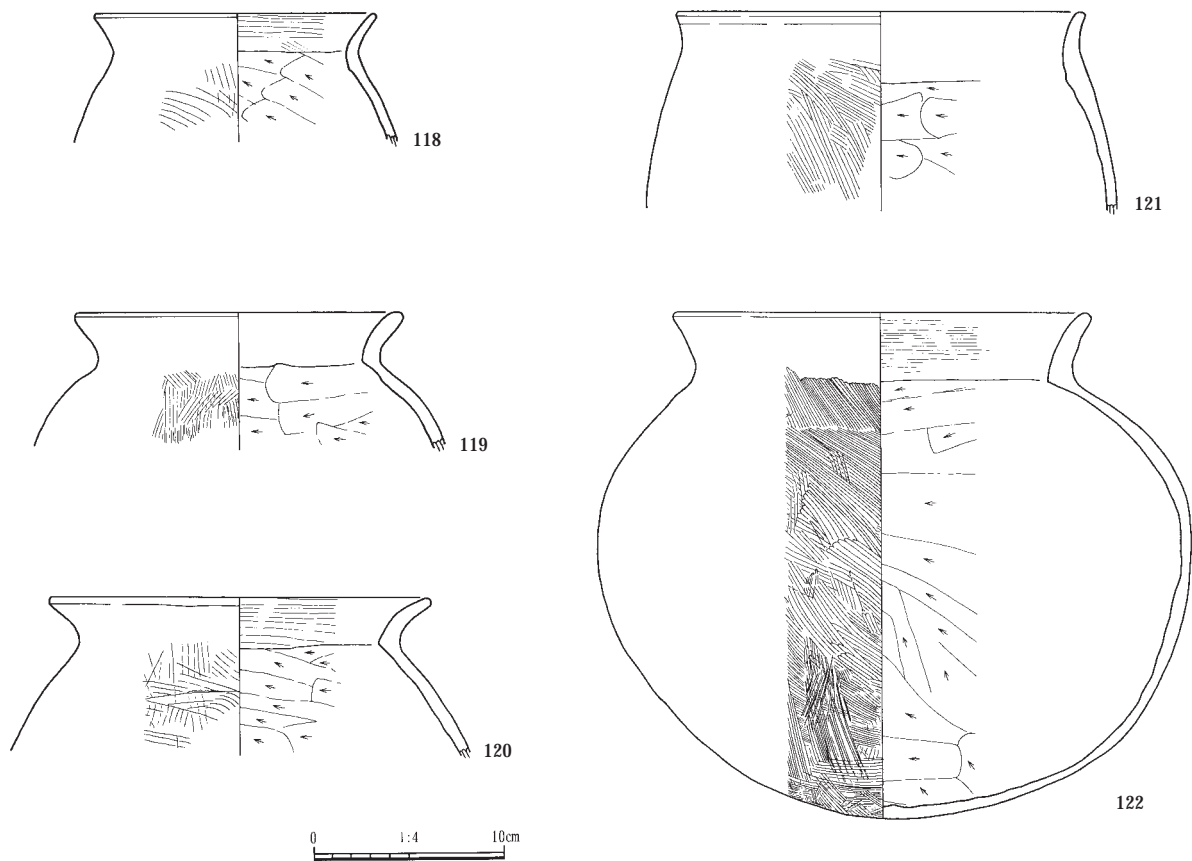
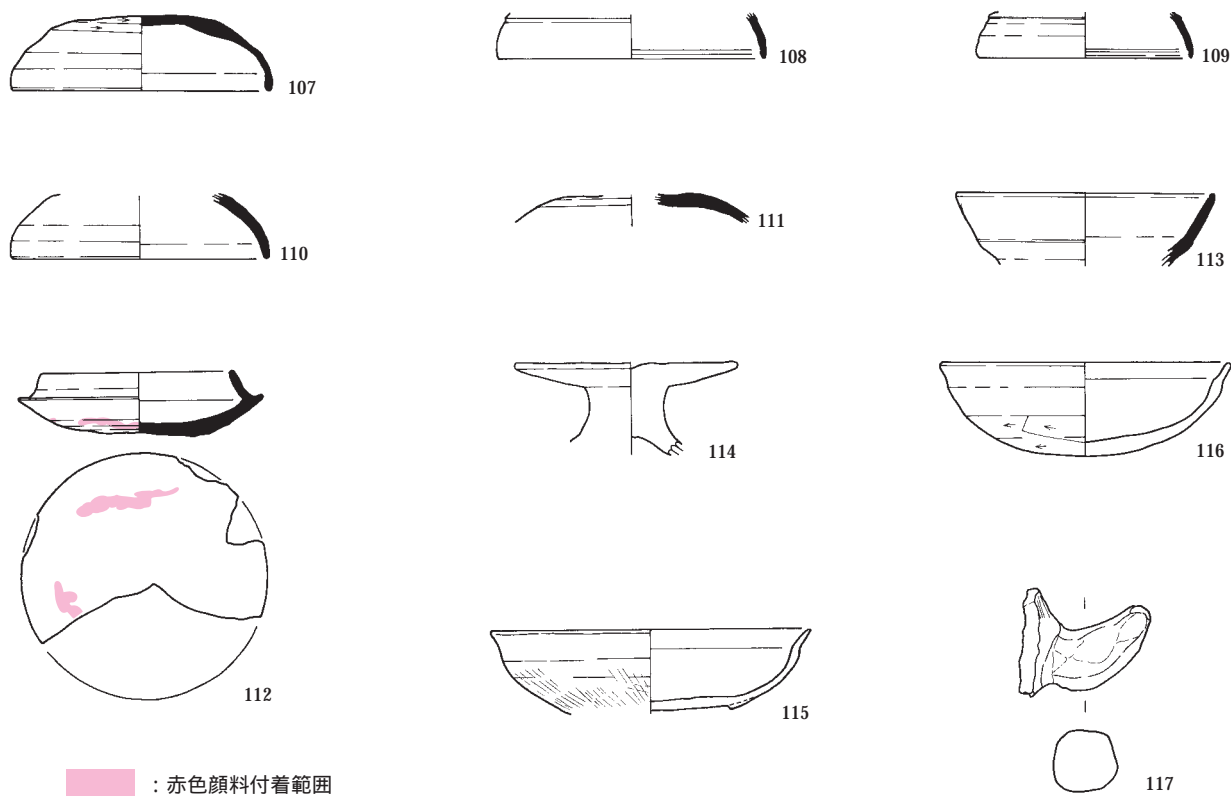


図36 竪穴住居 2(3)

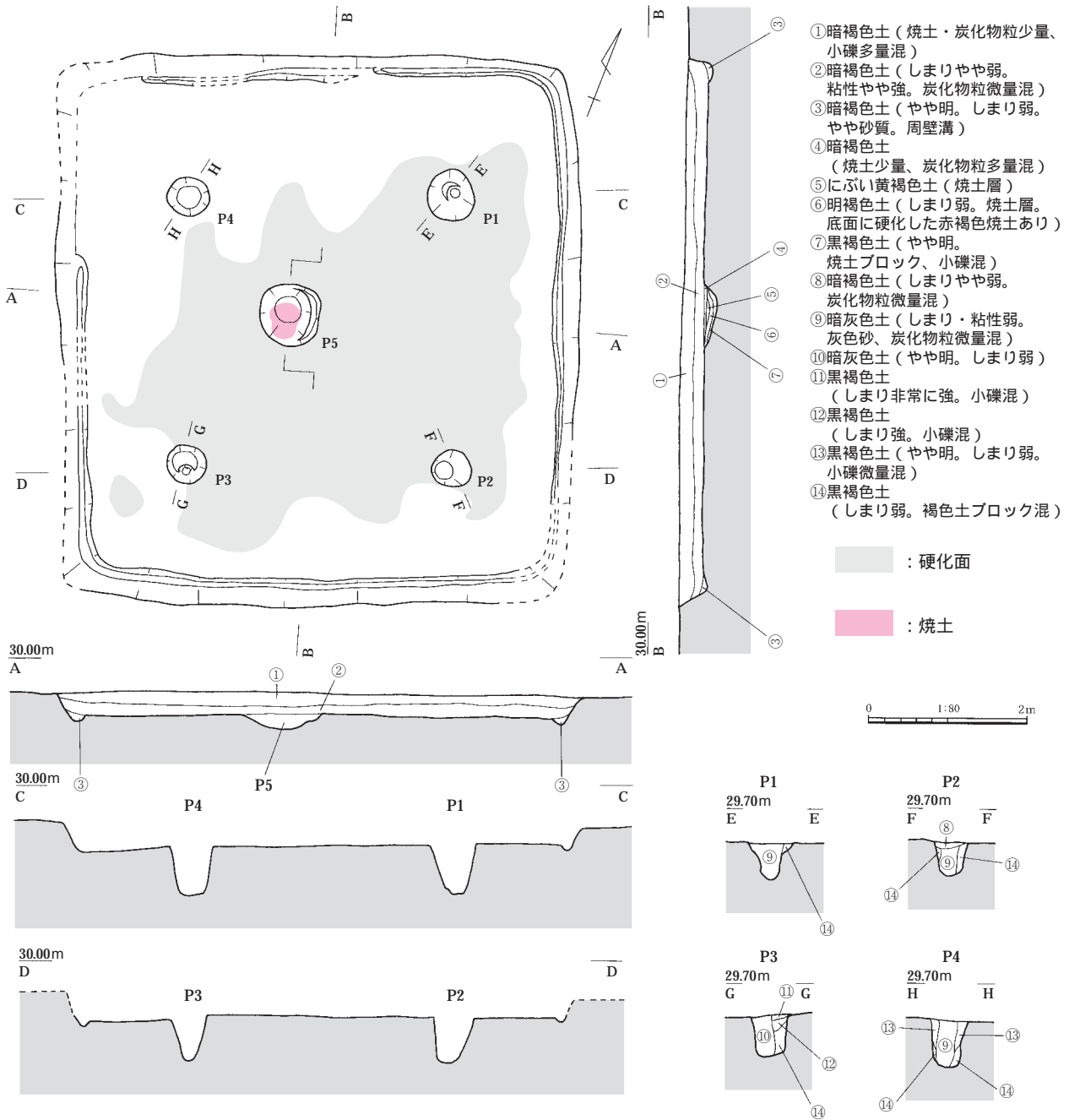


図37 竪穴住居 3(1)

祀的な意味合いが強い遺物である（谷本1988・古川1995）。したがって、本住居では廃絶に際して儀礼的な行為が行われた可能性が指摘できるかもしれない。113は甕の口縁と思われる。

土師器は甕、高杯、碗、甑などが出土している。114は特異な器形で、平たい円盤状の受け部に脚がつく。受け部が器の形をなさないで器台とした。厚手のつくりで焼きが非常に良く、胎土の様子もほかの土師器と異なる。115は高杯の杯部。碗形で口縁内面端部は稜がついて外反する。脚部との接合面にケズリの痕跡が残る。116は碗で、口縁内面端部に段をもつ。117は甑の把手部分。118～122は甕。すべて単純口縁である。121は口縁がほぼ直立し、肩部をもたないので、長胴甕であろう。ほかは口縁が頸部で屈曲して外反し、口縁端部をすぼめて収め、なで肩の器形をなす。ほぼ完形の122は胴部の径が大きく幅広の球形をなす。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は古墳時代後期末のものと考えられる。

（北）

竪穴住居3（図37～41、図版14～17・52～54・56、カラー図版1・2、表35～37・61）

<形態と構造>

E区南西隅、P10・11グリッドに位置する。北西隅部が調査地外に広がるが、平面形は方形を呈する竪穴住居である。掘り方上面での規模は長軸7m、短軸6.5m、床面では長軸6.3m、短軸5.8m、床面積は36.4㎡を測る。上面は削平を受けているが、検出面からの深さは25～35cmを測る。同時期の竪穴住居は5m前後のものが多いので、規模は大きな部類に入るであろう。

埋土は暗褐色土系の2層に分けられる。いずれの層とも自然堆積と考えられる。埋土中からは多くの遺物が出土しており、遺物からは大きな時期差は見られないことから、短期間に埋まったものと考えられる。

床面からはP1～5と周壁溝を検出した。P1～4は主柱穴で、P1は径66×59cm、深さ64.0cm、底面の標高28.64m、P2は径52×45cm、深さ55.7cm、底面の標高28.74m、P3は径51×47cm、深さ56.4cm、底面の標高28.76m、P4は径53×49cm、深さ62.9cm、底面の標高28.63mを測る。柱間は、P1 - P2が3.5m、P2 - P3が3.2m、P3 - P4が3.4m、P4 - P1が3.3mを測る。いずれも平面形は円形に近い形態で、土層断面からは柱痕もしくは抜き取り痕が確認できた。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径76×72cm、深さ13.5cm、底面の標高29.16mの隅丸方形を呈し、東側が二段掘りになっている。5cm程の厚さの焼土層である⑤層が、④層にパッキングされるように堆積している。焼土がみられるため、P5は火処であったと思われる。周壁溝は幅20cm前後で、深さ3～6cm、北西部を除きほぼ全周している。

貼床は確認されなかったものの、主柱穴をむすんだ内側とそのやや外側では床面が硬化している範囲が確認された。硬化範囲は床面の標高がほぼ29.30mであるが、周溝の肩付近では標高が29.20mとなっており、中心から外に向けて床面のレベルは下がっている。この硬化範囲部分は、生活スペースとして踏み固められたものと考えられる。P3の⑪層も掘り方込め土が硬化したものである。

<遺物の出土状況>

①②層中からは多くの遺物が出土している。床面直上出土のもの以外の埋土中出土のものはポイントで取り上げた。埋土中出土遺物はきわめて量が多かったが、いずれも土器の部分的な破片で、個体数も多い。住居の埋没過程で、投棄されたか、流入したものであろう。

床面直上出土の遺物は須恵器を中心に、土師器甕、甑の把手、鉄鏝などがある。遺存状態がよく、須恵器はいずれもほぼ完形に復元でき、土師器甕も完形となった個体が1個体ある。原位置性の高いと思われる須恵器や完形に復元できた甕は床面の縁辺寄り、特に床の四隅で出土している。床の北東隅では有蓋高杯の蓋159と壺162が近接して出土した。159は裏向きで、162は正位であった。南東隅では彩色記号の施された杯身156が正位で出土したほか、半分に割れた有蓋高杯の蓋160の破片の一方が裏向きで出土している。南西隅付近では、160のもう一方の破片が裏向きで出土したほか、杯身158が伏せた状態で出土した。西壁際の中央付近では、有蓋高杯161の杯部のみが伏せた状態で出土している。脚部は直線距離で東に約33m離れたP23から出土したものが接合している。遺構間で接合が見られるので、両遺構の関係が密接であることが分かる。両者は同時期に廃絶された可能性が高く、その際に161を杯部と脚部に折り分けてそれぞれ廃棄した可能性が高い。P4の西側ではほぼ完形に復元できた土師器甕161がつぶれた状態で出土した。住居中央のP5の上面からは有

第5章 第3調査地の調査

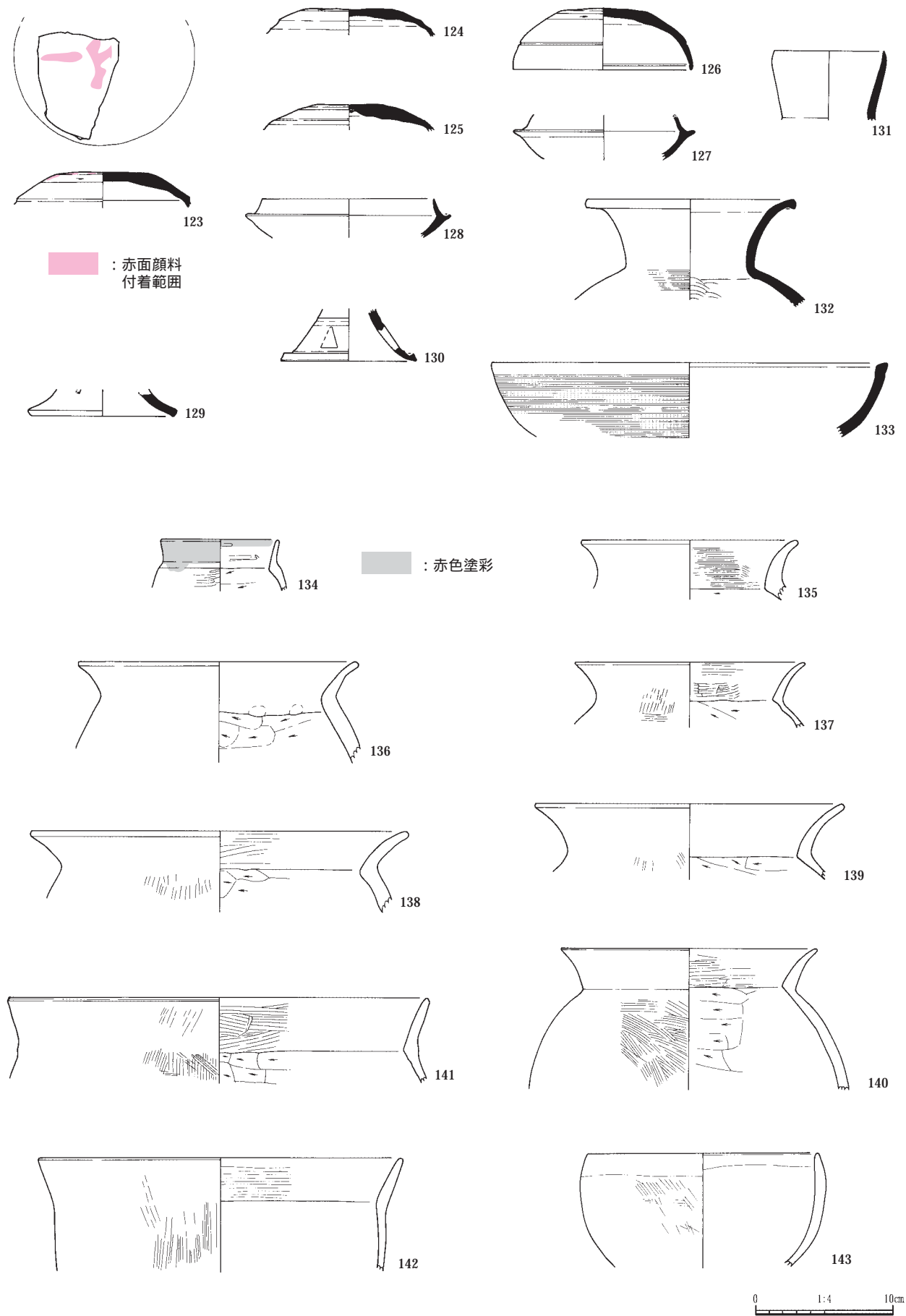


図38 竪穴住居 3(2) 上層出土遺物

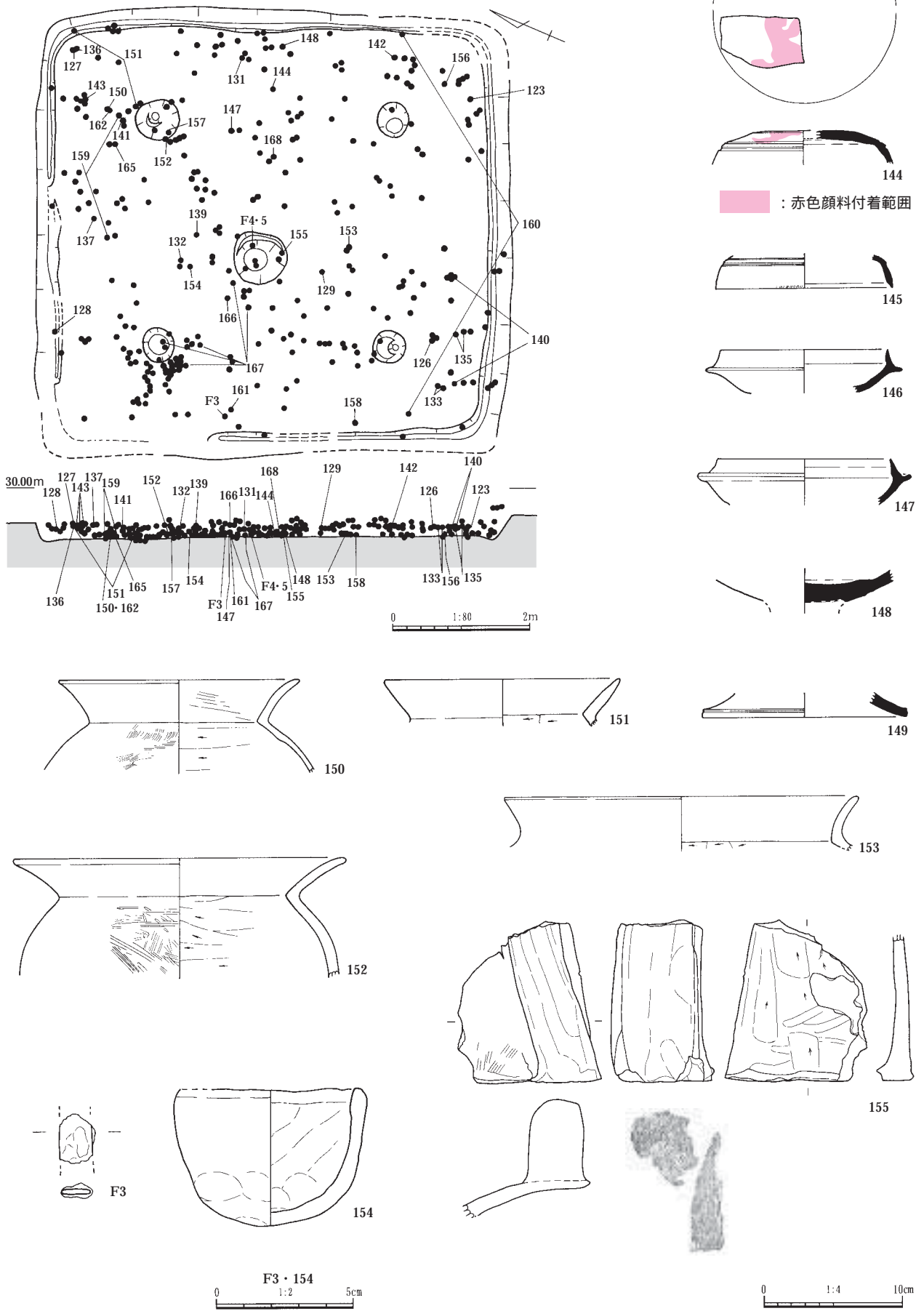


図39 竪穴住居3(3)中～下層出土遺物

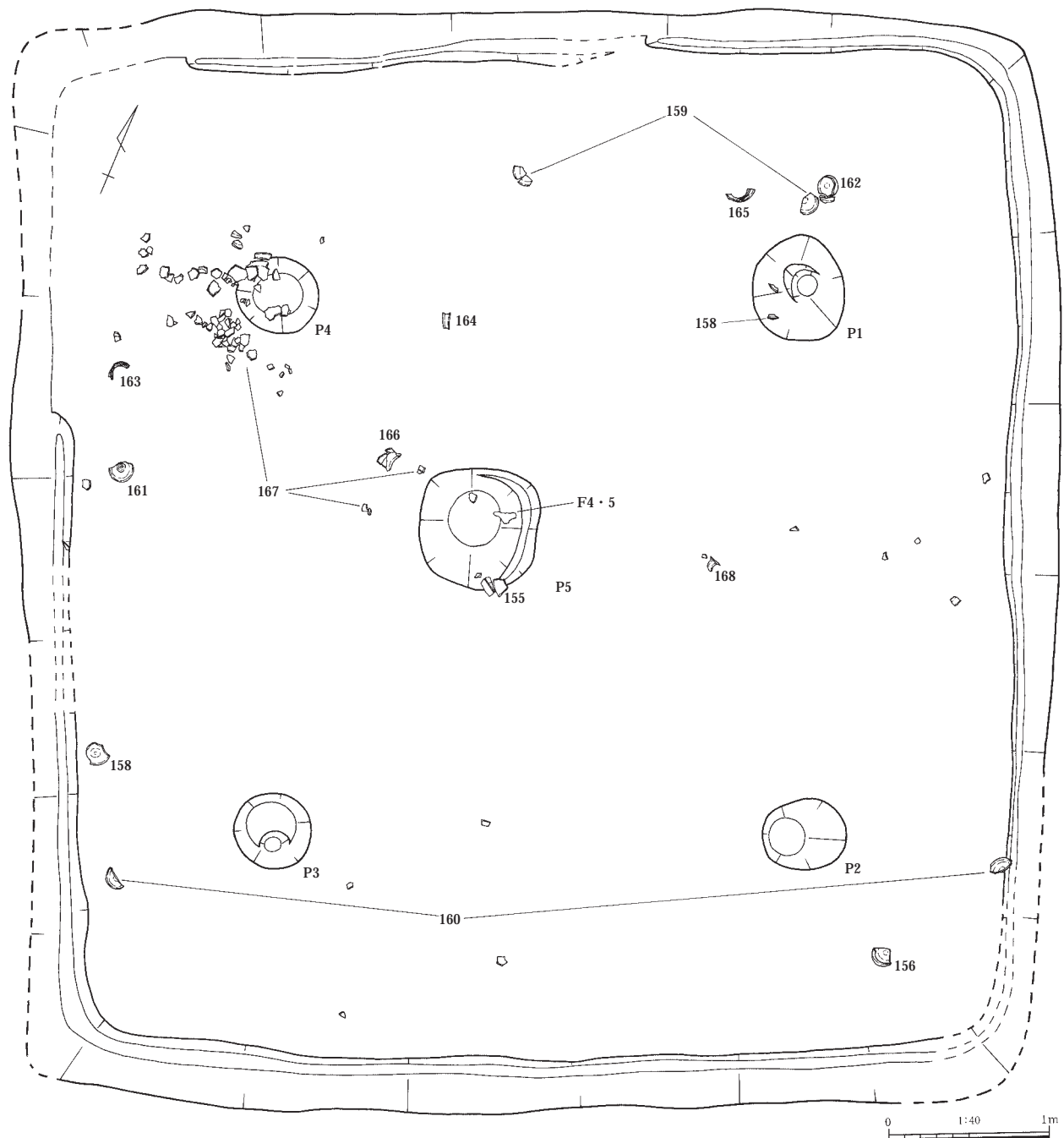


図40 竪穴住居3(4)

茎三角式鉄鏃（F4）と有茎柳葉式鉄鏃（F5）が2本まとまって出土している。出土した時点では両者は錆で固着していた。またP5の肩付近からはやや浮いてはいるものの、移動式竈の右基部が出土している。

原位置性の高いと考えられる遺物の出土状況からは、意図的な廃棄行為があった可能性が考えられる。遺構間での接合が見られた161は明らかに意図的な廃棄行動があったことを示しているほか、彩色記号を持つ156や、F4・F5の2本の平根式鉄鏃の出土も特異な状況であろう。彩色記号須恵器は古墳などに副葬・供献されるもので、集落内出土例はほとんど知られておらず（谷本1988・古川1995）、また平根式鉄鏃も集落内で出土することは一般的ではない。こうしたことから、住居の廃絶にともなってこれらの遺物を用いた廃絶祭祀が行われた可能性も考えられるだろう。

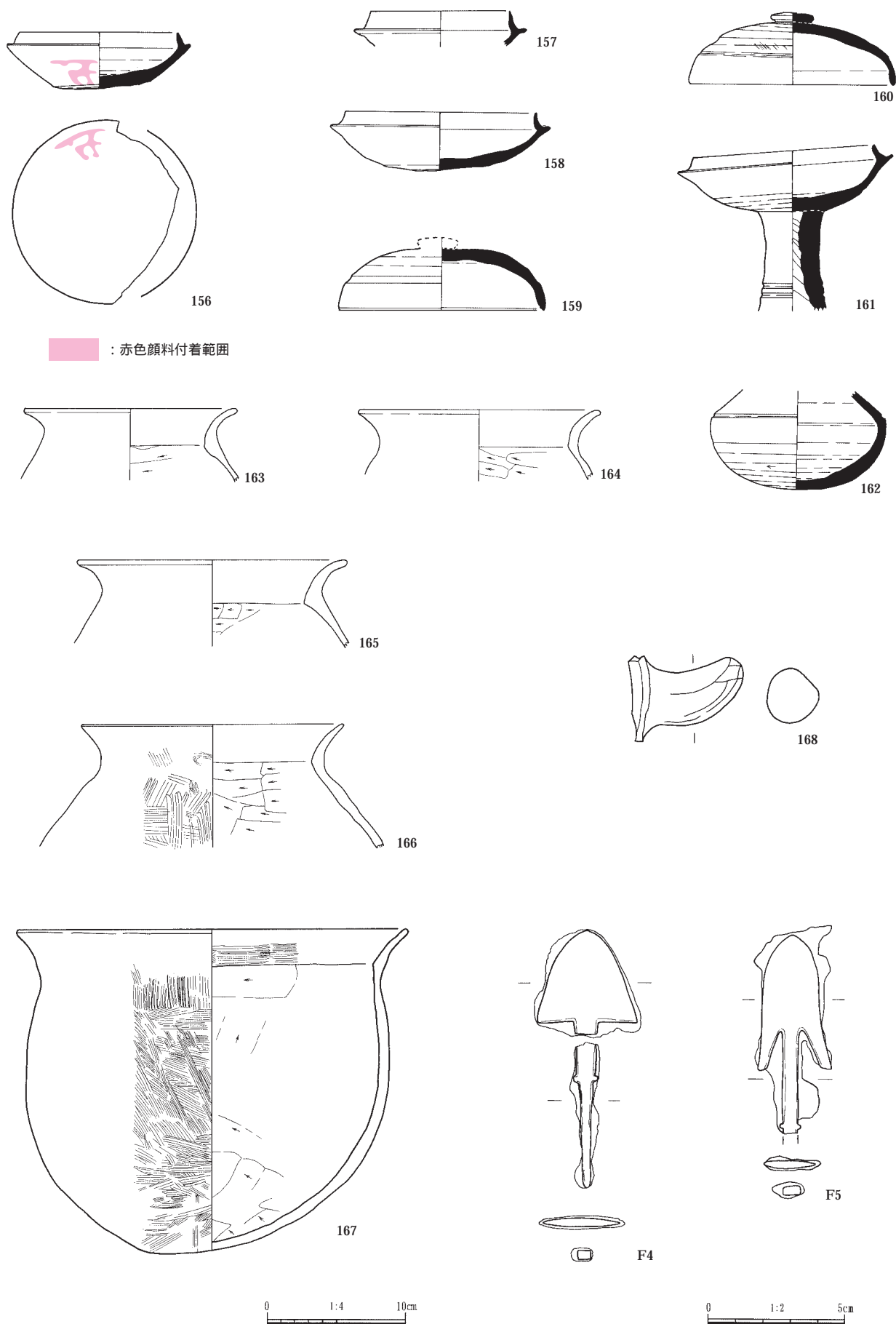


図41 竪穴住居 3(5) 床面直上出土遺物

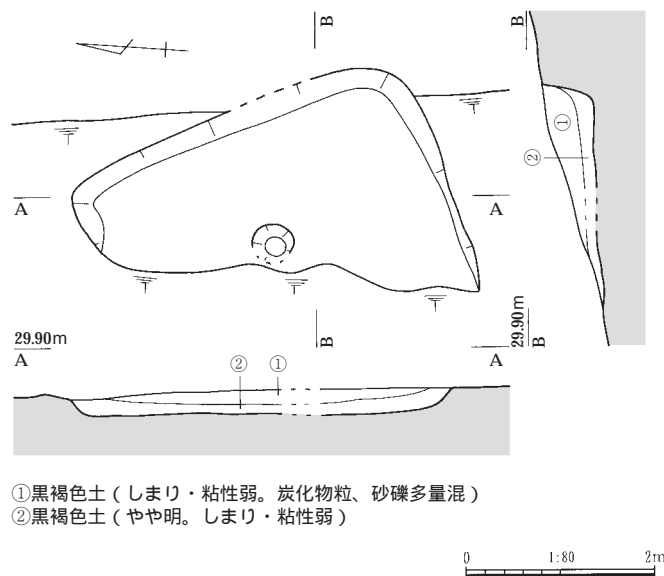


図42 竪穴1(1)

< 出土遺物 >

埋土中からは多くの遺物が出土した。図化可能なものの大半は示している。床面直上出土のものは図化し得たものはすべて掲載した。

123～143は①層出土の土器である。123～133は須恵器である。123～126は杯蓋。いずれも大谷分類のA 5型ないしはA 6型の特徴をもつ。123は彩色記号をもち、天井部に赤色顔料で「×」状の記号を施している。127・128は杯身。いずれも杯蓋と同一の型式に収まる。129・130は高杯脚部。131は瓶類か壺の口縁。132は壺。133は大型の高杯杯部か。外面にはカキメが施され

る。須恵器はいずれも大谷編年出雲4期、陶邑編年TK209型式併行期に位置づけられる。134～143は土師器である。134は小型の甕で口縁に赤色塗彩が見られる。135～142は甕でいずれも口縁端部をすぼめて収める単純口縁。135～140のように頸部が「く」字状に大きく屈曲するものと、141・142のように頸部がほとんど屈曲せず口縁が緩やかに外反するものがある。143は^{まり}壺である。

144～155・F3は②層出土の遺物である。145～149は須恵器。144・145は杯蓋。144は2本の明瞭な沈線が肩部に入り、天井部は全面がヘラケズリで処理されるので、大谷分類のA4型にあたる。なお、この個体の天井部には赤色顔料が付着している範囲が認められた。ただし、その範囲は明確な記号状をなさない。145には端部にわずかな段が見られる。天井部を欠くが、残存部位から判断すると大谷分類のA3a型にあたる可能性が高い。146・147は杯身。148は高杯杯部である。149は高杯脚部。これらの須恵器はおおよそ出雲4期、TK209型式併行期に比定される。150～154は土師器。150～153は甕で、150～152は頸部が大きく屈曲する。153は口縁が短く外反する。154は手づくね土器。155は移動式甕の右前基部である。F3は薄板状の不明鉄片である。刀子か鉈の破片か。

156～167、F4・F5は床面直上出土の遺物である。156～162は須恵器。156～158は杯身。156は側面に赤色顔料で「干」状の彩色記号を施している。明瞭に見えるこの部分以外にもうっすらと赤色顔料の付着している部分が観察できる。この赤色顔料は蛍光X線分析の結果から、酸化鉄である可能性が考えられる(第6章第1節参照)。159・160は有蓋高杯の蓋。159はつまみ部が剥落している。胎土や色調から161とセットになる可能性がある。160はボタン状のつまみがつき、肩部にヘラによる弱いキザミが施される。161は有蓋高杯で、前述のように杯部が本遺構から、脚部がP23からの出土。脚部は折り取り後、さらに杯部との接合面側から打撃を受けて打ち欠かれている。162は壺(短頸壺?)と考えられる。これらの須恵器はいずれも出雲4期、TK209型式併行期のものであろう。163～167は土師器甕。163～166は頸部が屈曲する。167は口縁が緩やかに外反するタイプで、口径が大きく、幅広の器形をなす。F4・F5はともに平根式の鉄鏃。F4は有茎三角式でF5は有茎腸袂柳葉式、ともに関に棘状突起をもつ。

これらの出土遺物の時期からこの竪穴住居は古墳時代後期末のものと考えられる。(三木)

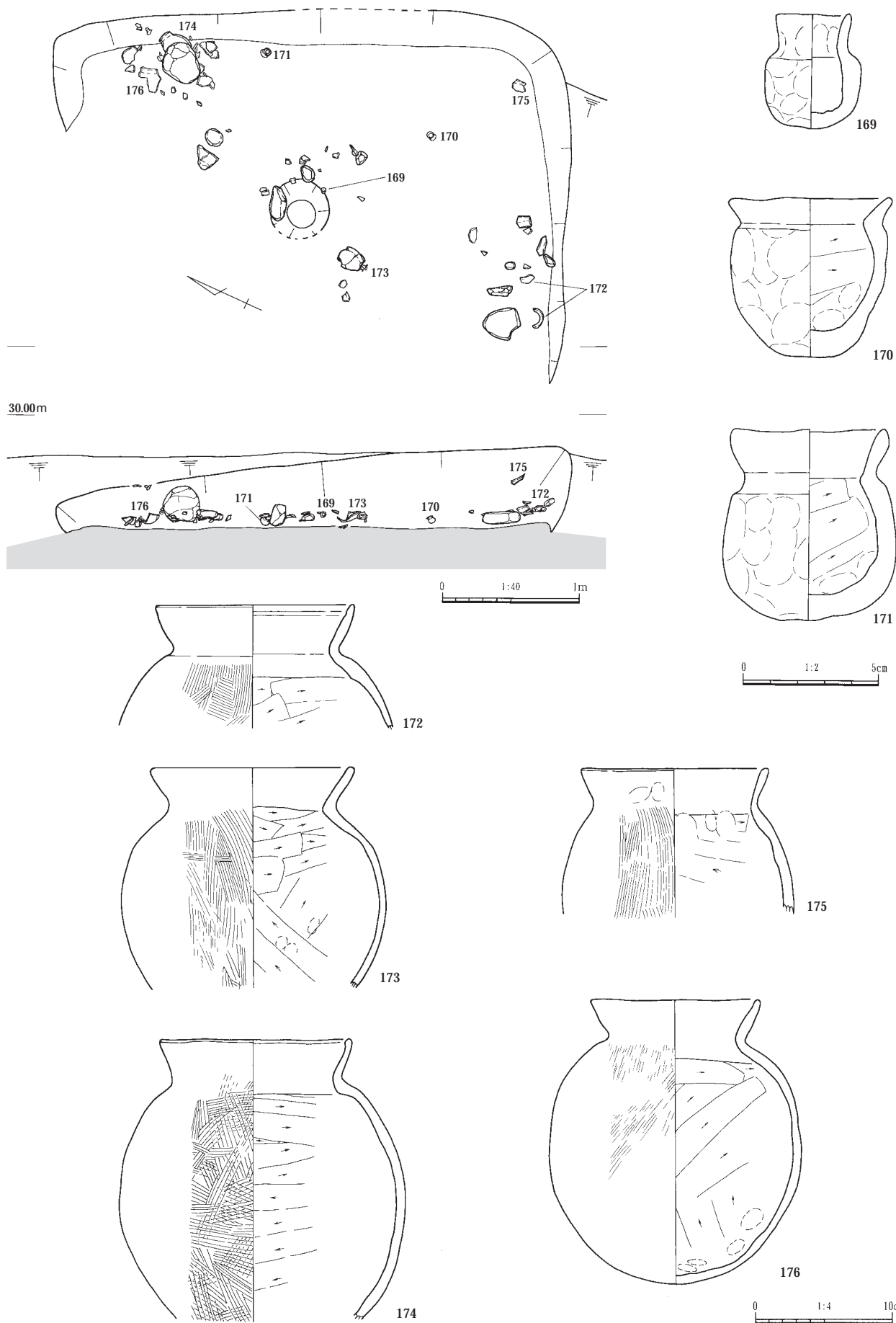


図43 竪穴1(2)

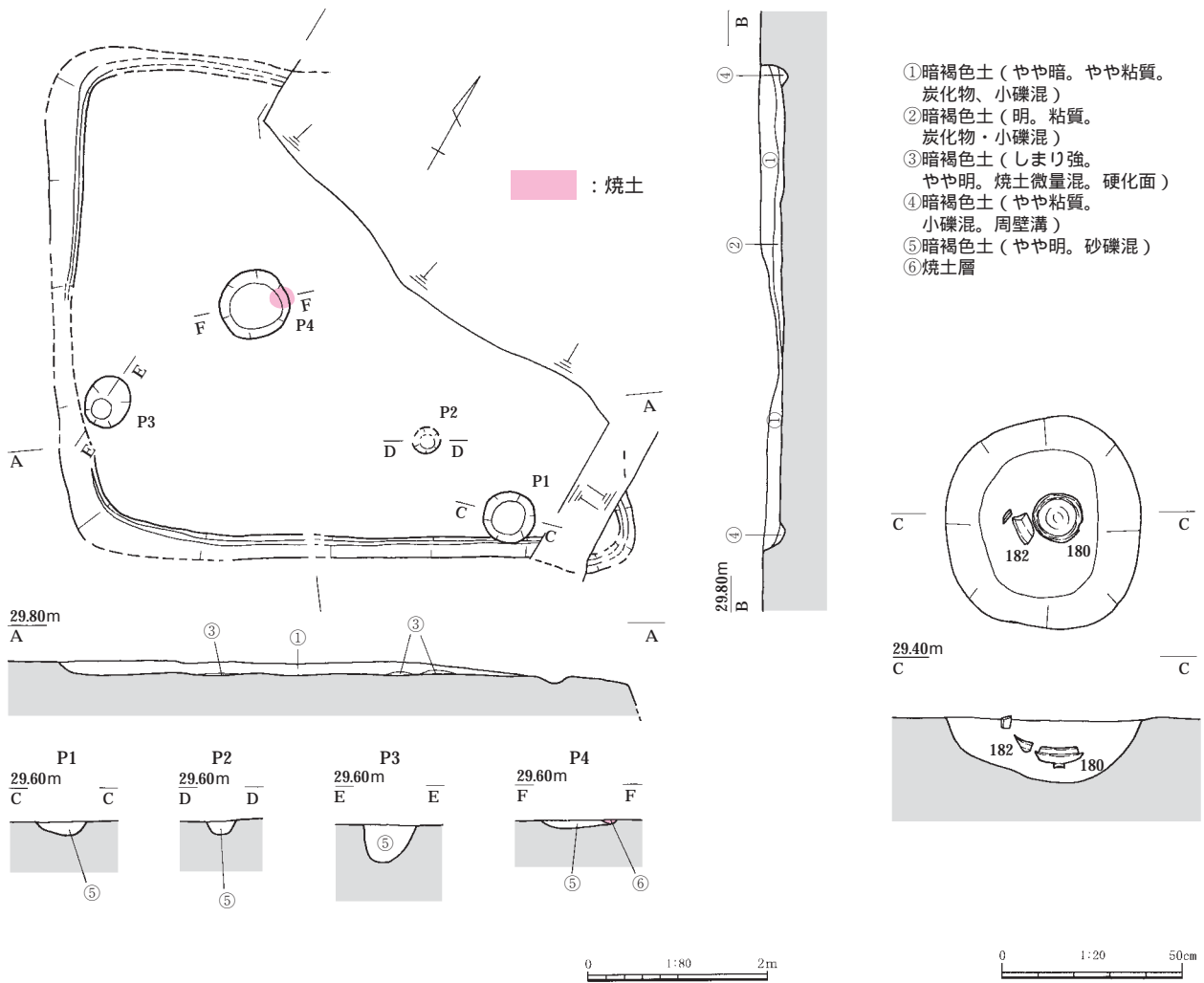


図44 竪穴 2(1)

竪穴 1 (図42・43、図版21・22・55・56、カラー図版 2、表37)

<形態と構造>

竪穴住居状の掘り込みをもつが、床面に竪穴住居のように規則的に柱穴をもたず、上屋構造を推察するのに十分な情報を持たない遺構を竪穴とする。第1遺構面では2基が見ついている。

竪穴 1はC区、J5グリッドに位置する。ちょうど圃場整備による段切りを受けた部分にあたったため、遺構は斜めに削られている。東を高く、西に向けて低く削られており、遺構の西側3分の1ほどは床面まで完全に削られている。平面形は方形で、残存している部分で長軸(南北)3.8m、短軸(東西)2.8mを測る。遺存状態の最もよかった東端部で検出面から床面まで深さ約50cmを測り、埋土には砂礫が多く含まれる黒褐色土が2層見られた。床面は地山削り出しで、残存部分の床面積は5.4㎡を測る。床面でピット1基確認した。深さは5cm程度と浅く、柱穴とは捉えられない。埋土は②層であった。ほかに床面施設は確認していない。

<遺物の出土状況>

ほぼ床面直上から土師器が出土している。特徴的なのは完形の手づくね土器(169~171)が3個体出土していることだろう。169が中央のピット付近で、170が南東よりで、171が東壁沿いでそれぞれ見ついている。ほかに甕が5個体出土した。このうち174と176は北東隅でまとまって見つ

っている。とくに174は大型の礫の下から見つかっている。この礫は意図的に遺構内に投棄されて土器を破壊したものである可能性もあるかもしれないが、ほかにこのような状況で出土した土器はないので人為性を積極的に評価できない。いずれにしても、174の甕は礫によって押しつぶされて床に密着していたため、原位置性が高いといえる。

本遺構では手づくね土器が出土したことから、祭祀的な行為が行われたことを想定できる。土器の出土状況を積極的に評価すれば、廃絶儀礼に関わるものであった可能性が指摘できるだろう。

<出土遺物>

出土遺物はすべて土師器である。169～171は手づくね土器。いずれも成形、調整が粗雑で、器面の凹凸が著しい。169は器高4.2cmと非常に小型で、口縁がほぼ直立し、高く伸びる。壺を模したものであろうか。170と171は甕を模したと思われる。170は口縁が短く外反し、胴部がほとんど張り出さず、細長い器形を呈す。171はこの遺構内で共伴する土師器甕とほぼ同じ形態を呈する。172～176は甕である。いずれも単純口縁で、口縁が「く」字状に屈曲してほぼ直線的に立ち上がる。端部はやや肥厚させて丸く収める。口縁部から頸部にかけては厚めでしっかりしたつくりをなす。外面のハケ目は条間が広く、深くはっきりと施されている。こうした特徴から、これらの甕は中期末のものであろう。

本遺構の時期は出土遺物から中期末のものと考えられる。

(北)

竪穴2 (図44～47、図版22～24・54～56・カラー図版2、表37・38・59・61)

<形態と構造>

D区北端、M9・10グリッドに位置する。北東部1/3は排土搬出の際に重機で破壊してしましたが、掘り方上面の規模が長軸6.2m、短軸5.6m、床面が長軸5.8m、短軸5.0m程度の長方形の竪穴になると想定できる。検出面からの深さは最も残りの良い北西部で25cm程度、残存床面積は21.3m²であるが、本来は28.9m²程度の規模になると想定される。同時期の竪穴の中では規模は大きい部類に入るであろう。

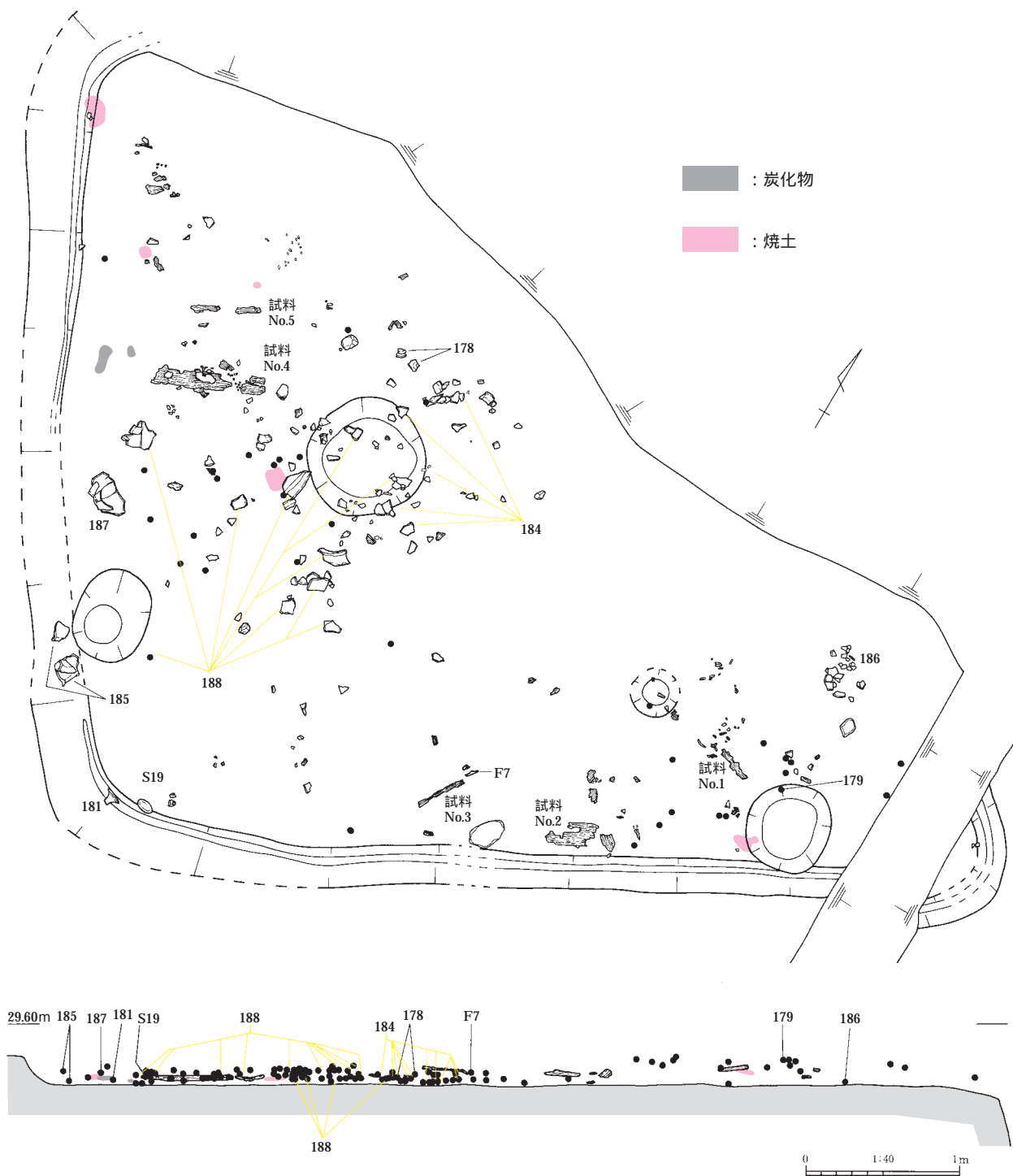
竪穴部埋土の残りは悪く、暗褐色系の2層が確認できた。①層は北側でしか見られない。

床面からはP1～P4と周壁溝を検出した。周壁溝は幅20～15cm、深さ2～6cmで一部検出できなかったもののほぼ全周していると考えられる。ピットは、P1が径55cm、深さ18cm、底面の標高29.17m、P2が径32cm、深さ17cm、底面の標高29.07m、P3が径60×48cm、深さ42cm、底面の標高28.76m、P4が径76cm、深さ11cm、底面の標高29.11m、を測る。埋土の一部に焼土層が確認できた。P3がやや深いものの、その他はいずれも浅く、配置からも支柱穴になるとは考えられにくい。周辺にも関連すると思われるピットが検出できなかったため、竪穴とした。

貼床は確認できなかったものの、竪穴住居2・3と同様に硬化した層を確認している。床面としている地山層は礫を多く含むため、平面での範囲は明確にはできなかったが、断面で確認している(③層)。

<遺物の出土状況>

埋土中からは多くの遺物が出土しており、いずれも床面からはわずかに浮いているが、ほぼ床面直上と考えてよいレベルでの出土である。平面的な分布は特に西半部分に集中がみられる。P4周辺からは移動式竈(188)の破片が散らばった状態で出土しており、その西側からは甕(187)が出



竪穴 2 内出土炭化材樹種同定結果

試料	樹種	試料	樹種
1	広葉樹	4	コナラ属アカガシ亜属
2	ケヤキ	5	ヌルデ近似種
3	ヌルデ近似種		

図45 竪穴 2(2)

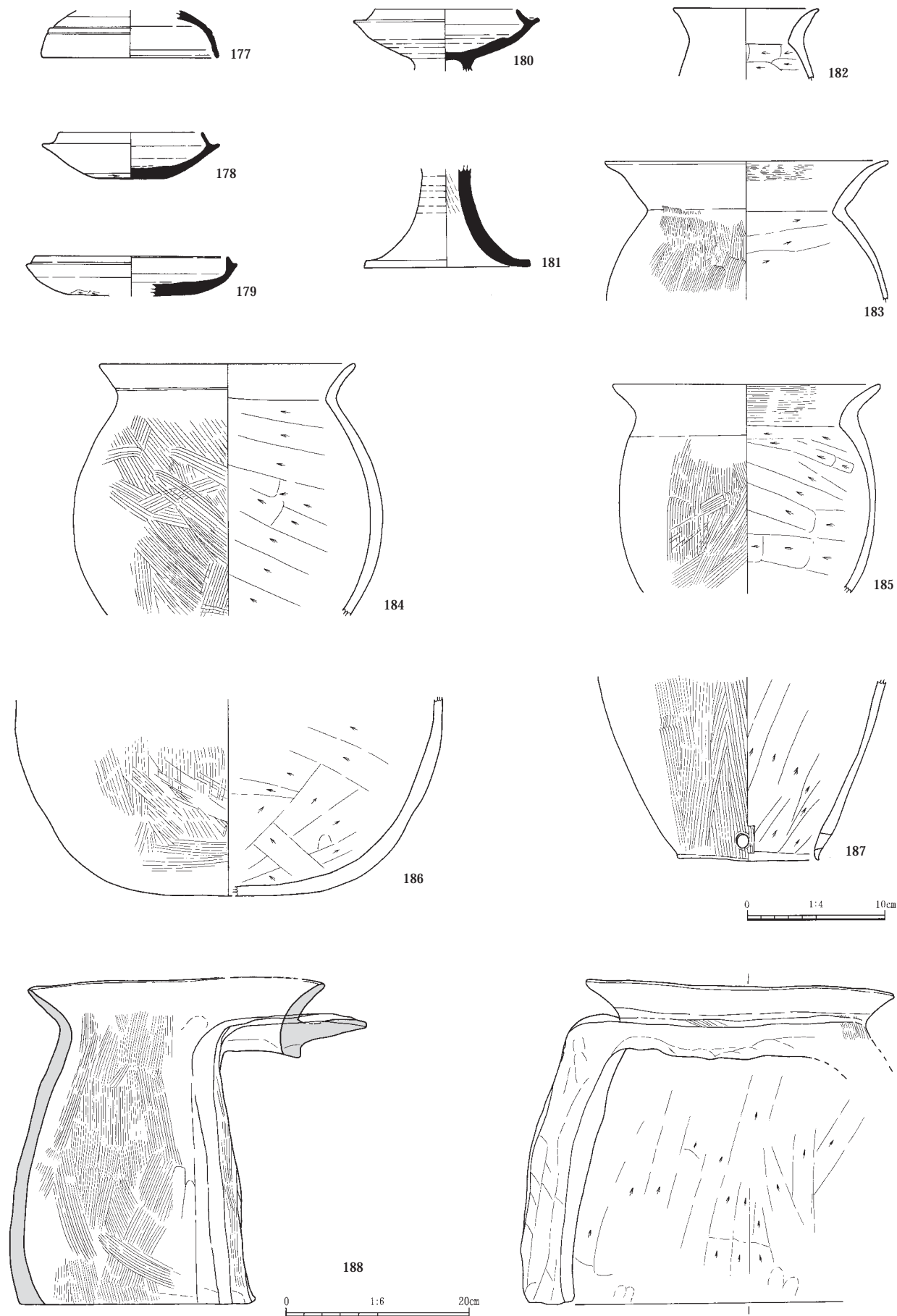


図46 竪穴 2(3)

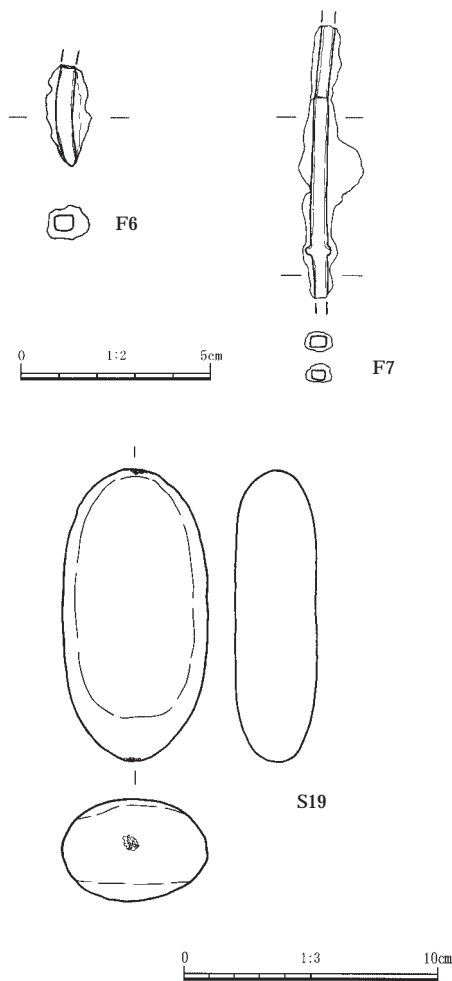


図47 竪穴2(4)

土している。P1からは高杯の杯部(180)が正位で出土している。

床面直上からは炭化材が、下層からは焼土や炭化物が検出されている。このことから竪穴2を構築する上での何らかの部材があり、焼失した可能性がある。短絡的に考えると、上屋構造の一部であると考えられるが、竪穴遺構には上屋を支持する柱穴が認められないことから、どのような構造になっていたのかは判明していない。そのため一概に上屋構造のものとは判断できないであろう。検出された炭化材試料のうち5点に関し、樹種同定を行った。その結果、3種類もしくはそれ以上の樹種が使用されていたことが判明した。このことから構築物の部位によって樹種を使い分けていた可能性が考えられるだろう(第6章第2節参照)。さらに試料1・3・5に関しては放射性炭素年代測定を行った。しかし1がやや近い年代値を示した測定結果が出ているものの、3・5は遺物などから見られる竪穴2の年代観とは合致しない(第6章第3節参照)。

<出土遺物>

177~181は須恵器である。177は杯蓋。肩部に2条の沈線を施し、明瞭な稜を作り出している。口縁内面端部にわずかに段をもつ。大谷分類のA3a型にあたる。178・179は杯身である。大谷分類のA5型前後に位置づけられるだろう。

180は有蓋高杯の杯部である。181は高杯の脚部である。長脚で、透かしは見られない。焼成は悪い。これらの須恵器はおおよそ出雲4期、TK209型式併行に位置づけられるだろう。182~188は土師器である。182~186は甕。182は小型の甕で、口縁がやや緩やかに外反し、肩部が張らない細身の器形をなす。184・185は頸部が「く」の字に屈曲するタイプで、胴部が球形をなす。186は鉢ないしは甕の胴部下半で、底部が平たく、鍋状の器形となる。187は甕。口縁側が広がる円筒形の器形をなす。底部の平面形は楕円形をなし、図の横方向が長軸となる。底部端付近には短軸方向に浅木孔として2方の円孔が器体内面側から棒状工具によって施されている。188は移動式の竈である。掛口は外反して甕状口縁を呈し、庇は付け庇、焚き口は立面形が台形に近い。F6・F7は鉄器。F6は鉄鏃の茎と思われる。F7も鉄鏃で、長頸鏃の頸部および茎部片。関に棘状突起がつく。S19は敲き石である。

これらの出土遺物の時期からこの竪穴は古墳時代後期末のものと考えられる。(三木)

掘立柱建物1(図48・49、図版17~19・56、カラー図版1、表38)

<形態と構造>

D区北半中央、M・N9グリッドに位置する。桁行5間×梁行4間で、東桁行が8.34m、西桁行が8.36m、北梁行が6.08m、南梁行が6.06mの建物である。主軸は真北から31度西に傾いている。

床面積は50.7m²を測り、掘立柱建物としては大型の部類に入る。

柱穴の径は60～98cm、検出面からの深さは57.3～86.0cm、底面レベルはP3とP18がやや深いものの、その他は標高29.80m付近でほぼ揃う。平面形は不整円形を呈するものがほとんどである。柱痕・抜き取り痕と思われる埋土がP1～3・5～9・12・14～18で確認できた。柱痕・抜き取り痕の下底の径は8～24cm程度であるので、柱の太さはおおむね15～20cm程度であると想定できるであろう。P14は柱痕が内側に寄り、掘り方が外に広がる形態を呈する。北東隅P1は長軸が隅行方向を向いている長方形の掘り方を持つ。P1のような掘り方の形態は古墳時代以降の大型の建物に多く見られる工法のひとつである。

柱間は桁行1.40m～1.88m、梁行1.45m～1.62mで、梁行の柱間のほうがやや狭くなっている。桁行、梁行ともに対向する柱間距離が近似する。桁行のP2 - P3、P13 - P14の対向する柱間は、他の桁行の柱間よりは幅が狭く、梁行の柱間距離に近い。

柱穴の埋土は、ほとんどに褐色土の覆土(①層)がみられる。⑤⑥層は形態からみて柱痕が抜き取り痕であろう。周りの埋土と比べしまりが弱く、⑤層は粘質が強い。掘り方は暗褐色が主で、やや砂質のことが多い。

束柱は検出されていない事から、側柱建物で、土間か平地床であったことが想定される。柱間距離から大壁形式の建物である可能性がある。

< 出土遺物 >

ほとんどの柱穴から遺物が出土しているが、細片ばかりであり、P2、P3、P8、P9、P10、P16、P18から出土している8点が図化することができた。

189～193は須恵器である。189は短頸壺か。190は体部にキザミが施されている。長頸壺であろう。ともに色調は赤味をおびている。191はかえりがつく杯蓋で、陶邑編年のTK217型式にあたる。192は高杯脚部、193は杯もしくは壺の底部である。194～196は土師器甕で、いずれも頸部が「く」の字状に屈曲する単純口縁のものである。出土遺物はいずれも古墳時代後期末のもので、竪穴住居2・3、竪穴2のものよりも新しいものが含まれる。

5間×4間の建物の出現は古墳時代中期以降であり、類例も少ない。出土遺物の時期から考える少なくとも古墳時代後期末以降のものである。第1遺構面では、古墳時代以降中世になるまで、遺構や遺物が全く確認されていない。埋土から見て中世のものではないのは明らかなので、中世以前の下限である古墳時代後期末のもの可能性が最も高いと考えられる。ただし、出土遺物の時期から判断すると、古墳時代後期末のなかでも、竪穴住居2・3、竪穴2よりはやや新しい段階と考えられる。

(三木)

掘立柱建物2(図50、図版19)

< 形態と構造 >

D区南端、P8グリッドに位置する。調査地外に延びているため規模は不明であるが、桁行3間×梁行1間以上の掘立柱建物である。主軸は真北から66度東に傾く。

柱穴は不整円形を呈し、径はP1が61×60cm、P2が69×64cm、P3が70×66cm、P4は67×59cm、P5が59×57cmを測る。検出面からの深さは37～61cmを測り、底面レベルは標高29.41～29.65mでややばらつきがある。P3・4がほかの柱穴と比べ浅くなっている。P1・2・4では

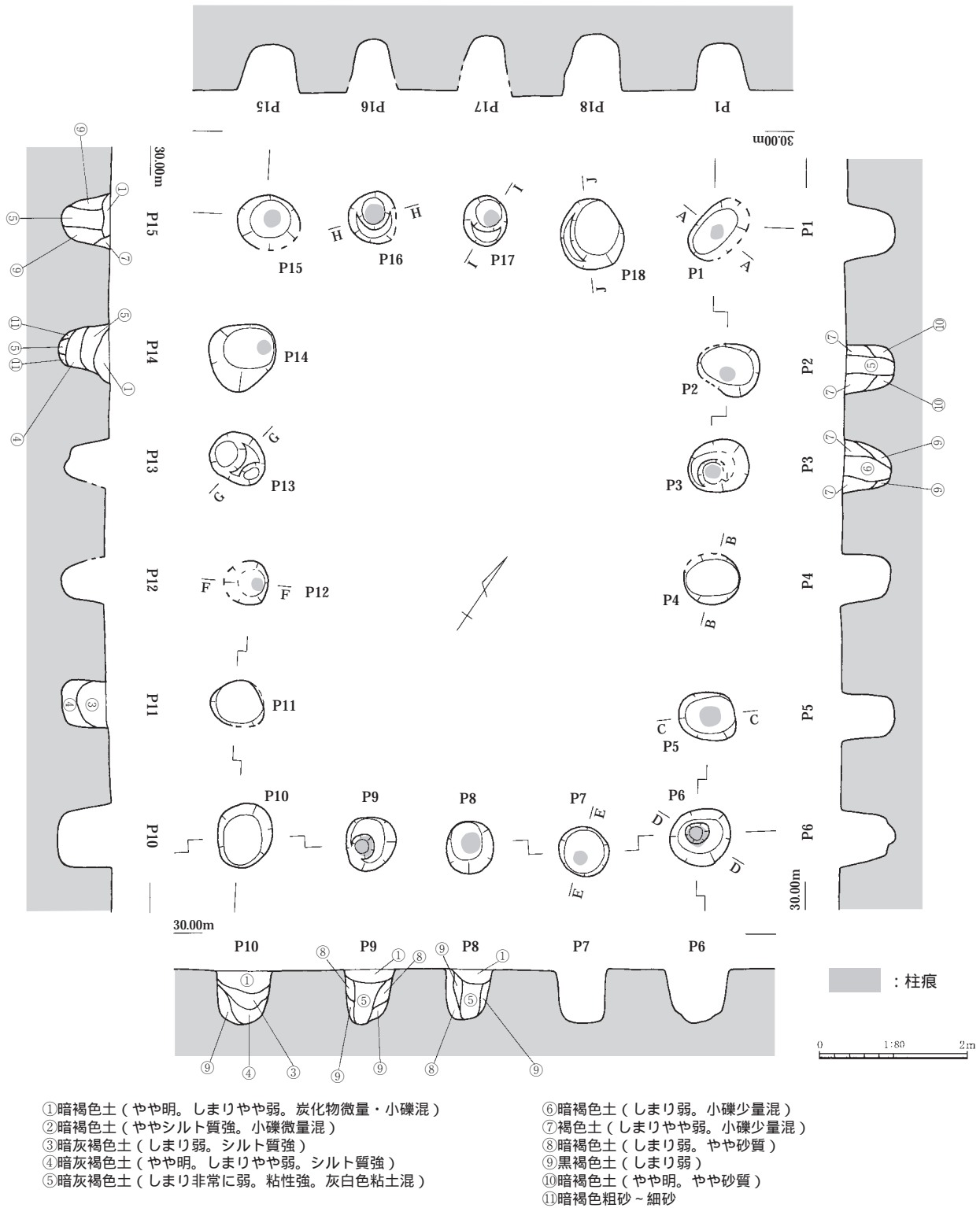


図48 掘立柱建物 1(1)

底部に柱痕跡が見られた。柱痕跡の下底の径は11～18cmである。このことから、柱の太さは15cm前後になると考えている。P 4 上面からは礫が検出されており、底部からは礫に囲まれるような柱痕跡が平面で確認できた。このことから、柱の脇に礫がこめられていた可能性がある。

柱間はP 1 - P 2 が1.50m、P 2 - P 3 が1.66m、P 3 - P 4 が1.50m、P 4 - P 5 が1.50mでP 2 - P 3の柱間がやや広いものの、その他は同じ柱間距離である。

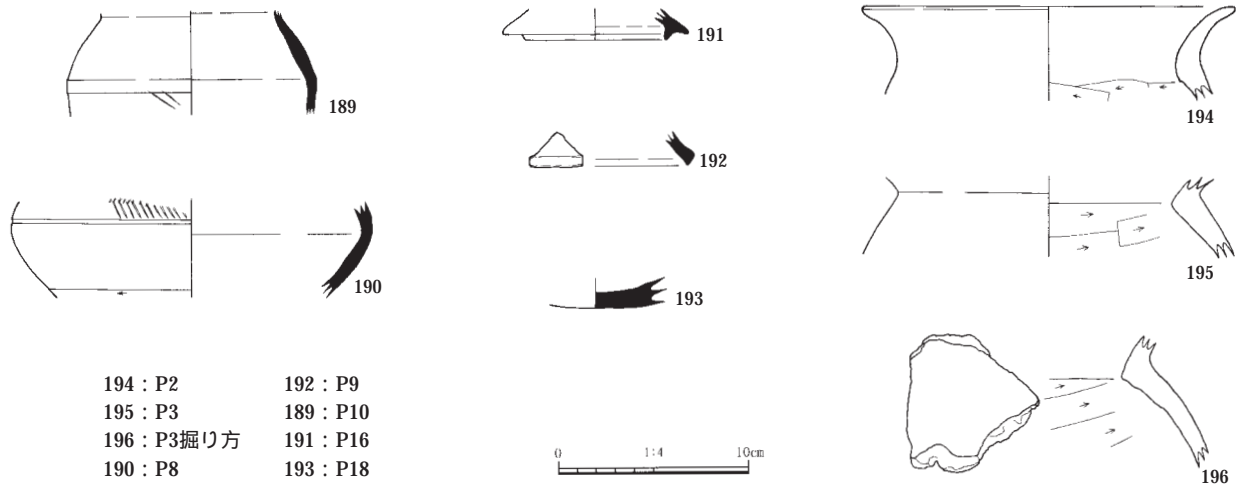
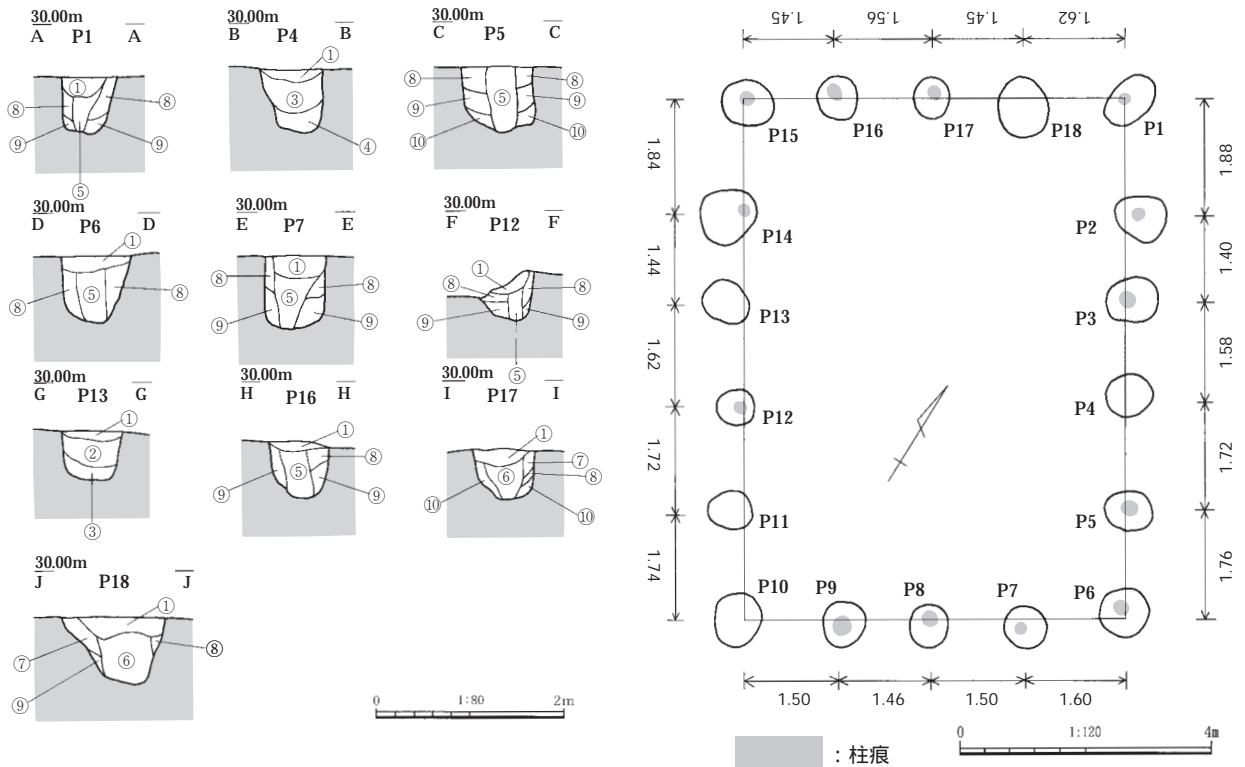


図49 掘立柱建物1(2)

柱穴の埋土はすべて黒色土の単層であり、断面で柱痕は確認できなかった。

遺物は出土していないが、埋土の色調から少なくとも中世までは下らず、第1遺構面では古墳時代以降中世になるまで遺構・遺物が確認できていないことから、古墳時代におさまる可能性が高いと考えられる。掘立柱建物1・3・4と軸方向に近い事などから、古墳時代後期末の新しい段階のものと考えている。
(三木)

掘立柱建物3 (図51、図版56、表38)

<形態と構造>

D区西半、N・O10グリッドに位置する。東側は圃場整備にともなう暗渠に切られているため、正確な規模は不明だが、建物の北側と南側の二面に柱穴列を持つ、桁行3間×梁行2間以上の掘立

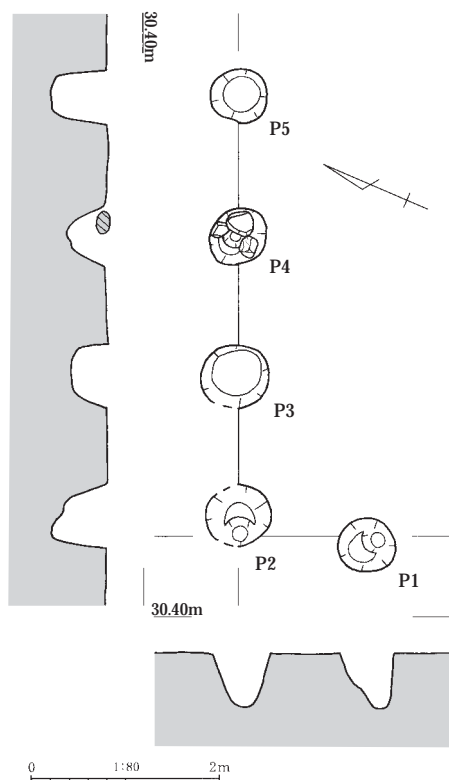


図50 掘立柱建物2

柱建物であると考えられる。主軸は真北から65度西に傾いている。P1とP13・14が竪穴住居2を切っている。北側の柱穴列がP1・11～13(A-A'ライン)、南側の柱穴列がP3・4(E-E'ライン)、P2・5～10・15～18に囲まれる範囲が建物の身舎と考えられる。平面形では、P5～10の梁行部分がやや出っ張った形態を呈している。ピットが重複するものや、近接しているものがあることから、建て替えが行われた可能性がある。

2つの柱穴列部分と考えられる柱穴の径は43～61cmで楕円形・不整円形を呈する。検出面からの深さは14～40cm、底面レベルはP12を除く北側列が標高29.20m付近で、P12と南側列は標高29.09mでほぼ揃っている。柱間は北側列で、P11 - P12が1.45m、P12 - P13が1.32m、P13 - P1が1.43mである。南側列はP3 - P4が1.50mである。北側列は身舎の北側柱列(B-B'ライン)との間隔が1.2m程度、南側列が身舎の南側柱列(D-D'ライン)との間隔が1.9m程度と

なっており、南側の列のほうがスペースが広がっている。北側列のほうが、スペースが狭く、柱穴も南側に比べると浅い事から、南側と北側とでは上屋の形態が違っていた可能性もある。この柱穴列は庇もしくは縁の可能性もある

身舎の柱穴は、径42～71cmで楕円形・不整円形を呈する。検出面からの深さは19～50cm、底面レベルは標高29.0～29.22mである。P9・P16以外は標高29.00m付近で揃う。P5～P10は柱穴が重複しており、添束の可能性もあるが、柱穴の規模がほぼ同じである事から、やや柱筋がそろわないものの、建て替えの可能性のほうが強いと考えている。P9・10の切り合い関係と柱間からP6・8・10からP5・7・9を柱穴にもつ掘立柱建物に建て替えられたと考えている。柱間はP6 - P8が1.23m、P8 - P10が1.50m、P5 - P7が1.44m、P7 - P9が1.50m、P10 - P18が1.58m、P9 - 18が1.70m、P18 - 15が1.42m、P15 - 2が1.67m、P6 - 17が1.35m、P17 - 16が1.40m、P5 - 17が1.40mである。土層断面で、P3～8に抜き取り痕と考えられる層を確認した。抜き取り痕下底の径は10～16cmであることから、柱の太さは15cm程度のものだと考えている。

図示はしていないが、P15とP16を結んだ中間付近、やや東よりにP34があり、底面レベルがほかのものに比べやや深い標高29.26mを測るものの、埋土が掘立柱建物3の柱穴と同じ暗褐色土を呈している事から、床板を支える床束である可能性がある。

<出土遺物>

柱穴内から遺物が出土しているが、いずれも細片ばかりのため、図化できたのはP2・3・8埋土中から出土している3点のみである。

197は須恵器杯蓋で、口縁端部はまるく仕上げられている。198は須恵器杯身で、立ち上がり部分が高く、内傾している。いずれも大谷分類のA6型に相当し、大谷編年の出雲4期、TK209型式

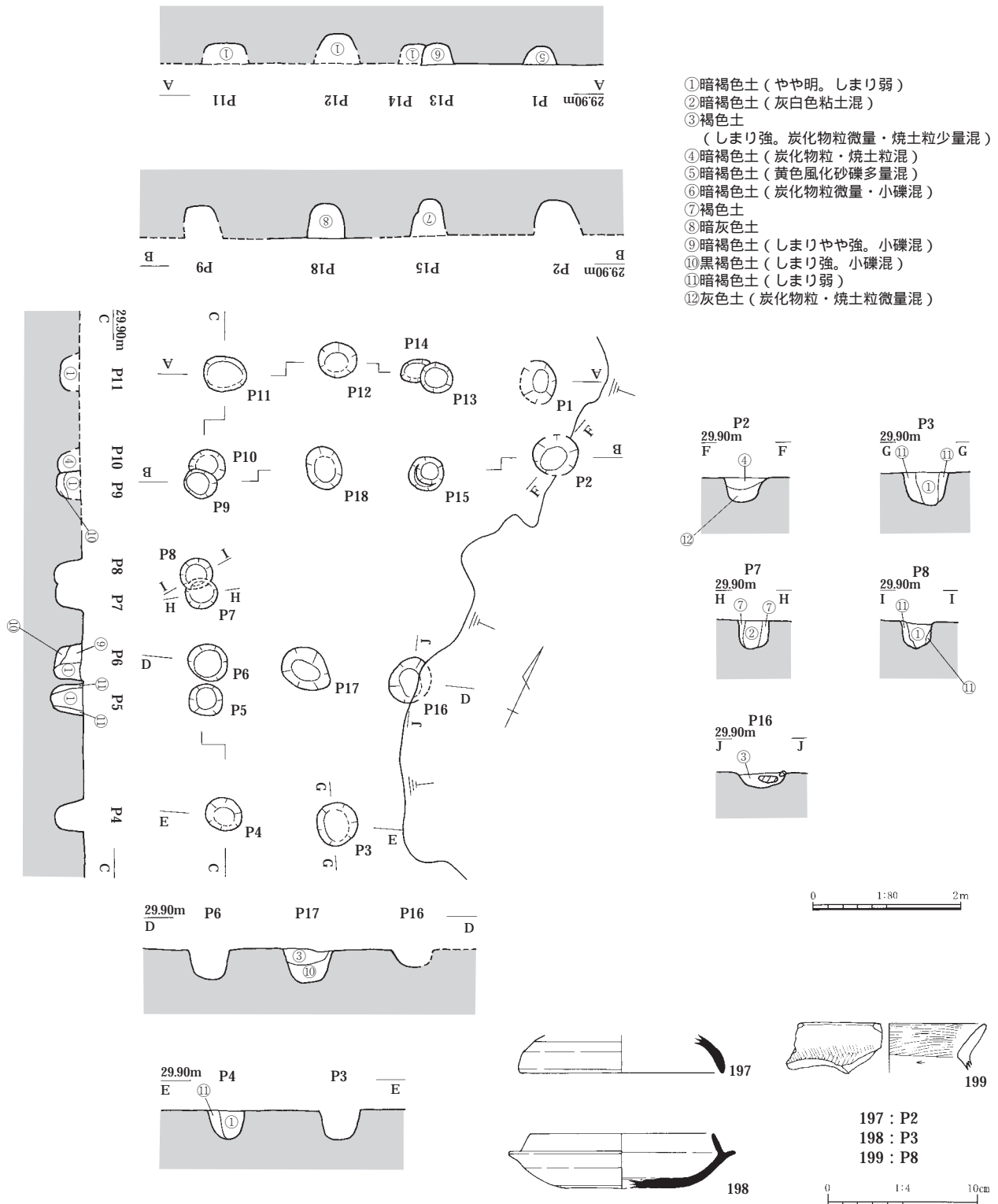


図51 掘立柱建物3

併行にあたる。199は土師器甕で、単純口縁の頸部が「く」の字状に屈曲するものである。

出土遺物の時期や、掘立柱建物1・2・4と軸方向が近似している事から、古墳時代後期末のもので、P1とP13・14が竪穴住居2を切っていることから竪穴住居2よりは新しい古墳時代後期末の新しい段階ものだと考えている。
 （三木）

掘立柱建物4（図52、図版20・56、表38）

<形態と構造>

D区西端、O10・11グリッドに位置する。調査地外に延びているため正確な規模は不明であるが、桁行3間×梁行2間以上の、三面ないしは四面の外周柱穴列を持つ掘立柱建物と想定できる。主軸は真北から28度西に傾いている。P1～5（A-A'ライン）を東側列、P5～7（B-B'ライン）を南側列、P1・9・10（C-C'ライン）を北側列と仮称する。少なくともこの3面に外周柱穴列があると考えられる。P8・11～20が建物の主体となる身舎を構成していたと考えられるが、筋は通っているものの柱穴が検出されなかった箇所もあり、平面形態は不明である。D-D'ラインとE-E'ラインの交点は建物の南東隅になるが、柱穴は検出できなかった。

外周柱穴列部分の柱穴の径は51～76cmで、不整形円形を呈しているものがほとんどだが、方形や菱形に近い形を呈するものもある。検出面からの深さは25.0～49.7cm、底面レベルは標高28.93～29.19mで、29.00m付近でほぼ揃う。柱間はP1-P2が1.68m、P2-P3が1.52m、P3-P4が1.50m、P5-P6が1.73m、P6-P7が1.83m、P9-P10が1.82m、P10-P1が1.65mである。対向する北側列と南側列の柱間距離は、ほぼ近似している。東側列はP1-P2間に比べて、P2-P3・P3-P4間がやや狭くなっており、P2～P4は身舎の東辺（D-D'ライン）の柱間に平行して位置している。この外周柱穴列は庇または縁の可能性はある。

身舎の柱穴は径63～87cmで不整形円形・隅丸方形を呈する。外周柱穴列の柱穴よりはやや大きいものが多い。検出面からの深さは25～47cm、底面レベルは標高28.96～29.16mで、29.00m付近でほぼ揃う。柱間はP11-P12が1.29m、P12-P13が1.30m、P13-P14が1.20m、P17-P18が1.04m、P18-P8が1.04m、P19-P20が1.30m、P20-P11が1.60mである。断面からP12・18・19以外で、柱痕もしくは抜き取り痕が確認できた。柱痕と考えられるものの下底は径が12～18cm程度なので、柱の太さは15cm前後であったと推測できる。P15は添束であると考えている。P16・17が重複していることから、建て替えが行われた可能性がある。

P1やP5のように外周柱穴列の隅に柱穴が存在することから、屋根の形態が、入母屋造もしくは寄棟造の可能性はある。掘立柱建物1～3と比べると、特殊な構造であり、建物の持つ性格も異なったものであったと考えられるだろう。

<出土遺物>

柱穴内から遺物が出土しているが、細片であるため、図化できたものは2点のみである。

200は須恵器高杯脚部で、透かし孔があり、脚端部は内傾する面をもつ。P8から出土している。201は土師器甕口縁部で、口縁は緩やかに外反して、頸部から下は肩部を持たない器形である。P13から出土している。いずれも時期を決定するには十分な情報を持たないが、おおむね古墳時代末期のものと考えられる。

出土遺物の時期と、掘立柱建物1～3と軸方向に近い点から、古墳時代後期末の新しい段階のものと考えている。 (三木)

土坑5（図53、図版24・57、表7・38）

A区東部、D1グリッドにおいて検出した。平面隅丸長方形を呈する土坑である。断面形は逆台形状で、底面には凹凸があり、基盤となっている層中に含まれる拳大の礫が数個露出していた。

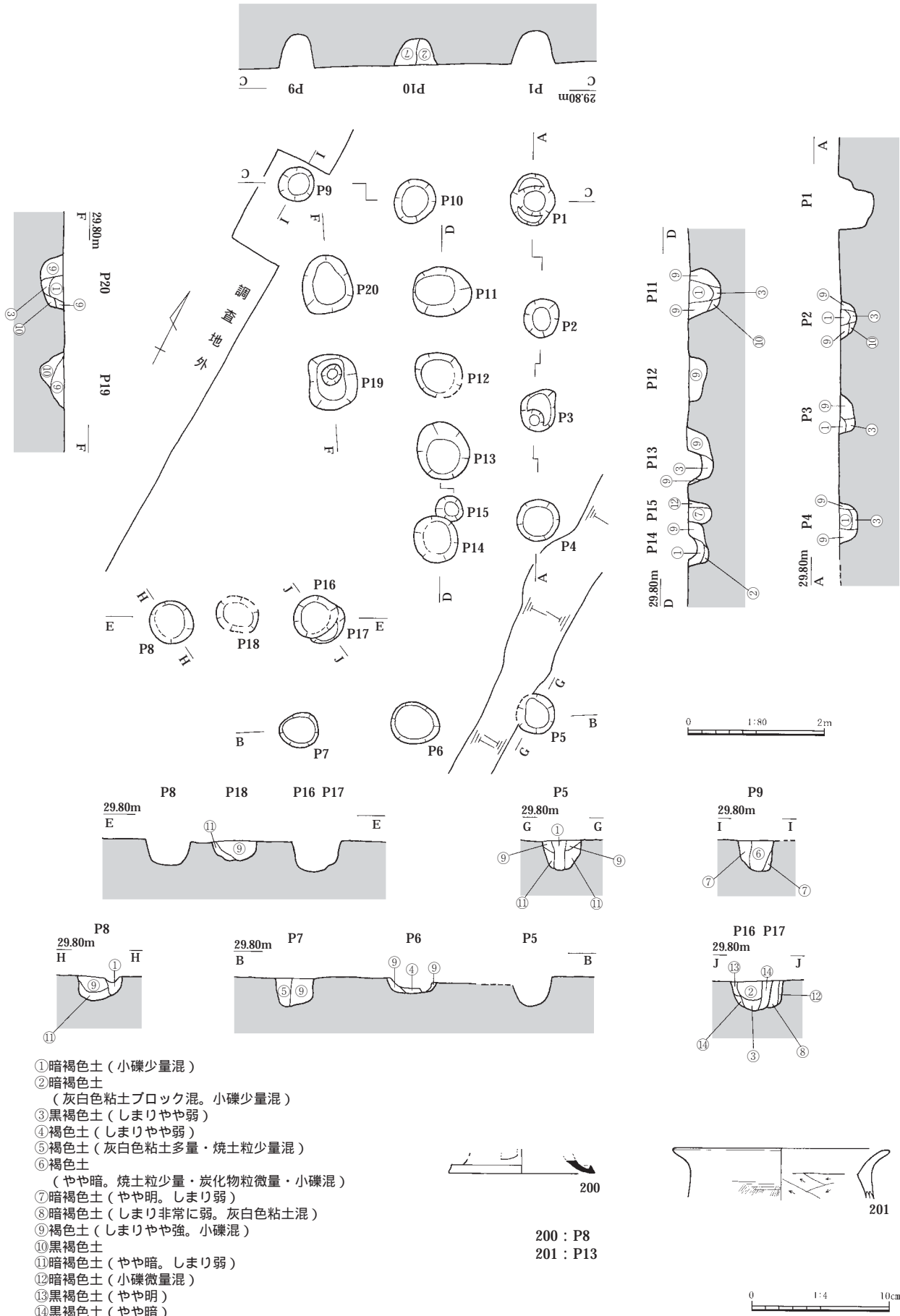


図52 掘立柱建物4

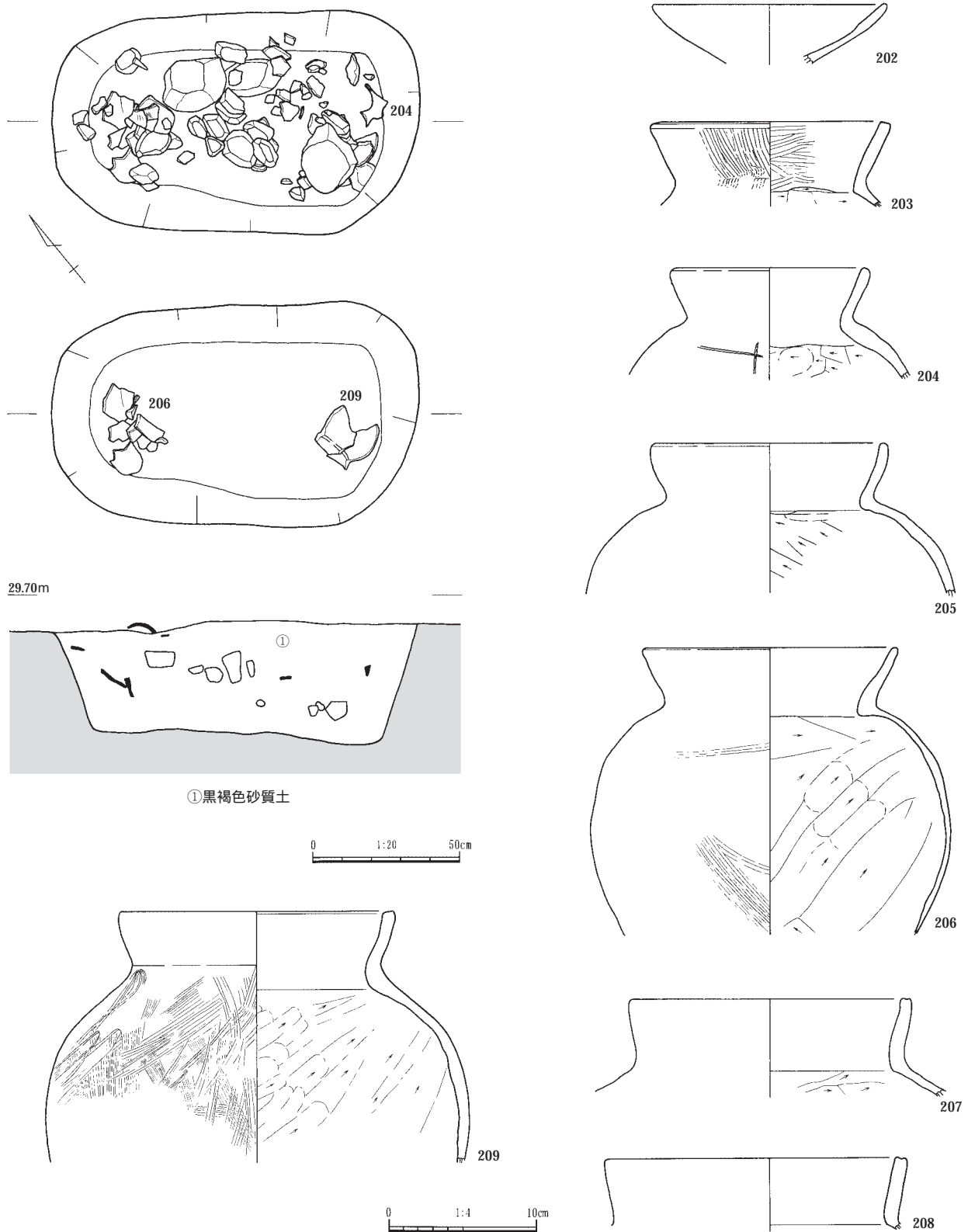


図53 土坑5

埋土は土壌化が著しい黒褐色砂質土1層である。底面と埋土中には多数の拳大から人頭大の亜角礫や円礫と土師器が混ざって出土した。出土した土師器に完形に復原できるものはなく、出土状況にも規則性は認められないことから、短期間の内に埋まった廃棄土坑と考えられる。出土遺物には、土師器の高杯(202)・甕(203)～(208)がある。甕は、頸部が「く」字状に屈曲し開く単純口縁

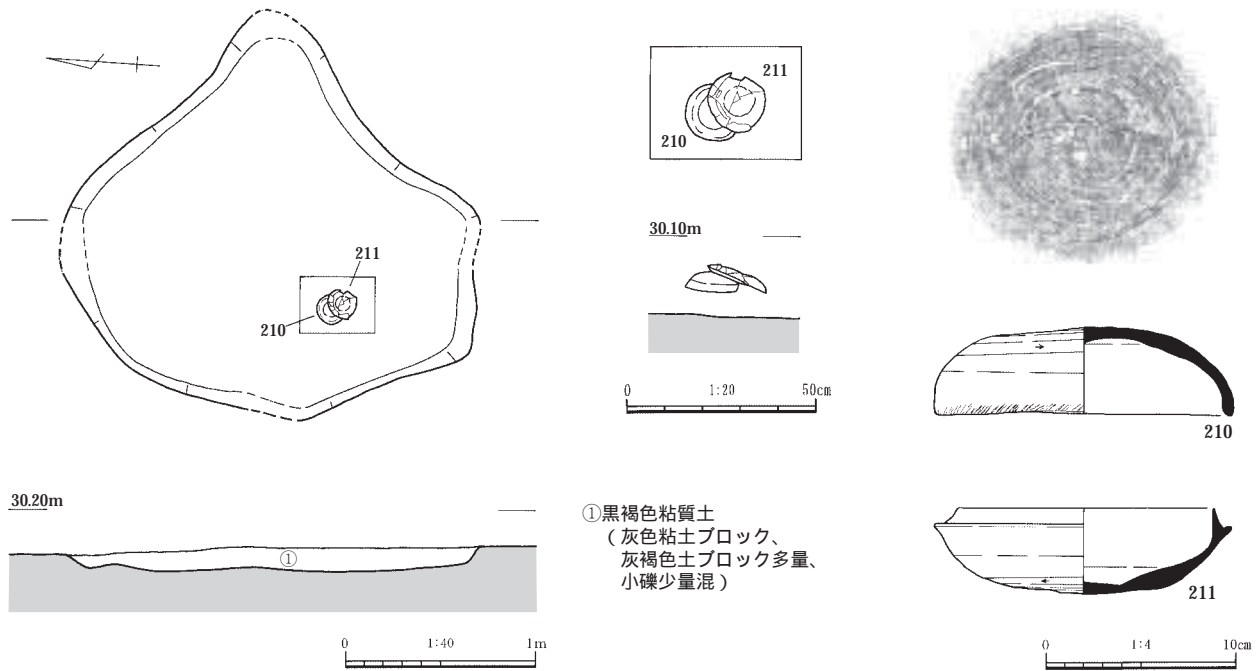


図54 土坑6

表7 土坑5～19計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑5	123×74	38	土坑10	(189)×66	9	土坑15	91×75	45
土坑6	222×215	14	土坑11	134×95	16	土坑16	95×59	12
土坑7	173×104	15	土坑12	74×65	9	土坑17	140×91	13
土坑8	88×81	37	土坑13	(103)×74	17	土坑18	305×255	28
土坑9	83×76	34	土坑14	80×60	34	土坑19	191×95	30

のもので占められる。209は頸部の器壁が厚く、内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。204はこれと同様の頸部で、口縁部は直線的に開き、口縁端部をそのまま丸く収める。体部内面のヘラ削りは屈曲部まで及ばない。205はやや肩が張り、口縁部はわずかに内湾する。206は体部の器壁が薄い。肩部がやや張り、屈曲部の器壁は厚い。口縁部は器壁を減じながら、わずかに外反する。口縁端部は丸く収める。203は頸部屈曲部の器壁が薄い。口縁部は外傾し端部は面をなす。207・208は頸部から口縁部が直立するもので、口縁端部は面をなす。202は杯部が内湾気味に外傾する。杯部上位から口縁部は肥厚し、端部は丸く収める。イレギュラーな形態のものと思われる。これらの土器は古墳時代中期後葉から末にかけての様相を示す。よって、古墳時代中期後葉～末ごろの土坑と考えられる。(日置)

土坑6 (図54、図版25・58、表7・38)

B区東部、F3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面不整形な土坑である。構築段階の原形をとどめていないと考えられる。埋土と基盤土の判別が非常に困難なものであった。須恵器の杯蓋(210)と杯身(211)が出土した。正位に置かれた須恵器の杯蓋の上に杯身が口縁部を下に被さった状況で出土した。須恵器が出土した高さが本来の床と考えられる。須恵器枕の可能性が考え

られるため、この遺構は土壌墓の可能性はある。

出土した杯蓋（210）は、焼成が甘く灰白色を呈し軟質である。口縁部外面を板状工具で斜め方向に浅くキザミをつける。杯身（211）も焼成が甘く軟質である。ともに出雲4期、陶邑編年TK209型式併行期のものである。このことから古墳時代後期末の遺構と考えられる。（日置）

土坑7（図55、図版25・58、表7・38）

E区、M7・M8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1mを測る。上面は削平されており本来の深さは不明だが、検出面からは15cm程度で、埋土は黒褐色土の単層であった。検出面で須恵器や土師器が面的にそろって出土している。

212は須恵器杯蓋である。口縁内面に浅い沈線を施している。外面天井部は最外周のみケズリを施し、中央部には一部にハケを施した後に回転ナデで調整されている。これらの特徴から大谷分類のA6型にあたり、大谷編年の出雲4期、陶邑編年TK209併行期にあたる。213は小型の壺と思わ

れる須恵器。214～216は土師器甕である。いずれも単純口縁である。214は口縁部が長く、「く」の字形に外反し、先端をすぼめて収める。頸部の屈曲はシャープで、内外面とも口縁と体部の境が明瞭である。215・216は短い口縁が緩く外反し、先端はすぼめて収める。肩部が発達せず、なで肩の器形となる。217は高杯の脚部で、内外ともミガキで調整されており、丁寧なつくりである。表面には内外面とも赤色顔料が塗彩されている。

出土遺物から古墳時代後期末

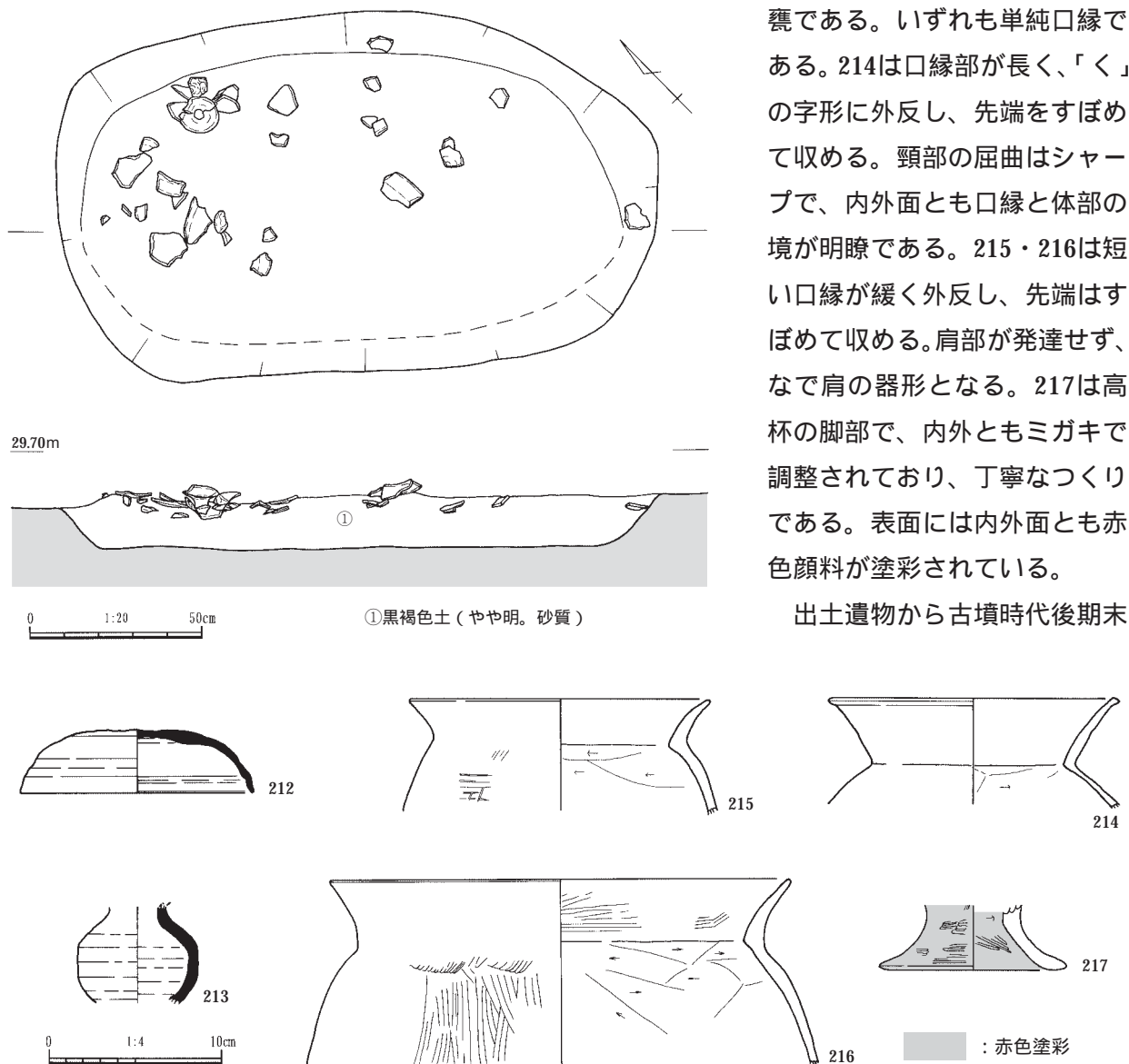


図55 土坑7

のものと考えられる。 (北)

土坑8・9

(図56、図版25・58、表7・38)

E区、P10グリッドに並んで位置する。ともに平面形は円形を呈し、径は0.8m、深さは約40cmを測る。埋土はいずれも共通し、上層に灰色土、下層に暗褐色土の自然堆積が見られる。形態、規模、埋土が共通し、関連性が強い。大型の柱穴の可能性が高く、建物を構成するものの一部である可能性がある。どちらからも須恵器の破片が出土した。土坑8出

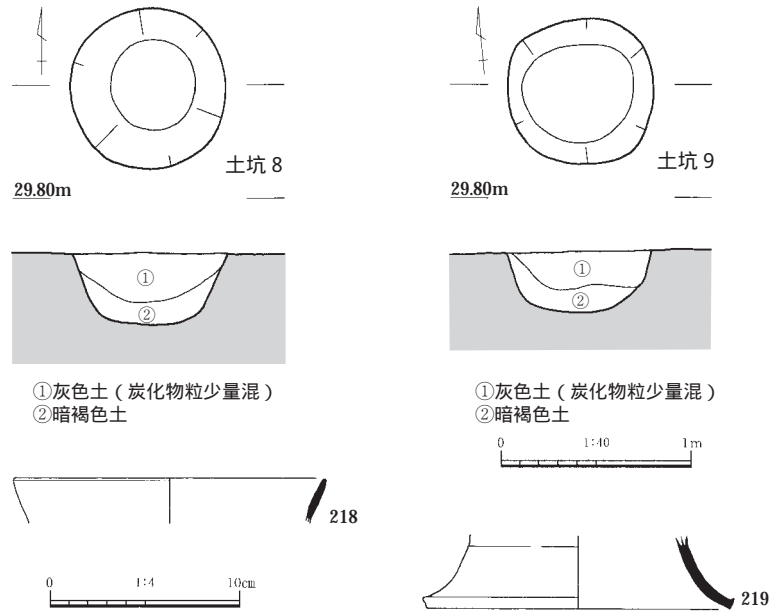


図56 土坑8・9

土の218は口縁部片。器種が判然としないが、破面付近で屈曲しているなのでこのすぐ下に体部がつく器形になるだろう。非常に薄手のつくりである。土坑9の219は高杯の脚部片と思われる。破片のため透かしの有無が判断できない。径が大きく、脚は低くなりそうである。いずれも破片で時期を判断するのに十分ではないが、おそらく古墳時代後期末のものと思われる。したがって、これらの遺構の時期もそれ以降のものと思われ、全体の遺構の展開のあり方から考えると、古墳時代後期末の可能性が高いと考える。 (北)

土坑10 (図57、図版25、表7)

A区東部、C1グリッドにおいて、層上面で検出した。土坑の一部は調査地外に外れるが、平面長方形の浅い土坑であろう。底面にはピット状に窪む箇所がある。遺物は出土しなかった。土坑の機能は不明であるが、埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑11 (図57、図版25、表7)

A区東部、C2グリッドにおいて、層上面で検出した。平面長楕円形の土坑である。底面には層中に含まれる角礫が露出する。遺物は出土しなかった。長軸をほぼ東西にとるが、土坑の機能は不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑12 (図57、図版25、表7)

A区東部、C3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面やや不整な楕円形を呈する土坑である。ごく浅いもので3基のピットに切られている。遺物の出土はなく、機能は不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑13 (図57、図版25、表7)

A区東部、D3グリッドにおいて、層上面で検出した。土坑の一部は調査区外に外れる。ごく

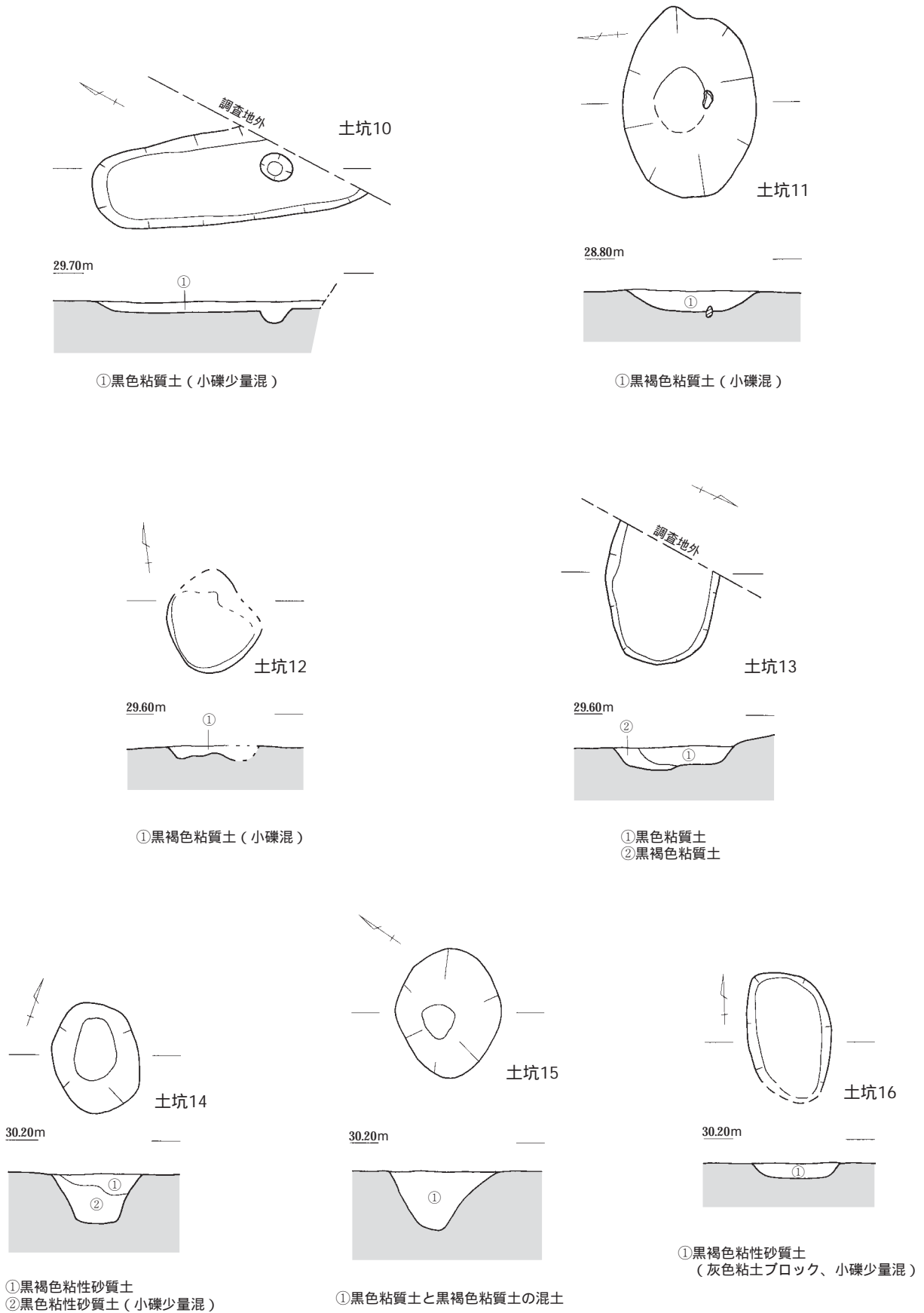


図57 土坑10～16

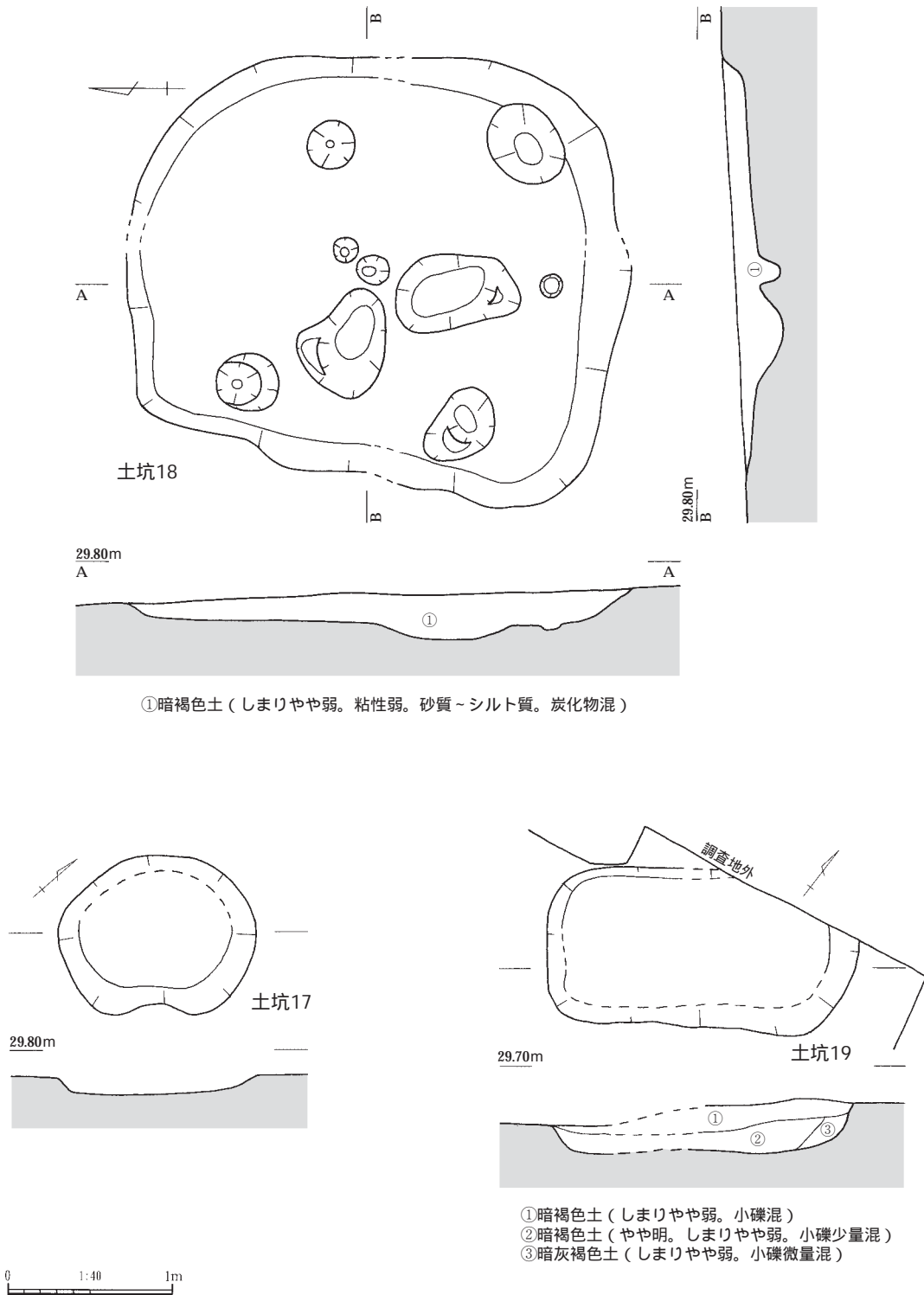


図58 土坑17～19

浅いもので重複している可能性がある。遺物は出土せず機能は不明であるが、埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑14 (図57、図版26、表7)

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面楕円形の土坑である。埋土は2層に分けたが、後述する土坑15・土坑16の埋土と同様のもの自然堆積と考えられる。遺物は出土せ

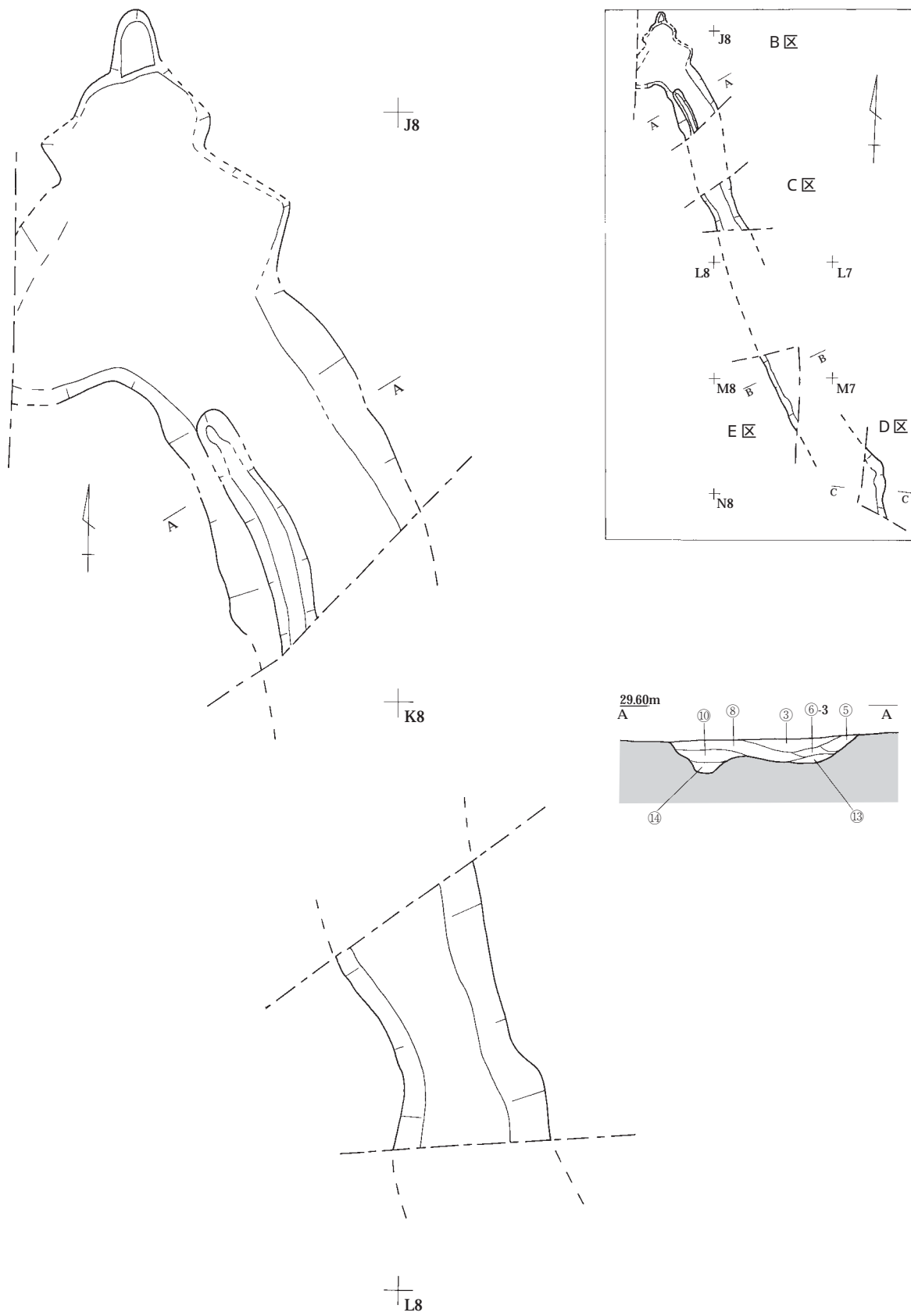


図59 溝1(1)

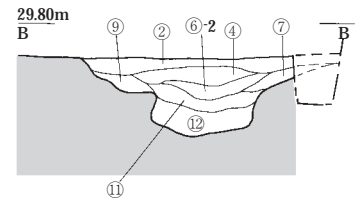
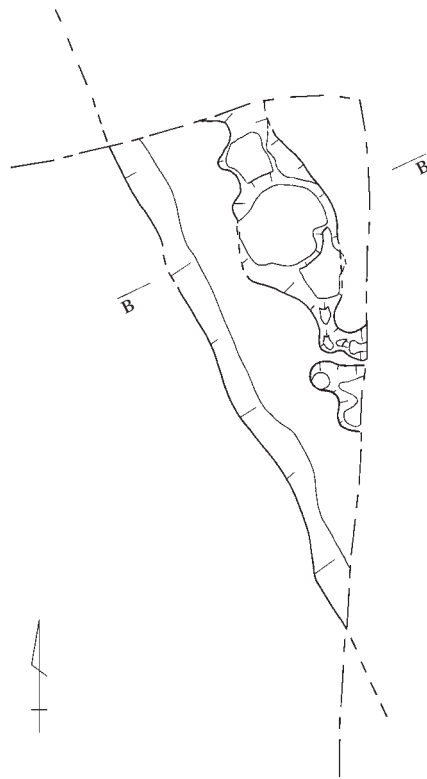
L8

L7

- ①暗灰褐色砂礫混じりシルト（しまり弱。粘性強。小礫多く混）
- ②暗灰褐色シルト（しまり弱。粘性強。小礫・小礫多く混）
- ③暗褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫非常に多く混）
- ④褐灰色粗砂（しまり弱。粘性非常に弱。小礫非常に多く混）
- ⑤黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫多く混）
- ⑥-1暗灰褐色砂礫（小礫を中心に細砂、シルトで構成）
- ⑥-2赤褐色砂礫（しまり弱。粘性弱。）
- ⑥-3黄褐色砂礫（しまり弱。粘性非常に弱。小礫と砂で構成。鉄分沈着多くみられる）
- ⑦暗褐色シルト（しまり弱。粘性強。粗砂、小礫多く混）
- ⑧黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性やや強。砂質。）
- ⑨暗褐色シルト（しまり弱。粘性強。小礫少量混）
- ⑩暗褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫を非常に多く混）
- ⑪褐色細砂、黒色シルトラミナ状堆積層（しまり非常に弱）
- ⑫褐色粗砂（しまり弱。粘性非常に弱）
- ⑬黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫非常に多く混。鉄分沈着多くみられる）
- ⑭黒色砂礫混じり土（しまり弱。粘性やや強。砂質。小礫混）

M8

M7



N8

N7

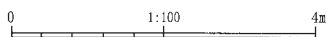
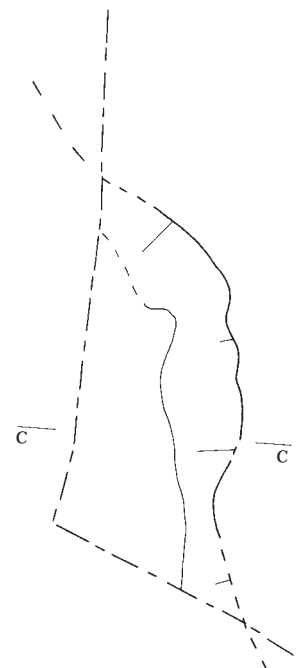
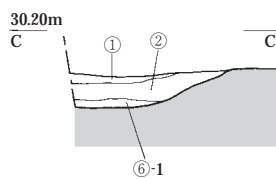


図60 溝1(2)

ず、機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。 (日置)

土坑15 (図57、図版26、表7)

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。擂鉢状を呈する土坑である。埋土は土坑14や土坑16と同様の1層で自然堆積と考えられる。遺物は出土せず、土坑の機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。 (日置)

土坑16 (図57、図版26、表7)

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面はやや不整な長方形を呈する土坑である。ごく浅いもので、埋没状況は埋土1層からなり、前述の土坑14・土坑15と同様自然堆積と考えられる。遺物は出土せず、土坑の機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。 (日置)

土坑17 (図58、図版26、表7)

E区、N7グリッドにおいて検出した。不整形な土坑である。底面から、握拳大の亜角礫が1個出土したが、ほかに遺物は出土しなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えるが、機能などは不明である。 (日置)

土坑18 (図58、図版26、表7)

E区、N8、O8グリッドにおいて検出した。平面はやや不整な方形を呈する土坑である。底面は所々に深い窪みがあり平坦ではない。その窪みにも規則性は認められず、柱穴ではない。埋土は1層のみである。底面から浮いて土師器の細片が出土したが、図化できなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えるが、機能などは不明である。 (日置)

土坑19 (図58、図版26、表7)

E区、M9グリッドにおいて検出した。北方隅の一部分は調査地外に外れる。ピットに切られる。平面隅丸長方形を呈する土坑と想定される。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えられるが、機能などは不明である。 (日置)

溝1 (図59~65、図版27・28・58~61、表38~41)

B区からD区にかけて、I8・J8・K7・L7・M7・M6・N6グリッドを中心に位置する。調査地内では端を確認しておらず、南側はD区から南南東にまっすぐに延びていると思われる。北側はI8・J8グリッドでわずかな立ち上がりが見られた。ただし、削平が著しく、この部分では深さがわずか3cm前後しか残っていないため、ここが溝の北端となるとは断定できない。むしろこのまま北側に延びていた可能性も十分あるだろう。その一方で、B区の西壁面でこの溝の断面が確認できているので、西に向かって屈曲して延びる可能性もある。こちらも極めて浅く、壁で10~20cmほど、壁にいたるまでの部分ではわずか2cm前後の深さしかない。したがって、これは溝の本体とはならず、部分的に溝の平面が広がっていただけの可能性もある。いずれにしても、遺存状態

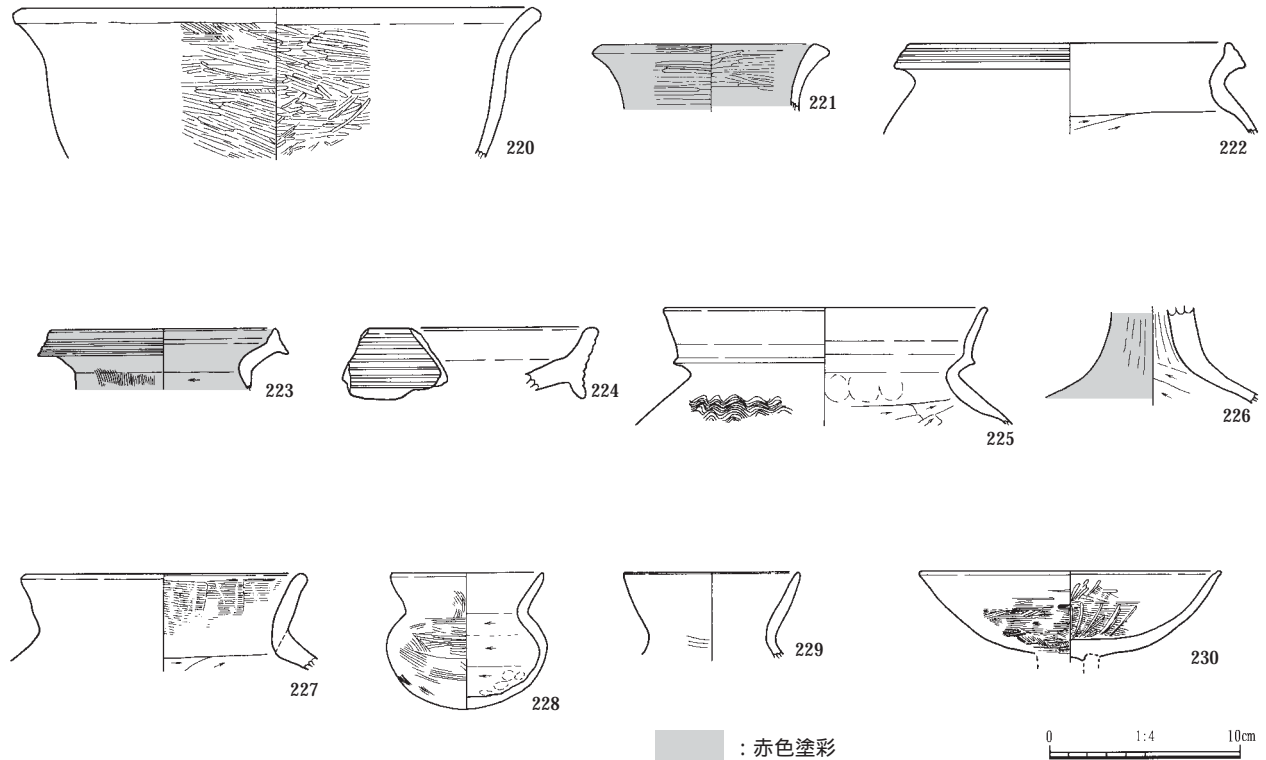


図61 溝1(3)上層出土遺物

が悪いため北側部分の拡がり方については判断できない。溝の規模は、調査地内の検出した部分で全長約47m、最大幅3.5m、最小幅1.9mを測る。深さは、B区の残りのよい部分で約60cm、E区は部分的に深くなるので最深部で約1m、D区で約45cmをそれぞれ測る。溝底面の標高は、B区で約28.5m、C区で約28.7m、E区の平坦な面をなす部分で28.8m、D区南端で29.2mとなり、南が高く、北が低くなる。したがって、溝は南南東から、北北西に向かって下っており、ちょうど地形の高低および傾斜軸に対応している。埋土は大きく2種類の堆積からなり、上層(①・②層)に土壌化の強い暗灰褐色のシルトベースの土層、下層(③層以下)に砂、砂礫、シルトの堆積層が複数見られた。B・C区は削平のため上層は残っていなかった。これらの層はいずれも水成堆積によって形成されたと見られ、特に下層は土壌化しない純粋な流水堆積層で、細かいラミナ状堆積を見せる層もあった。また、E区の底面は流水によって部分的に深く抉られていた。こうした点から、溝には水が流れていたようであるが、常時流水があったかどうかは不明である。人為的な掘削による溝、自然流路の両者の可能性が考えられるが、溝の形状や堆積からはいずれかは決定できない。

溝内からは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が大量に出土した。上層、下層とも遺物が含まれていたが、下層出土のものが圧倒的に多い。流水によって砂礫とともに流れてきたものと思われ、ローリングを受けて摩滅したものも多い。上層からは弥生時代前期から古墳時代中期ごろにかけての土器が出土している。下層からは弥生時代後期から弥生時代末の時期幅に収まるものが中心に、弥生前期から古墳前期にかけての土器が出土している。遺物から考えると下層は古墳時代前期頃までに堆積し、上層は古墳時代中期以降に堆積したと思われる。下層堆積遺物から古墳時代前期以前がこの溝の形成時期と考えられる。なお、これらの遺物は上流から流れ込んできたものと思われるので、遺跡の南側に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が存在する可能性がある。

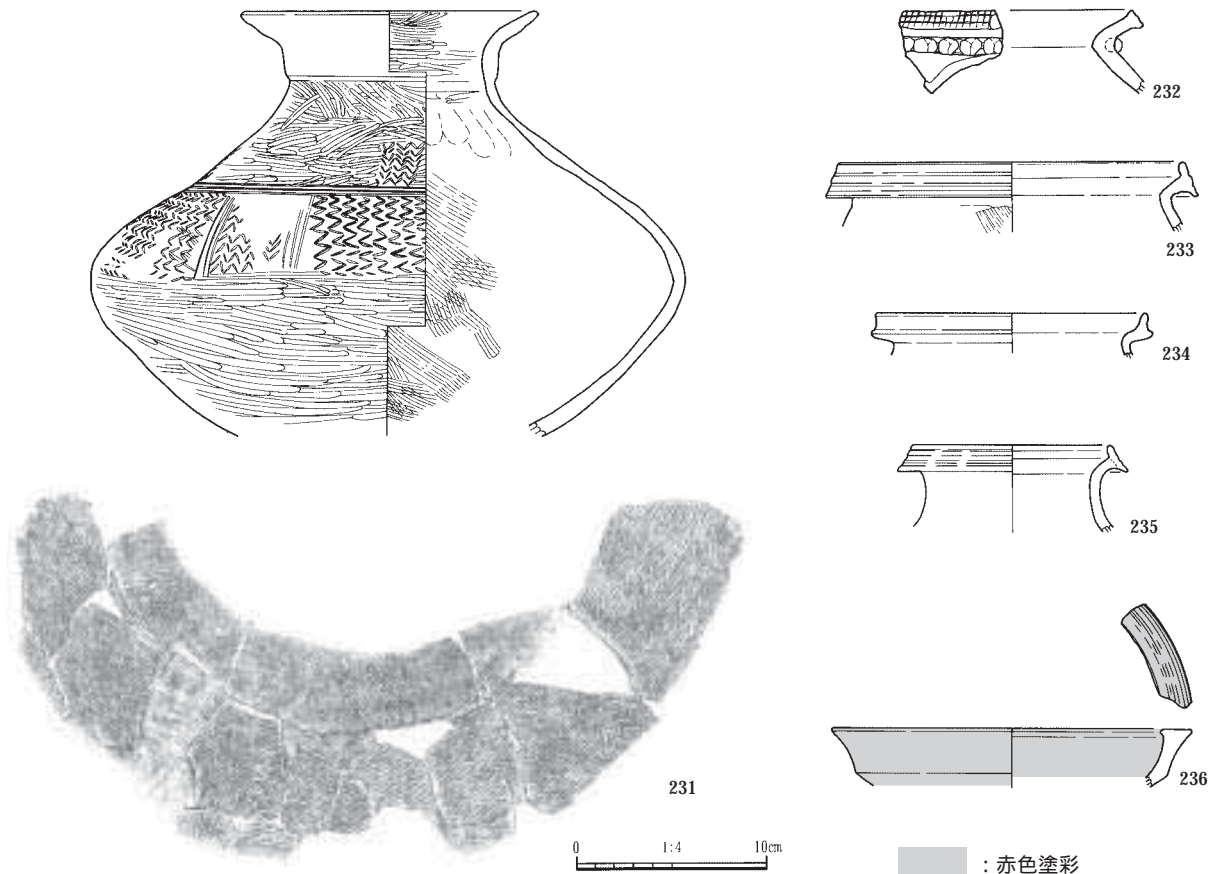


図62 溝1(4)下層出土遺物 [弥生時代前期・中期]

上層出土遺物は時期的にも量的にもまとまりに欠ける。220は弥生前期の鉢。内外面ともミガキで丁寧に仕上げられており、内面は黒色を呈する。221は弥生前期の壺の口縁部で、内外面ミガキで調整し赤色塗彩を施す。222～224は弥生後期の甕。225は弥生末の甕。230は高杯で弥生末～古墳初頭のもの。226～229は古墳時代中期の土器。226は高杯脚部。中期前葉頃のものか。227は単純口縁の甕で、中期後葉～末のもの。228・229は小型丸底壺で、いずれも中期前葉ごろのもの。

下層遺物は先述のように弥生後期から弥生末～古墳初頭がまとまって出土している。ほかに、これより古い時期のものもわずかに出土している。231は弥生前期中葉の壺。下層と上層両方から破片が出土している。口縁が屈曲して外反し、頸部に段を持つ。外面を丁寧に磨いて調整した後に、胴部上半を区画文とヘラ描き文で飾る。胴部上半にはヘラ描き沈線で幅広のものと狭いものの2種の区画が交互に4つずつ配され、幅広の区画には横方向の羽状文が、狭い区画には縦方向の羽状文がそれぞれ施されている。また、幅広の区画の中心付近上側の頸部には3列の縦の羽状文がそれぞれの区画上に4単位施されている。232～236は弥生中期のもの。232～234が甕、235は壺、236は高杯である。237～275は弥生後期のもの。237～265は甕である。型式上の特徴からは後期の前葉から後葉にかけての全期にわたる可能性がある。237～246は内傾する口縁帯をもち、上下端部が同程度に拡張するもの（濱田分類 類）、247～252は内傾する口縁部の上端が長く拡張するもの（濱田分類 類）であるが、あまり拡張していないものも多く、中期的な様相が残る。259・264・265には外面と内面の口縁部付近に赤色塗彩が見られる。253～259・262・263は口縁部が直立し上端が拡張するもの（濱田分類 類）、260・261・264・265は口縁部が外反し上端が長く拡張するもの（濱田

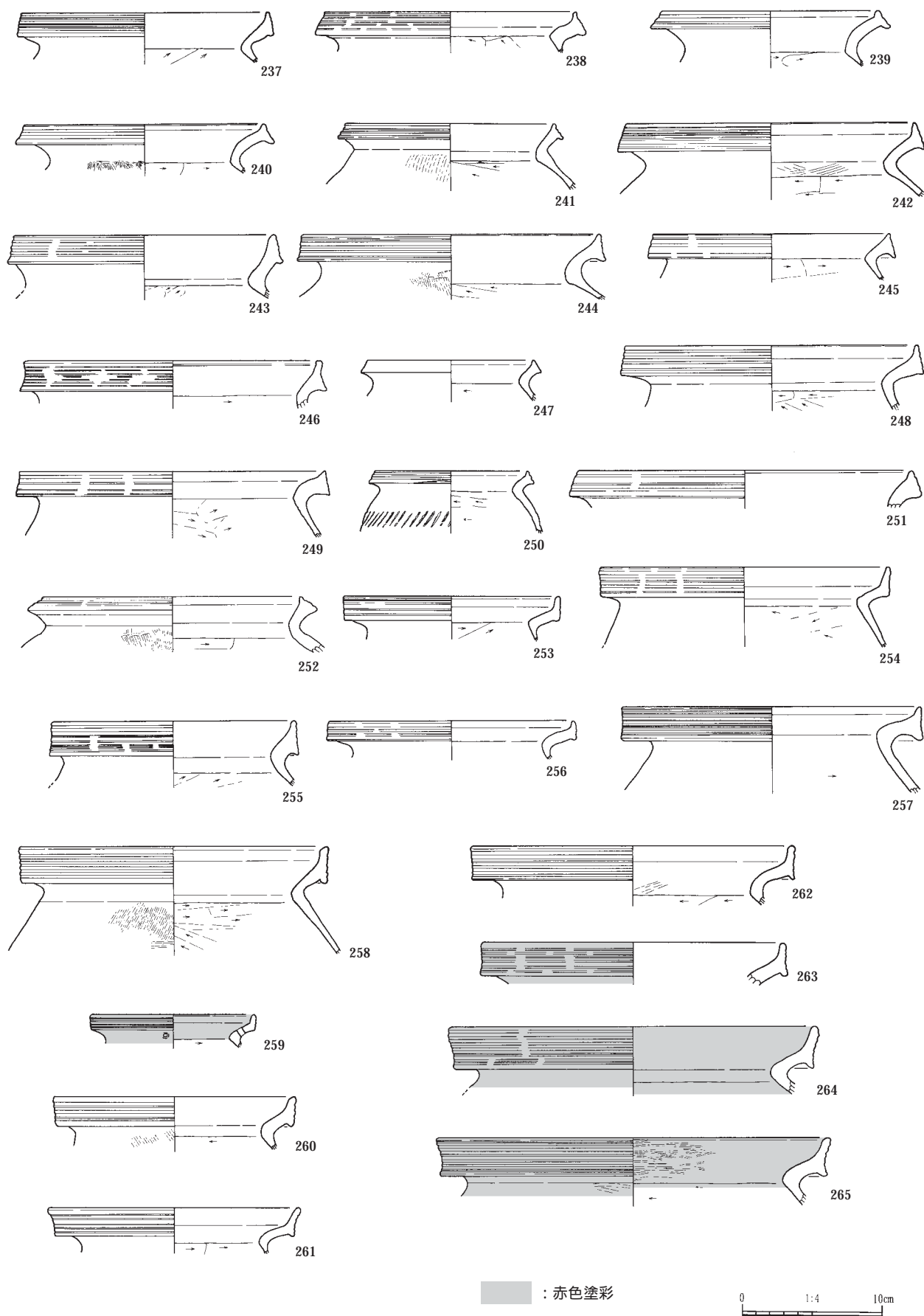


図63 溝1(5)下層出土遺物 [弥生時代後期・1]

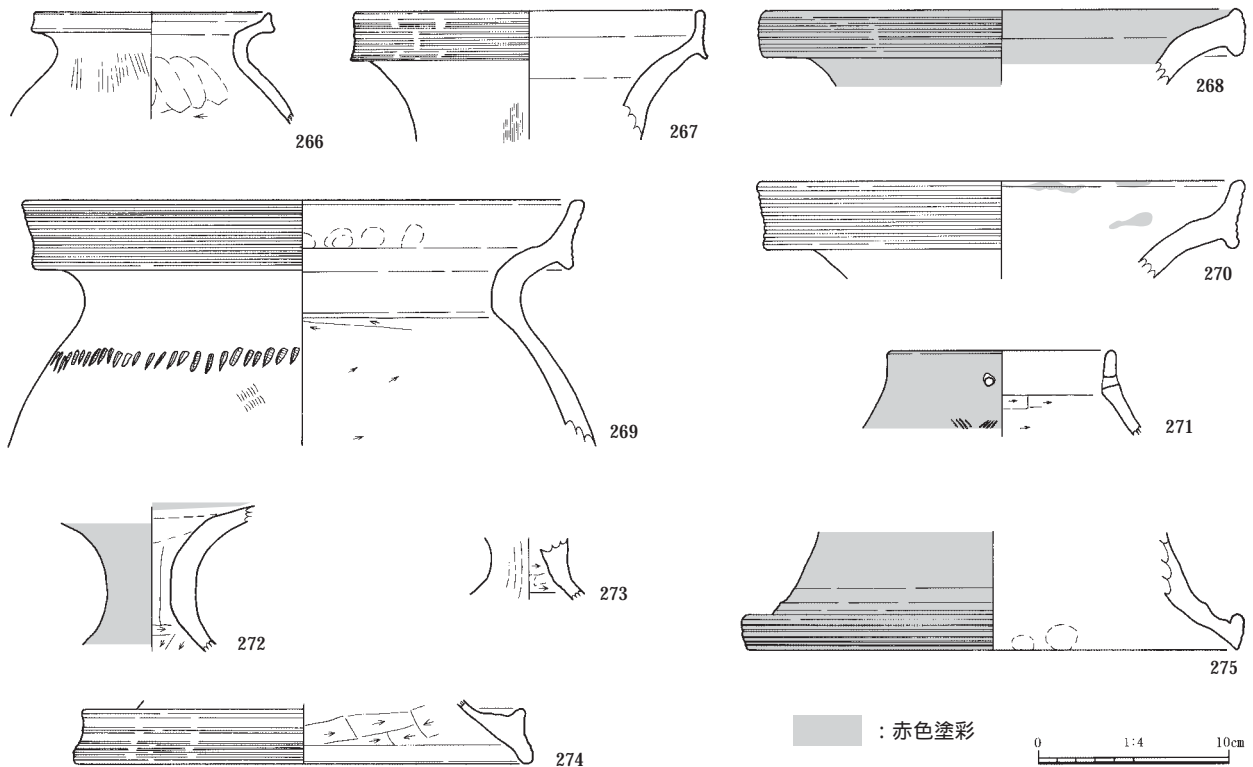


図64 溝1(6)下層出土遺物 [弥生時代後期・2]

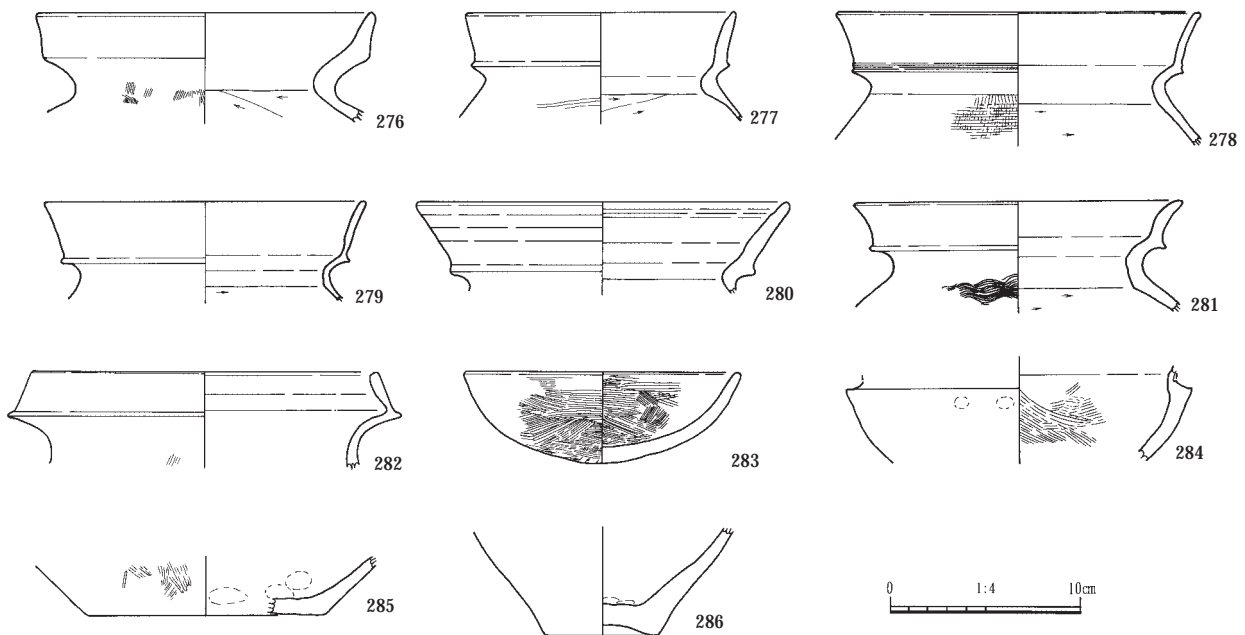


図65 溝1(7)下層出土遺物 [弥生時代末～古墳時代]

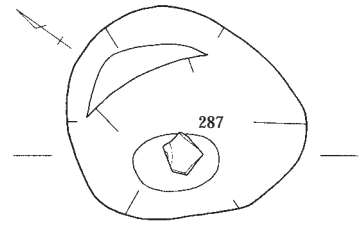
分類 類)。266～270は壺。271は無頸壺。272・273は高杯。274・275は高杯もしくは器台の脚部。276～281は弥生時代終末期の甕。282は古墳時代前期後葉ごろのものと思われる壺。283は古墳時代前期中葉～後葉ごろの鉢。284は受け部状の段を持つ碗形の器種で、高杯の杯部であろうか。これも古墳時代前期のものと思われる。285・286は甕ないしは壺の底部である。 (北)

ピット（図66・67・69、図版61、表28～30・41）

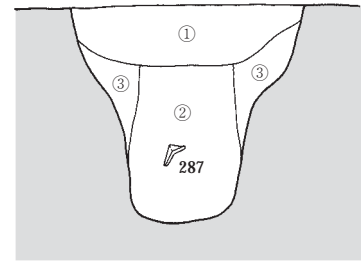
第1面では227基のピットを確認している。前述したように、そのうち35基が灰色の埋土を含む中世のもので、そのほかのものは大半が古墳時代のものであろう。分布はA区の東部、B区の中央、E区にまとまりがある。

P24はM8グリッドで検出したピットで、埋土は3層からなる。柱穴の可能性が高く、①層は流入土、②層は柱痕部分、③層は掘り方込め土であろう。②層から287が出土した。土師器の甕で、口縁がほぼ直立し、肩が極端ななで肩をなす。内面を細かい単位で非常に深く削る。特異な器形で、色調や胎土、焼成の状態も本遺跡出土のほかの土師器とは異なる。おそらく古墳時代後期ごろのものと思われる。

ほかに時期の判断できる遺物の出土したピットがいくつかある（P25～P34）。いずれも古墳時代の土器が出土している。P25のみA区東部に位置し、ほかのものはすべてE区に位置する。A区のP25から出土したのは295で、土師器の高杯か。厚ぼったいつくりで、外面はケズリ後ナデ、内面は丁寧にナデている。焼成や胎土の特徴なども考慮すると、古墳時代中期末のものと思われる。288～294は須恵器ですべてE区に分布するピット内出土。288～292は杯蓋。288は内面端部にわずかに段をつける。出雲4期、TK209型式併行のものであろう。289は肩部に明瞭な段と稜をもち、口縁端に段をつくる。TK208型式併行のものであろう。290は肩部に稜をもち、291は内面口縁端にわずかに段をつける。293は杯身で出雲4期、TK209型式併行ごろのもの。294は高杯脚部。三角形の透かしをもち、295～298は土師器の甕である。いずれも端部がすぼまる単純口縁の

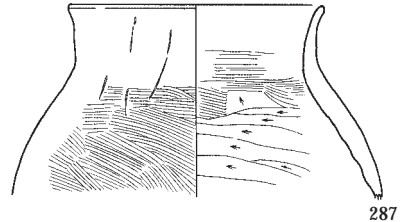


29.40m



- ①暗褐色土（しまりやや弱。粘性やや強）
- ②暗灰褐色土（しまり弱。粘性強）
- ③暗褐色土（しまり強。砂質）

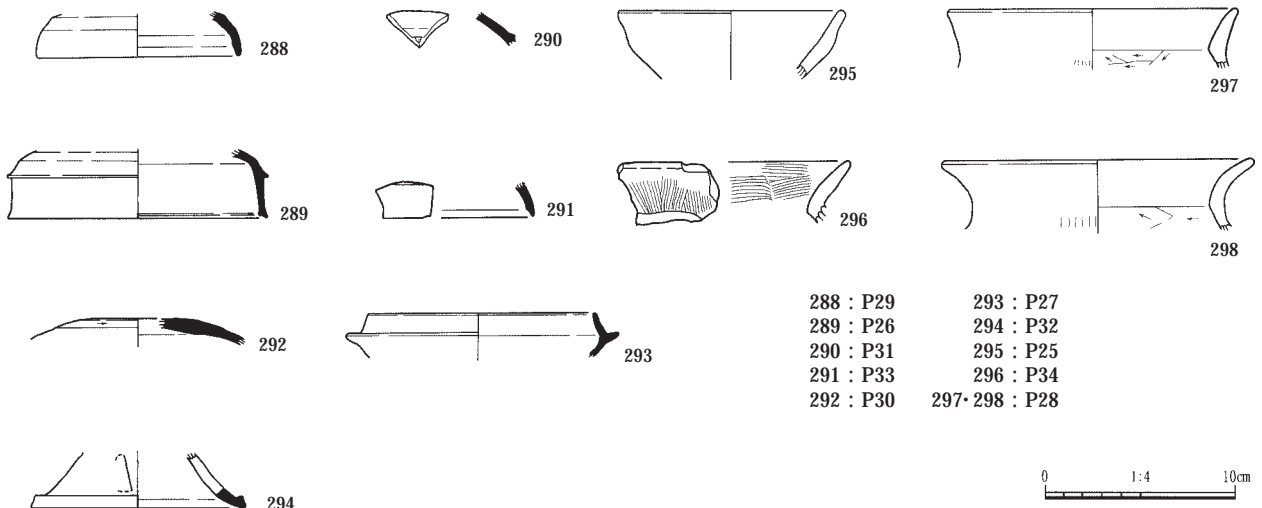
0 1:20 50cm



287

0 1:4 10cm

図66 第1遺構面ピットP24



0 1:4 10cm

図67 第1遺構面ピット出土遺物

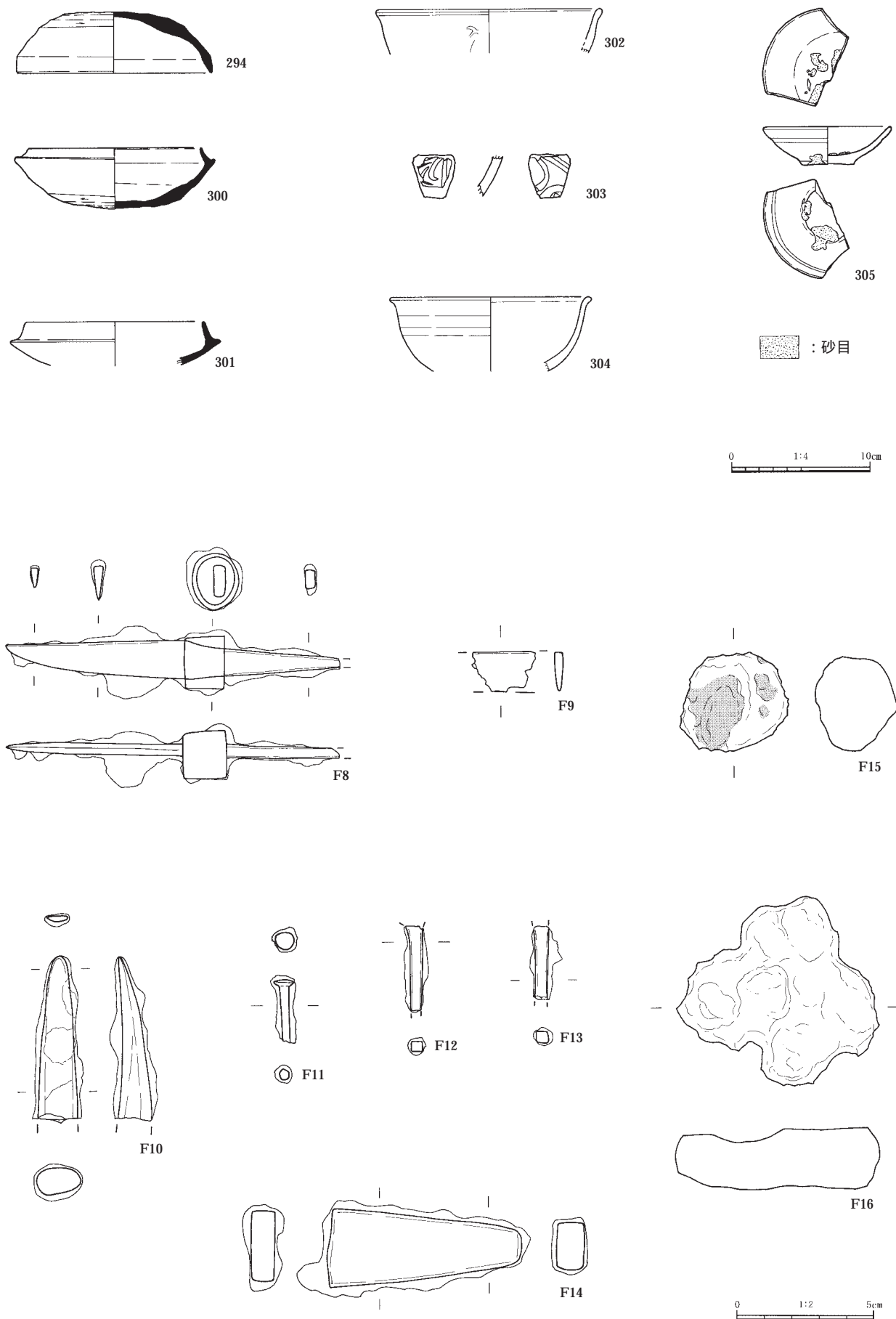


図68 第3調査地遺構外出土遺物

口縁部片で、後期末のものと考えられる。以上の出土遺物からみると、ピットの時期はA区のP25が中期末、E区のものP26を除き後期末ごろに比定できる。分布と時期の関係は、主要な遺構の分布のあり方とも一致する。ほかの遺物の出土していないピットの時期も、A区のもの中期末が多く、E区のもの後期末が多い可能性があるだろう。(北)

4. 第1遺構面遺構外出土遺物(図68、図版61、表41・61)

第1遺構面は表土直下の検出で、包含層をとまわらないが、表土・耕作土やその下面の鉄分の沈着層などから古墳時代と中近世の遺物が出土している。299～301は須恵器の杯。いずれも出雲4期、TK209型式併行のものであろう。302～304は青磁でいずれも碗。302は口縁の外反するタイプで、外面に文様をもつ。施釉が厚い。15世紀前半ごろのもの。303は内外面に文様をもつ。14世紀後半から15世紀前半ごろのもの。304は無文で口縁が外反する。胎土が悪く、釉に貫入が見られる。15世紀前半のもの。305は雑釉陶器の皿で、灰色の釉が施され、内面底面と底部に砂目が見られる。李氏朝鮮産で16世紀末～17世紀初頭のもの。F8～F16は鉄製品および製鉄関連遺物。F8・F9は刀子。F8には鉸具を残す。F10は鉋であろうか。F11～F13は釘。F14は板状不明鉄製品。F15・F16が鉄生産関連遺物。F15は塊状の羽口溶解物。全体に黒色ガラス化している。F16は碗形鍛冶滓。左側肩部に羽口先の溶解物がのる。鍛錬鍛冶滓であろうか。(北)

【参考文献】

- 谷本進1988「赤色顔料・漆記号を施した須恵器と鎮魂儀礼」『但馬考古学』第5集 但馬考古学研究会
 古川登1995「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学』89 岐阜史学会
 宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』 埋蔵文化財研究会

第5章 第3調査地の調査



図69-1 第3調査地第1遺構面ピット配置図(1)

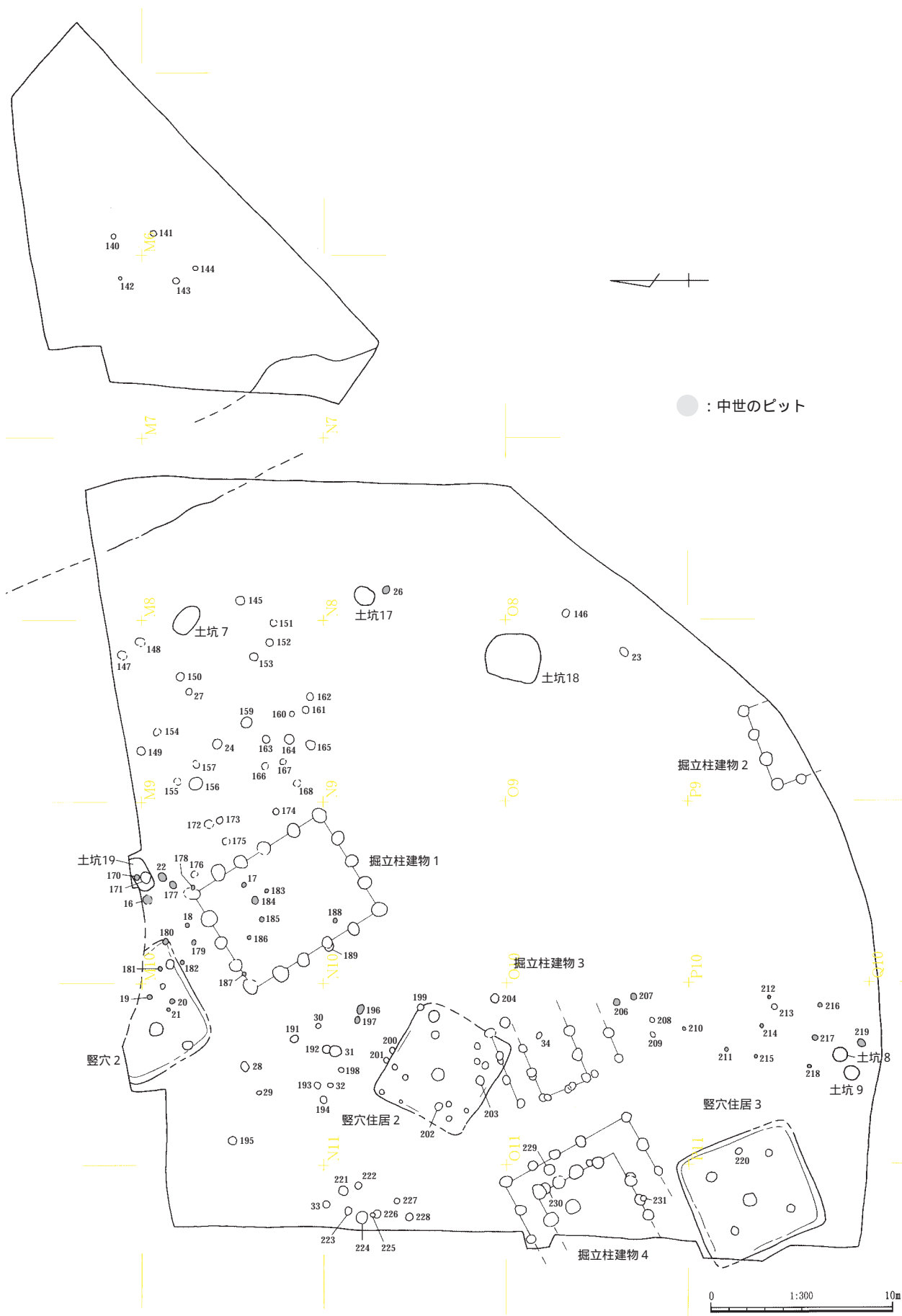


図69-2 第3調査地第1遺構面ピット配置図(2)

第4節 第2遺構面の調査

1. 概要

第2遺構面は縄文時代早期から弥生時代後期にかけての遺物を包含する層の掘り下げ後、層上面で検出した。層上面にも圃場整備時の地形改変が及ぶ部分がある。その影響はC区で大きく、南東部（J3・J4・J5・K3・K4・K5グリッド付近）では削平を受けているほか、6ライン付近は段切りを受けて大きく斜めにカットされている。そのほかの部分ではおおむね原地形はとどめている。丘陵が控える南東側が高く、名和川や東谷川の流れる北西側に向けて下る地形をなしている。微地形を見ると浅く緩い谷や微高地状の高まりが観察できるが、遺構の分布とはほとんど結びつかない。こうした微地形は層堆積時に形成されたものの可能性もある。

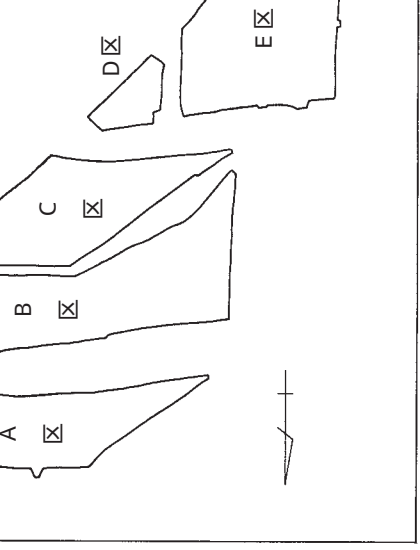
本遺構面は縄文時代から弥生時代にかけて形成されたと考えられる。検出した遺構のうち時期が判明したものには弥生時代中期および後期と縄文時代早期末～前期初頭および後期のものがある。弥生時代の遺構は竪穴住居、竪穴、土坑などで構成されており、充実した内容を見せるが、縄文時代の遺構は土坑が数基確認されたのみである。そのほか時期不明の遺構に多数の土坑やピットがある。検出した遺構の大半は確認できた掘り込みが浅く、遺存状態が悪い。基盤層となる層は砂質土であるため土壌化、流失が起こりやすく、層の堆積過程で遺構面の上面は大きく削れてしまったと考えられる。遺構自体が層堆積時に完全に崩壊してしまったことも考えられるだろう。また、同一面で検出した遺構も層堆積以前は時期によって違った掘り込み面をもっていた可能性もある。（北）

2. 弥生時代の調査

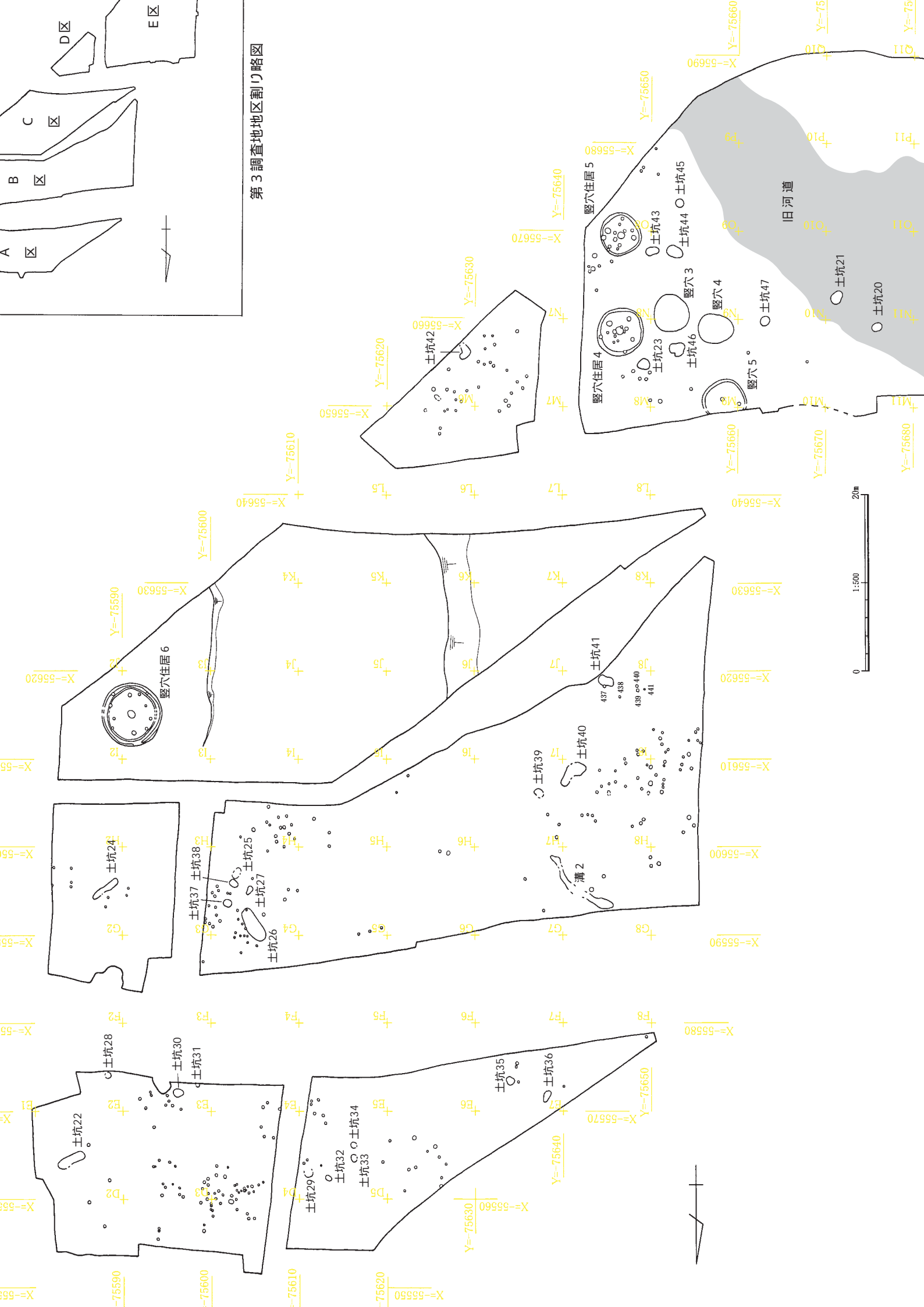
遺物が出土して、時期を確定できた弥生時代の遺構は、竪穴住居3棟、竪穴3基、土坑2基である。このうち、竪穴住居2棟（竪穴住居4・5）、竪穴3基（竪穴3～5）、土坑1基（土坑20）は中期のもので、竪穴住居1棟（竪穴住居6）、土坑1基（土坑21）が後期のものである。中期の遺構はいずれもE区に位置し、竪穴住居と竪穴はすべてE区東部に集まって分布している。また、出土遺物から判断する限りこれらの遺構はほぼ同時期と考えられる。こうしたことから、中期の遺構は、非常にまとまりのよい遺構群を形成しているといえる。後期の遺構は、竪穴住居6がC区東部に、土坑21がE区西部に位置し、平面的にはまとまりを見せない。ただし後述するように、両遺構からは特徴の近似したガラス小玉がそれぞれ出土しており、密接な関係をうかがわせている。（北）

表8 第3調査地内第2遺構面新旧遺構対照表

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
竪穴住居4	SI8	土坑22	SK31	土坑31	SK28	土坑40	SK6
竪穴住居5	SI5	土坑23	P M7 5	土坑32	SK21	土坑41	SK5
竪穴住居6	SI14	土坑24	SD3	土坑33	SK19	土坑42	SK33
竪穴3	SI9	土坑25	SK27	土坑34	SK18	土坑43	SK59
竪穴4	SI10	土坑26	SK23	土坑35	SK10	土坑44	SK60
竪穴5	SI13	土坑27	SK25	土坑36	SK9	土坑45	SK64
土坑7	SK50	土坑28	SK30	土坑37	SK24	土坑46	SK66
土坑20	SK54	土坑29	SK22	土坑38	SK26	土坑47	SK61
土坑21	SK65	土坑30	SK29	土坑39	SK4		



第3調查地区剖面略图



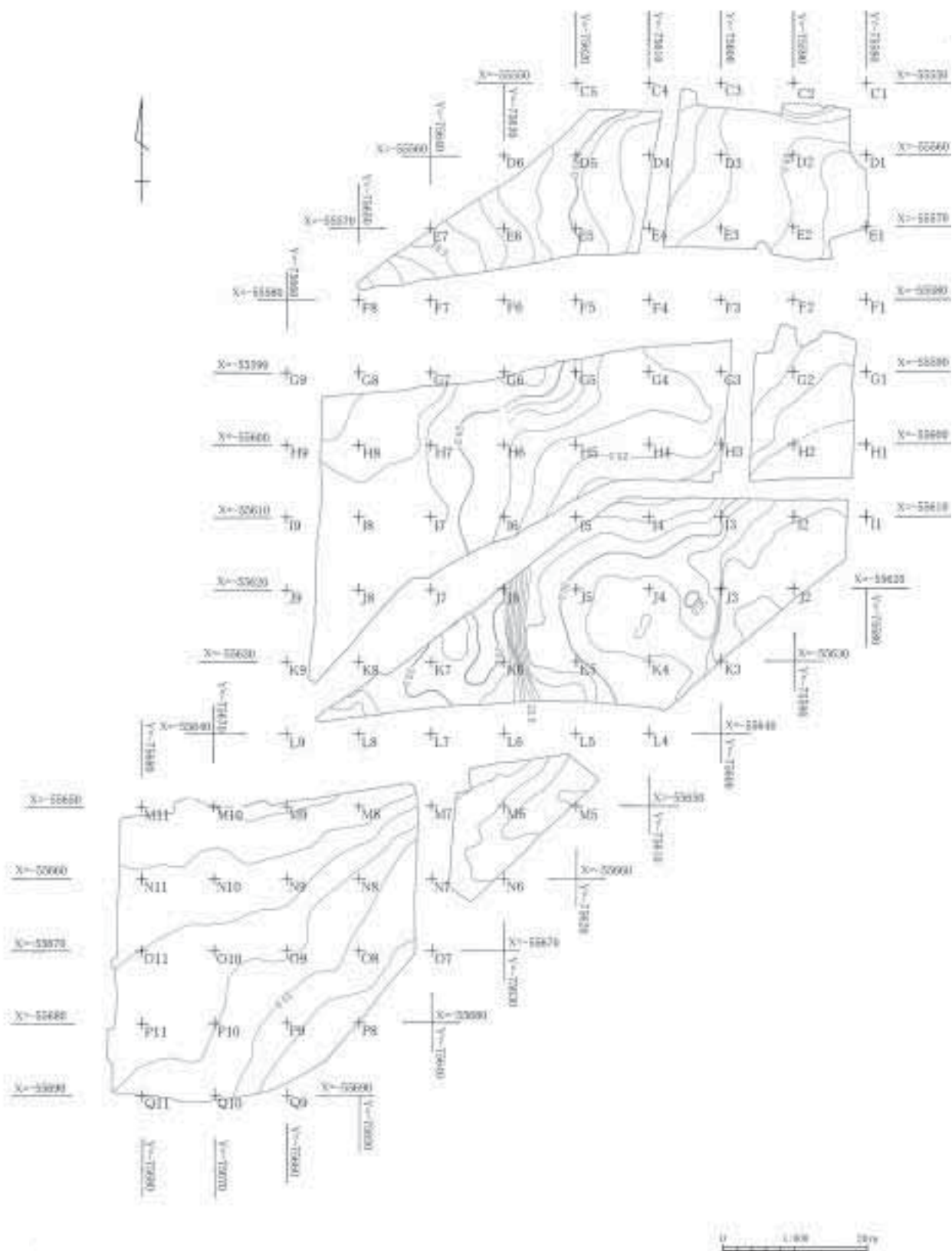


図71 第3調査地調査後地形測量図

第5章 第3調査地の調査

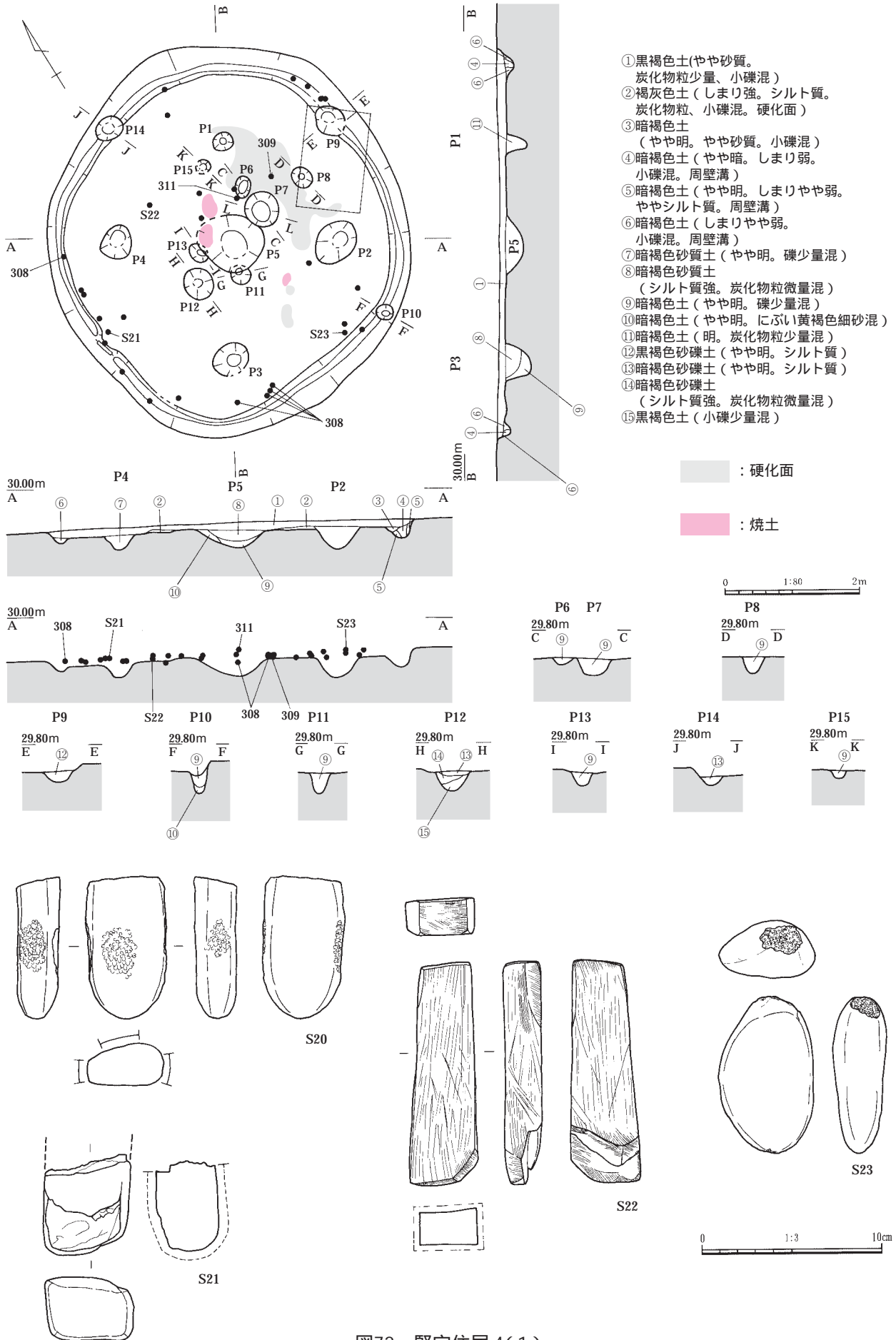


図72 竪穴住居4(1)

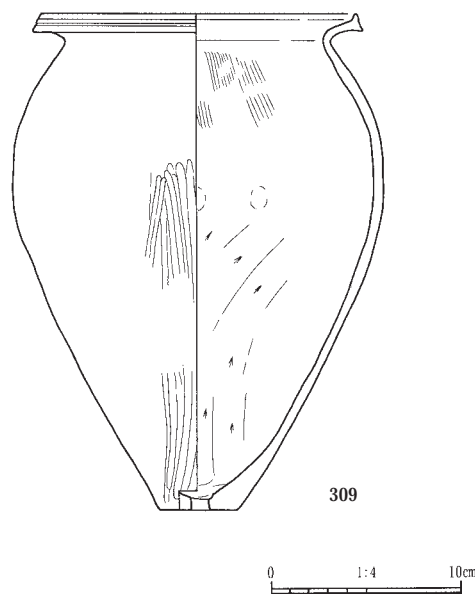
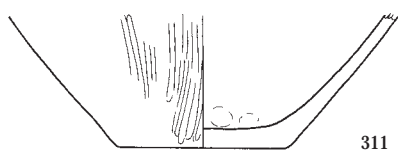
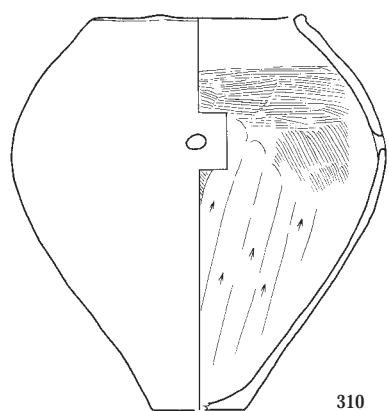
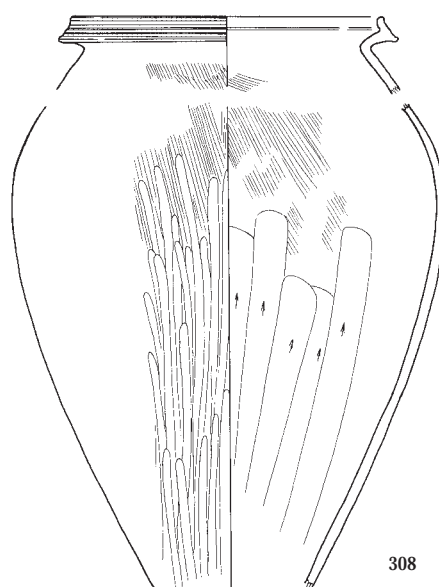
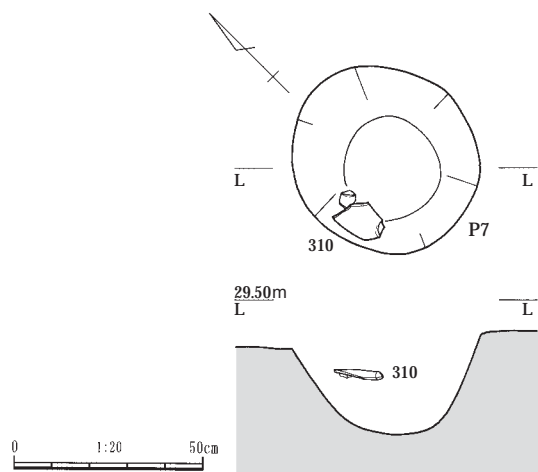
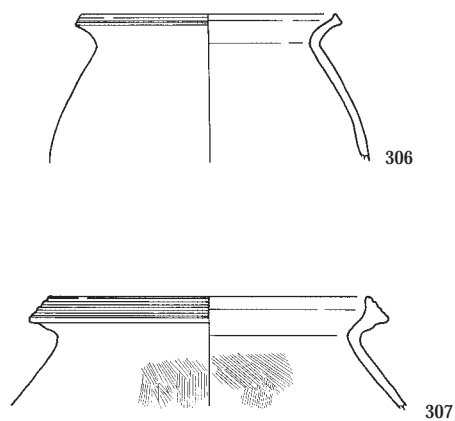
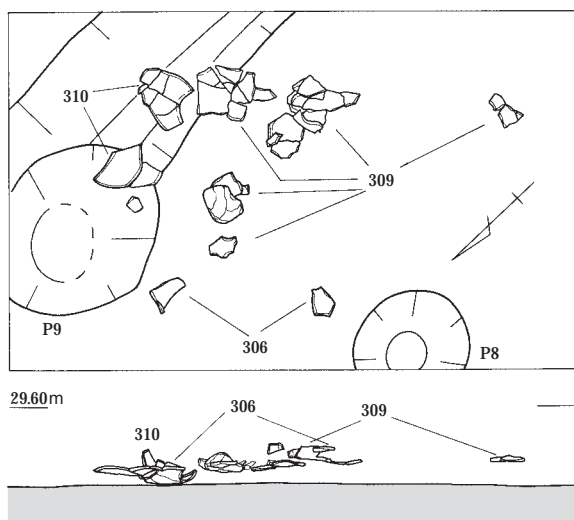


図73 豎穴住居4(2)

竪穴住居4（図72・73、図版33～36・62・63、表41・59）

<形態と構造>

E区東端、M・N7グリッドに位置する、平面形が円形を呈する竪穴住居である。検出面での規模は長軸5.8m、短軸5.4m、床面では長軸5.1m、短軸4.8m、床面積は17.9㎡を測る。検出面からの深さは10～13cmと浅く、埋土は黒褐色土の1層だけ確認できた。床面レベルは南東から北西に向かってやや下がっている。

床面からはP1～15と周壁溝を検出した。P1～4は主柱穴で、楕円形を呈しており、P1は径35×29cm、深さ37.6cm、底面の標高29.04m、P2は径62×55cm、深さ35.1cm、底面の標高29.07m、P3は径56×45cm、深さ43.1cm、底面の標高28.98m、P4は径51×42cm、深さ25.0cm、底面の標高29.12mを測る。柱間は、P1 - P2が2.3m、P2 - P3が2.4m、P3 - P4が2.5m、P4 - P1が2.1mを測る。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径96×86cm、深さ26.9cm、底面の標高29.12mで楕円形を呈している。

P6は径33×23cm、深さ10.5cm、底面の標高29.31m、P7は径54×48cm、深さ22.7cm、底面の標高29.15m、P8は径34×29cm、深さ25.0cm、底面の標高29.17m、P9は径50×43cm、深さ10.9cm、底面の標高29.26m、P10は径36×23cm、深さ33.2cm、底面の標高29.02m、P11は径31×30cm、深さ29.5cm、底面の標高29.09m、P12は径51×42cm、深さ29.4cm、底面の標高29.05m、P13は径32×25cm、深さ23.4cm、底面の標高29.14m、P14は径43×33cm、深さ12.0cm、底面の標高29.17m、P15は径22×22cm、深さ12.3cm、底面の標高29.22mで円形または楕円形を呈している。ピットの埋土は暗褐色系で、全体的に浅く、柱痕・抜き取り痕は確認できなかった。中央ピット脇にある、P7とP12は補助柱穴と考えられる。周壁溝は幅14～35cm、深さは6～17cmほどで、全周している。

貼床は確認されなかったものの、一部に床面が硬化している範囲を確認できた。本来はこの範囲がさらに広がっていたと考えられる。埋土の断面でこの硬化面を確認している（②層）。この硬化面は生活する際に踏み固められたものだと考えられる。

<遺物出土状況>

出土した遺物は床面からわずかに浮くものがあるものの床面直上出土であると考えられる。南隅と北西で甕308が、北東部でまとまって甕306・309・310が出土している。309は底部に穿孔、310は胴部に穿孔され、頸部以上が切り取りされていることから、住居廃棄に伴う祭祀に使用された可能性が高い。310の破片が、補助柱穴と考えられるP7上層から出土している。

<出土遺物>

埋土中から出土した遺物で、図化可能なものはすべて掲載した。

S20は敲石で3面に敲打痕が残る。S21は磨石。S22は粘板岩製の定型砥石である。砥石目は極細で、全面が砥面として使用され、長軸方向の使用が顕著である。傷痕、擦痕もみられる。S23は敲石である。

306～310は甕である。306は口縁部に2条の凹線が施され、端部は上につまみ出されている。外面の調整は風化が著しくわからないが、内面はナデで調整されている。307は口縁部を肥厚させて拡張している。端面には4条の凹線が巡る。308は口縁端部を上方に拡張させ4条の凹線を巡らす。体部は上半を内外面ともハケで調整した後に、下半は外面ミガキ、内面ケズリで調整している。309は口縁の拡張は小さく、2条の凹線が巡る。外面は風化が著しいが、下半にミガキがわずかに

みられる。内面は上半ハケ、下半ケズリ後、ナデで仕上げられている。底部には焼成後に外側から穿孔されている。310はやや体部が張るタイプのものである。外面の調整は風化が著しく不明であるが、下半には煤が付着している。内面は上半ハケ目、下半ケズリで調整されている。頸部から上は切り取られており、胴部最大径部付近には外側から穿孔がされている。311は甕か壺の底部で、内外面ともに風化が著しい。外面はミガキ、内面は指押さえの跡がわずかに残るのみである。これらに遺物はすべて清水編年 - 1 ~ 2 様式に収まるものであろう。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと考えている。 (三木)

竪穴住居5 (図74・75、図版33・34・36・37、表41・42)

<形態と構造>

E区東端、N・O7グリッド、竪穴住居4の南に位置する、平面形が墮円形を呈する竪穴住居である。検出面での規模は長軸4.7m、短軸4.6m、床面では長軸・短軸共に4.1m、床面積は17.3m²を測る。検出面からの深さは10~15cmと浅く、埋土は黒褐色土の1層だけが確認できた。床面レベルは南東から北西に向かってやや下がっている。

床面からはP1~14と周壁溝を検出した。P1~4は主柱穴で、円形または楕円形を呈しており、P1は径28×25cm、深さ35.7cm、底面の標高29.15m、P2は径75×60cm、深さ37.0cm、底面の標高29.12mで西側に浅いテラスをもつ。P3は径36×36cm、深さ35.3cm、底面の標高29.09m、P4は径68×63cm、深さ27.4cm、底面の標高29.19mを測る。柱間は、P1 - P2が2.3m、P2 - P3が2.3m、P3 - P4が2.5m、P4 - P1が2.3mを測る。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径100×84cm、深さ19.3cm、底面の標高29.30mで楕円形を呈しており、北西側に浅いテラスをもつ。P1~P4には柱痕および抜き取り痕は確認できなかった。

P6は径39×38cm、深さ37.4cm、底面の標高29.13m、P7は径57×40cm、深さ31.8cm、底面の標高29.18m、P8は径40×37cm、深さ43.3cm、底面の標高29.07m、P9は径45×35cm、深さ20.9cm、底面の標高29.27m、P10は径37×27cm、深さ29.9cm、底面の標高29.28m、P11は径40×33cm、深さ13.7cm、底面の標高29.37m、P12は径64×49cm、深さ35.2cm、底面の標高29.19m、P13は径29×24cm、深さ13.7cm、底面の標高29.33m、P14は径37×35cm、深さ11.7cm、底面の標高29.36mで円形または楕円形を呈している。ピットの埋土は暗褐色もしくは黒褐色で、P6、P7、P12には抜き取り痕が確認できた。中央ピット脇にあるP7とP9は、竪穴住居4と同様に補助柱穴と考えられる。周壁溝は幅16~20cm、深さは8~10cmほどで、全周している。

竪穴住居4と同様に、貼床は確認されなかったものの、一部に床面が硬化している範囲を確認でき、生活の場として踏み固められたものだと考えられる。

<遺物出土状況>

出土した遺物はほとんどが床面直上遺物であると考えられる。東側で出土した台付き壺318は南側から北側に向けて倒れこんだような状態で出土している。P2埋土中からは壺部の破片が出土している。倒れこんだときに流れ込んだものであろうか。他には埋土堆積時に流れ込んだと思われる土器小片が出土している。以上の事から台付き壺のみが住居廃絶時に置かれていた可能性があり、特殊な器種であることをあわせると、住居廃絶の際に祭祀が行われた可能性がある。

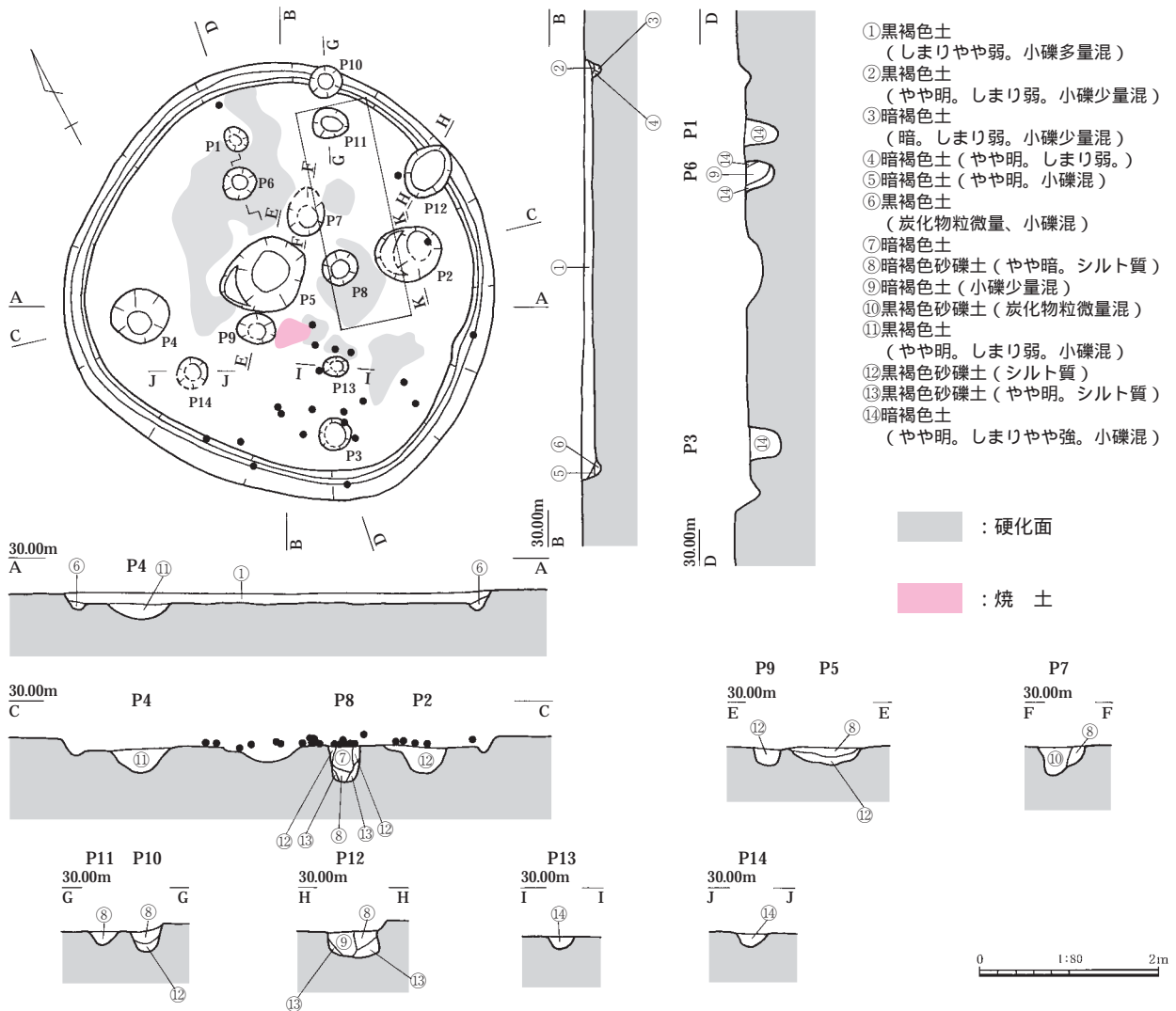
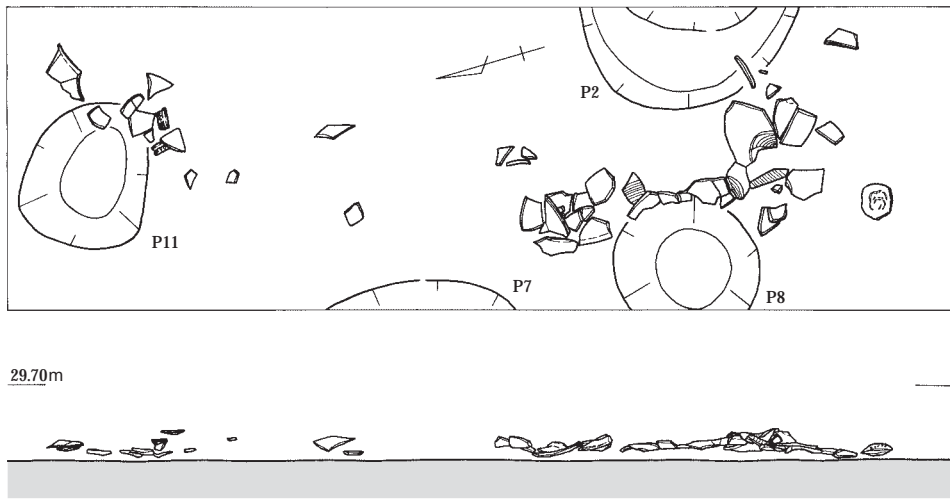


図74 竪穴住居5(1)

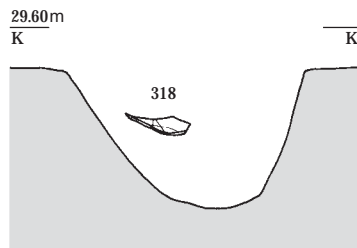
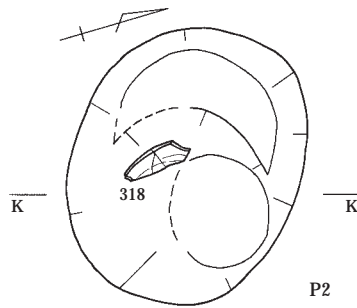
< 出土遺物 >

埋土中から出土した遺物で、図化可能なものはすべて掲載した。

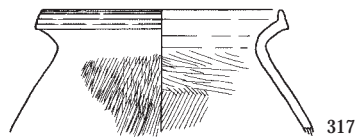
312～316は埋土中出土で、312～314は口縁部が上下に拡張する甕、315・316は壺口縁端部である。312・314は口縁部に3条の、313は口縁部に4条の凹線を施す。いずれも清水編年 - 1～2 様式に収まるものであろう。315は1条の沈線とキザミが施されている。315は口縁部が水平に広がる壺であろうか、2条の沈線とともにキザミが施されている。315・316はその他の遺物よりやや時期が古い、様式の特徴をもつ事から、混入遺物の可能性が高い。317は中央ピット(P5)出土の甕である。口縁には3条の凹線が施された後ナデ調整され、端部は上につまみだされている。体部は内面外面ともに八ケで調整されている。いずれも清水編年 - 1 様式の範囲であろう。318は台付き壺で、甕と高杯脚部を組み合わせたような器形である。口縁上端部は内傾しており、端面には1条の凹線が施されている。頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡り、体部は強く張っている。脚柱部には11条、脚裾部には9条、脚端部には3条の凹線文が巡り、脚部は大きく「八」の字状に広がっている。口縁部内側と脚裾部に一部赤色顔料が残存している。脚裾部から端部には二方の透かしがあるが、図示している一方は未貫通で、もう一方は方形で貫通している。外面の調整はやや風化しているものの、壺部は上半八ケ目、下半ミガキが、脚部には細かい八ケでの調整がみられる。内面は、



318出土状況

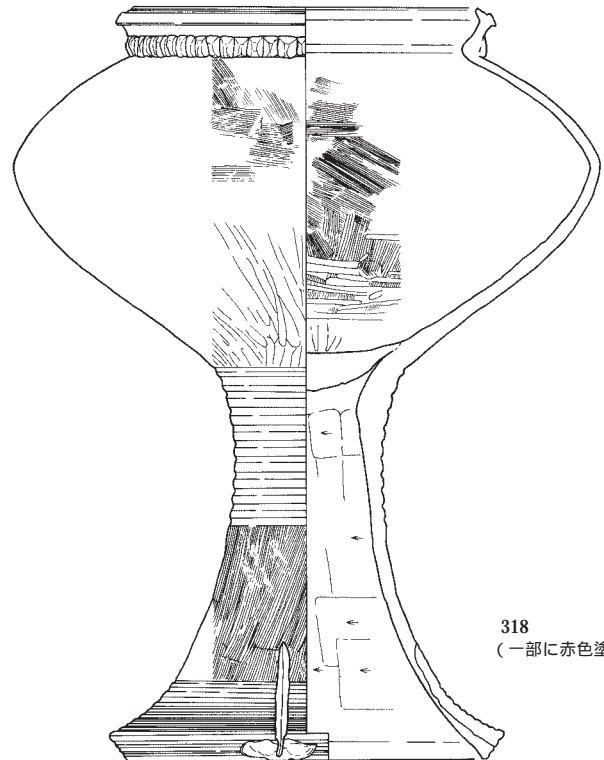
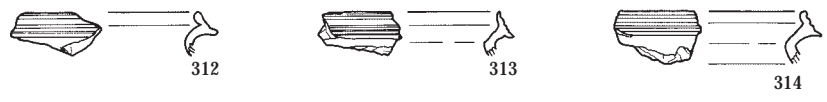


0 1:20 50cm



0 1:4 10cm

318 : 床面直上・P2
317 : P5



318
(一部に赤色塗彩残る)

図75 竪穴住居5(2)

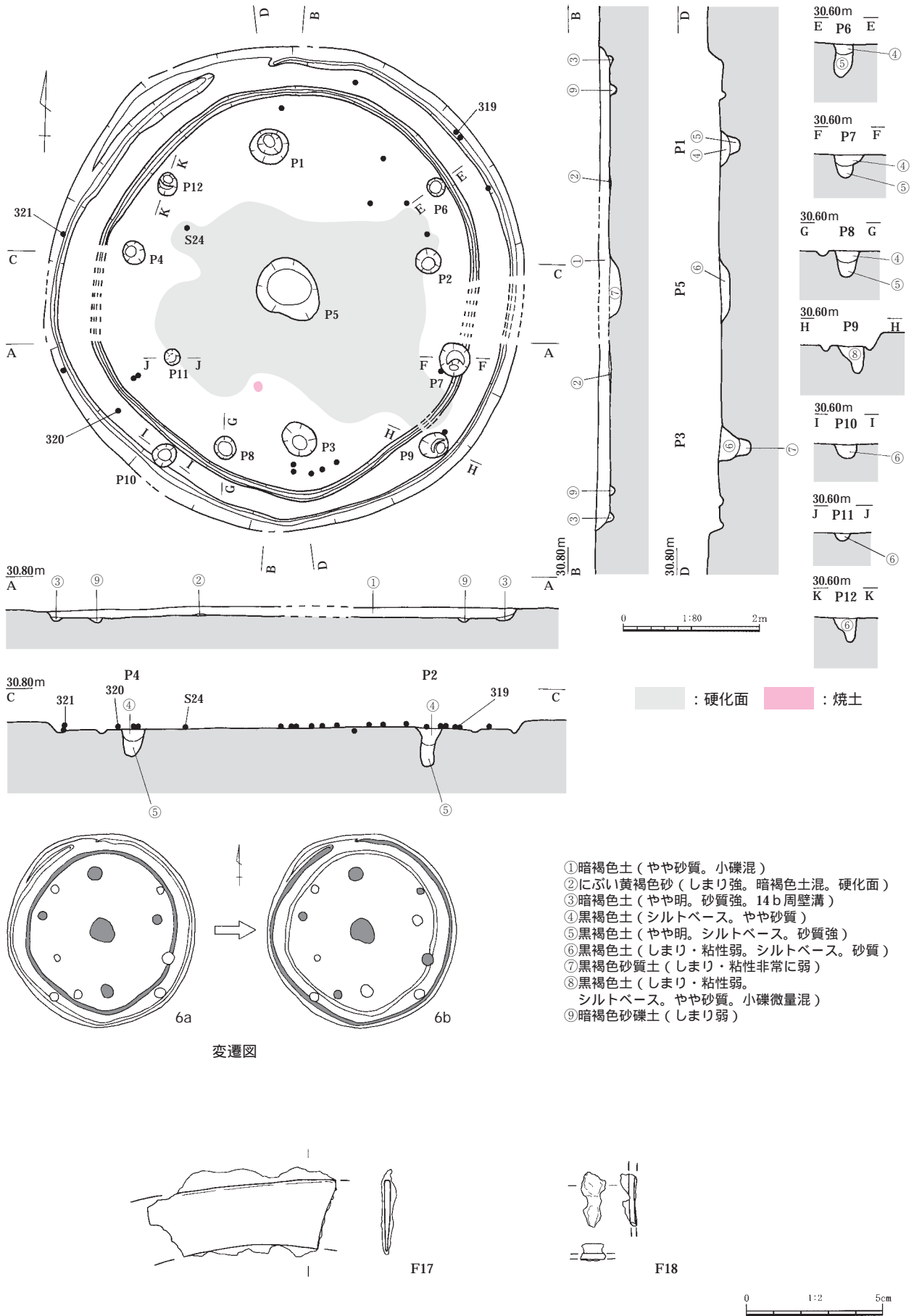


図76 竪穴住居 6(1)

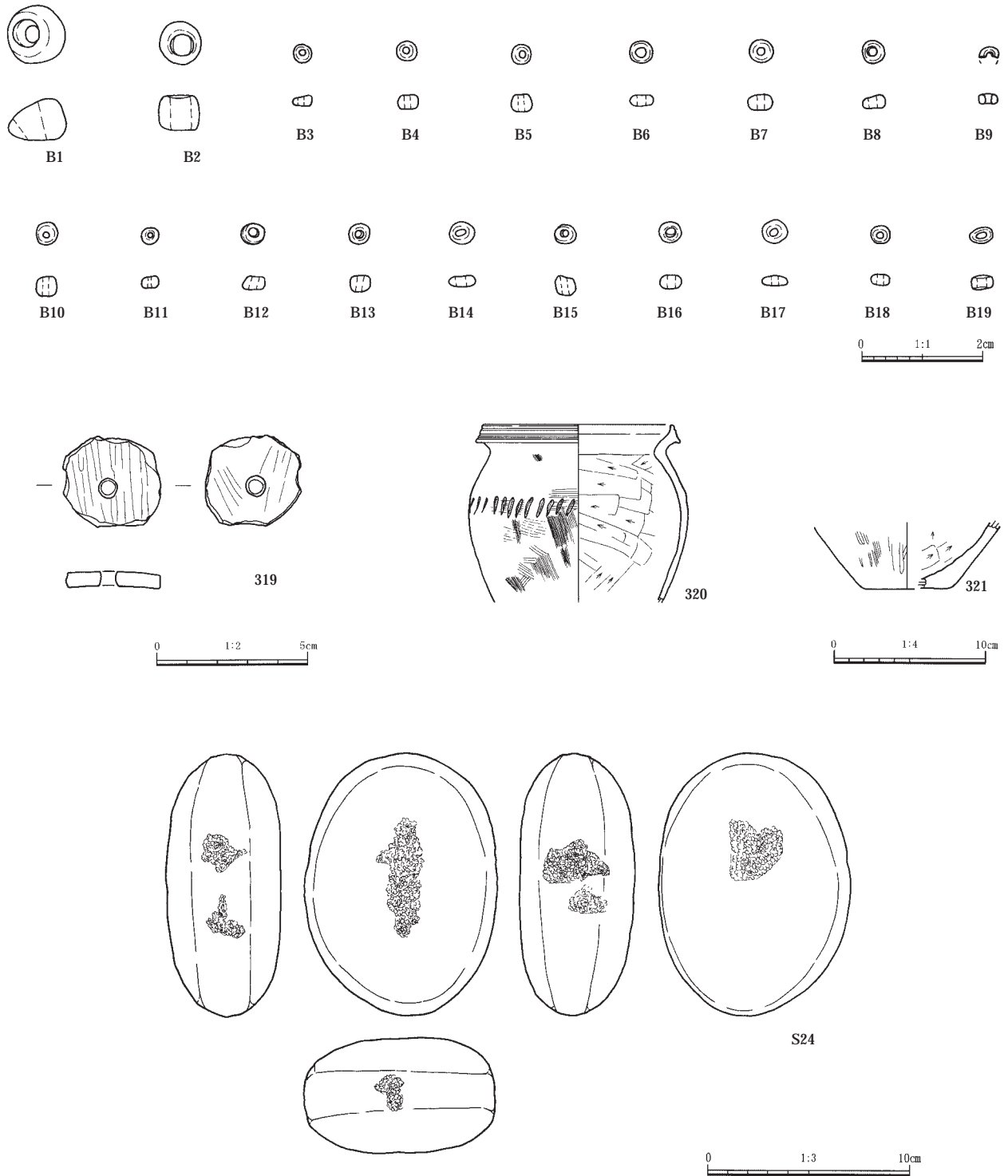


図77 竪穴住居6(2)

口縁はナデ、壺部は上半ハケ目、下半ハケ後ミガキで調整され、一部ナデ調整されており、脚部はケズリで調整されている。壺部と脚柱部は円盤充填法で接合されており、底面には脚部内面のケズリ調整に伴う工具痕が、円を描くようについている。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと考えている。竪穴住居4と竪穴住居5は形態等に共通点が多いことから、関連性が強いと考えられる。(三木)

竪穴住居6（図76・77・図版33・37・64、表42・58・59・61）

<形態と構造>

C区東端I1・2グリッドに位置する、平面形が円形を呈する竪穴住居である。床面検出時に外周とそのやや内側に2条の溝を検出し、内側の溝を切って支柱穴と思われるピットが掘り込まれていることから、拡張に伴う建て替えが行われたと考えられる。建て替え前を竪穴住居6a、建て替え後を竪穴住居6bとする。埋土は暗褐色土の1層のみ確認できた。

竪穴住居6aは、床面での規模が長軸6.8m、短軸6.4m、床面積は23.4m²を測る。4本柱で中央ピットをもつ竪穴住居である。この時期の竪穴住居としてはやや規模が大きいものである。

P1～P4は支柱穴である。P1は径58×52cm、深さ40.6cm、底面の標高29.77mで2段掘りになっており、他の支柱穴よりはやや浅い。P2は径37cm、深さ62.9cm、底面の標高29.60m、P3は径54×48cm、深さ62.0cm、底面の標高29.57m、P4は径37×32cm、深さ60.8cm、底面の標高29.59mを測り、円形または楕円形を呈する。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径100×87cm、深さ18.7cm、底面の標高30.03mを測り、不整円形を呈する。P1・P4・P5は拡張後も使用されたと考えられることから、検出時のプランが竪穴住居6aで機能していた当時の形態を保っているかは不明である。柱間は、P1 - P2が2.9m、P2 - P3が3.2m、P3 - P4が3.7m、P4 - P1が2.6mを測る。P4 - P1間が他の柱間より狭くなっている。各ピットの埋土は黒褐色土系で、P1～P4には建て替えの際に柱を抜いたためか柱痕は確認できなかった。周壁溝は、幅12～16cm、深さは6～8cmほどで、全周しており、暗褐色を呈する地山質の埋土が堆積していた。

竪穴住居6bは、竪穴住居6aの後に拡張建て替えされたものである。検出面での規模は長軸7.1m、短軸7.0m、床面での規模は長軸・短軸とも6.6mで、床面積は32.1m²を測る。5本柱で中央ピットをもつ竪穴住居である。検出面からの深さは15～20cmと浅く、底面レベルは標高30.15～30.20mでほぼ揃う。竪穴住居6aよりもさらに大きく、竪穴住居としては大型のものである。

支柱穴はP1・P6・P7・P8・P4で、P1・P4と中央ピットであるP5は竪穴住居6aと共有している。P6は径28×26cm、深さ71.1cm、底面の標高29.52m、P7は径48×46cm、深さ45.2cm、底面の標高29.75m、2段掘りになっており、P8は径36×32cm、深さ45.2cm、底面の標高29.73mを測り、円形もしくは楕円形を呈する。柱間はP1 - P6が2.5m、P6 - P7が2.7m、P7 - P8が3.5m、P8 - P4が3.2m、P4 - P1が2.6mを測る。埋土は黒褐色土系である。その他、床面で検出したピットは、P9は径43×37cm、深さ40.4cm、底面の標高29.79m、P10は径36×33cm、深さ22.0cm、底面の標高29.94m、P11は径27×23cm、深さ13.2cm、底面の標高30.08m、P12は径34×29cm、深さ36.6cm、底面の標高29.81mを測り、不整円形を呈している。ピットの埋土は黒褐色土系の2層である。周壁溝は、幅16～23cm、深さは6～8cmほどで、北側の一部を除き全周しており、埋土は暗褐色土である。

貼床は確認されなかったものの、生活が営まれた際に踏み固められたと考えられる硬化範囲が確認できた。埋土断面の床面直上で、硬化面の一部と考えられる黄褐色砂層(②層)を確認しており、床面形成の際に入れられたものか、床面の補修の際に入れられたものと考えられる。南西部で焼土を少量検出している。床面からはやや浮いているので、生活面上での地床炉としての機能は考えがたい。しかし堆積層位は下層にあたりと考えられるので、この住居に伴うものの可能性がある。

< 遺物出土状況 >

遺物の出土は北東部と南側に多くみられるが、多くは包含層からの混入と考えられる縄文土器片がほとんどであった。埋土中からは石製小玉1点、ガラス小玉18点が出土している。出土位置は押えていないものの、出土地区(A - A'、B - B'ラインで区割り)ごとにみると北東区2点(内1点はP2埋土中出土)、南東区4点、南西区7点、北西区6点で、北西区のものはやや南よりで出土したものが多かった。この事から、玉の出土分布は住居の南側に偏っていることがわかる。これらの玉は竪穴住居6に伴うものだと考えている。319~321は出土位置から竪穴住居6bに伴うものであると考えられる。F17は南西壁際、P10の近隣で出土していることから、同様に竪穴住居6bに伴うものと考えられる。

< 出土遺物 >

出土した遺物で、混入遺物と思われるものを除き、図化できたものは全て掲載した。F17・18は鉄製品である。F17は鎌で、刃部は内湾し、先端が欠損している。F18は北東部床面直上出土で、薄い板状の鉄片である。F17と同一個体の可能性がある。

B1は緑色変成岩製と思われる小玉である。B2~B19はガラス小玉で、B2は他のものより大きい。色調はB3~B9がコバルトブルー、B2・B10~B19はスカイブルーを呈している。後述する土坑21内からもガラス小玉6点が出土しており、ガラス小玉全24点中、5点(内、竪穴住居6:3点、土坑21:2点)について成分分析を行った。その結果いずれも、弥生時代末期まで多く流通するカリガラスを素材としていることが判った(第6章第4節参照)。分析を行っていないその他のガラス小玉も同様にカリガラスが素材である可能性が高いであろう。鳥取県内で弥生時代後期に住居内からガラス小玉が出土する例はしばしば見られるが、一住居1、2点の出土が大半で、まとまった数が出土することはまれである。倉吉市沢べり遺跡第3次調査1号住居出土の14点が最多であったが(岡平2001)、竪穴住居6からは18点出土したため、県内においては最多出土例となった。

319は紡錘車で、土器片を転用したものである。320は甕で、やや立ち上がった口縁には3条の平行沈線が引かれている。外面は、体部上半はナデ、下半はハケ調整されており、胴部最大径部分にはハケ状の工具でキザミが施されている。下半部分には煤の付着が認められる。内面は頸部までケズリが上がってきており、口縁はナデで調整されている。清水編年 - 1様式に相当するものであろう。321は甕か壺の底部で、外面ミガキ、内面ケズリ調整が残る。S24は敲石である。

出土遺物の時期から弥生時代後期前葉の遺構と考えている。 (三木)

竪穴3(図78、図版33・34・39・63、表42)

< 形態と構造 >

E区北東、M・N8グリッド、竪穴住居4の西側に位置する。平面形が不整円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸4.4m、短軸4.3m、床面では長軸4.3m、短軸4.1m、床面積は13.4m²を測る。検出面からの深さは浅く6~8cmで、床面レベルは南東から北西に緩やかにレベルが下がっている。

埋土は黒褐色の1層だけ確認できた。断面では浅い周溝状のものを確認したが、平面では確認する事ができず、そのほかの床面施設も検出する事ができなかった。南東中央寄りにやや浮いてはい

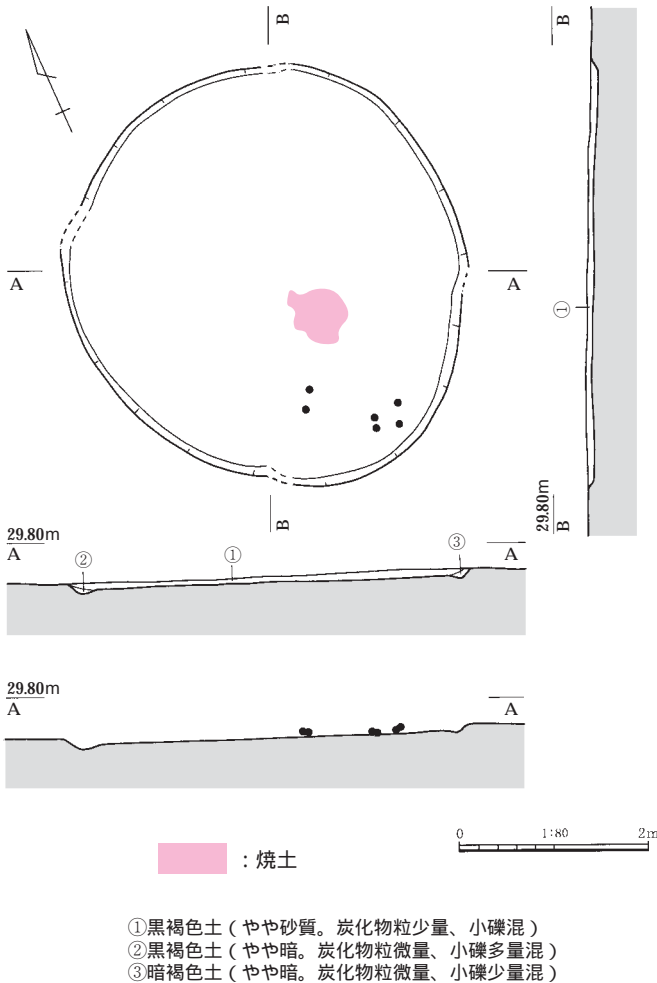


図78 竪穴3

るが、焼土を検出している。主柱穴がなく、周辺にも関連するピットが検出できなかった事から、明確な上屋構造は想定できないので竪穴住居と同じ機能を持っていたとは想定しにくい、何らかの人間活動が行われたスペースであつたろうと考えている。

<出土遺物>

遺物は小片が少量出土している。図化可能なものはすべて掲載した。322は甕の口縁端部である。端面には3条の凹線が施され、端部は上下に拡張され、断面がT字状を呈している。清水編年 - 1 ~ 2 様式に相当するものであろう。323は平底の底部で、甕か壺のものであろう。

出土遺物からこの竪穴は弥生時代中期後葉のものと考えている。 (三木)

竪穴4

(図79、図版33・34・40・63・64、表42)

<形態と構造>

E区北東、M・N8グリッド、竪穴3の西側に位置する。平面形が墮円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸4.2m、短軸3.3m、床面では長軸3.9m、短軸2.2m、床面積は9.6㎡を測る。検出面からの深さは浅く8cm程度で、底面の標高は29.20m

では揃う。

埋土は黒褐色の1層である。床面施設は検出する事ができなかったが、中央付近には竪穴住居と同様な硬化面の範囲を確認する事ができた。北東部にはやや浮いた状態で焼土を検出している。竪穴3同様、何らかの人間活動スペースとして機能していたのではないかと考えている。

<遺物出土状況>

西隅から甕325が出土している。床面からやや浮いてはいるものの、床面直上の遺物と捉えてもいいだろう。

<出土遺物>

遺物は図化可能なものはすべて掲載した。324・325は甕である。324は甕の口縁で、口縁端部が上方につまみあげられている。325は体部があまり張らないタイプの甕で、口縁部には2条の凹線が施されている。外面は頸部の下にハケが少し残るものの全体的にミガキで仕上げられている。内

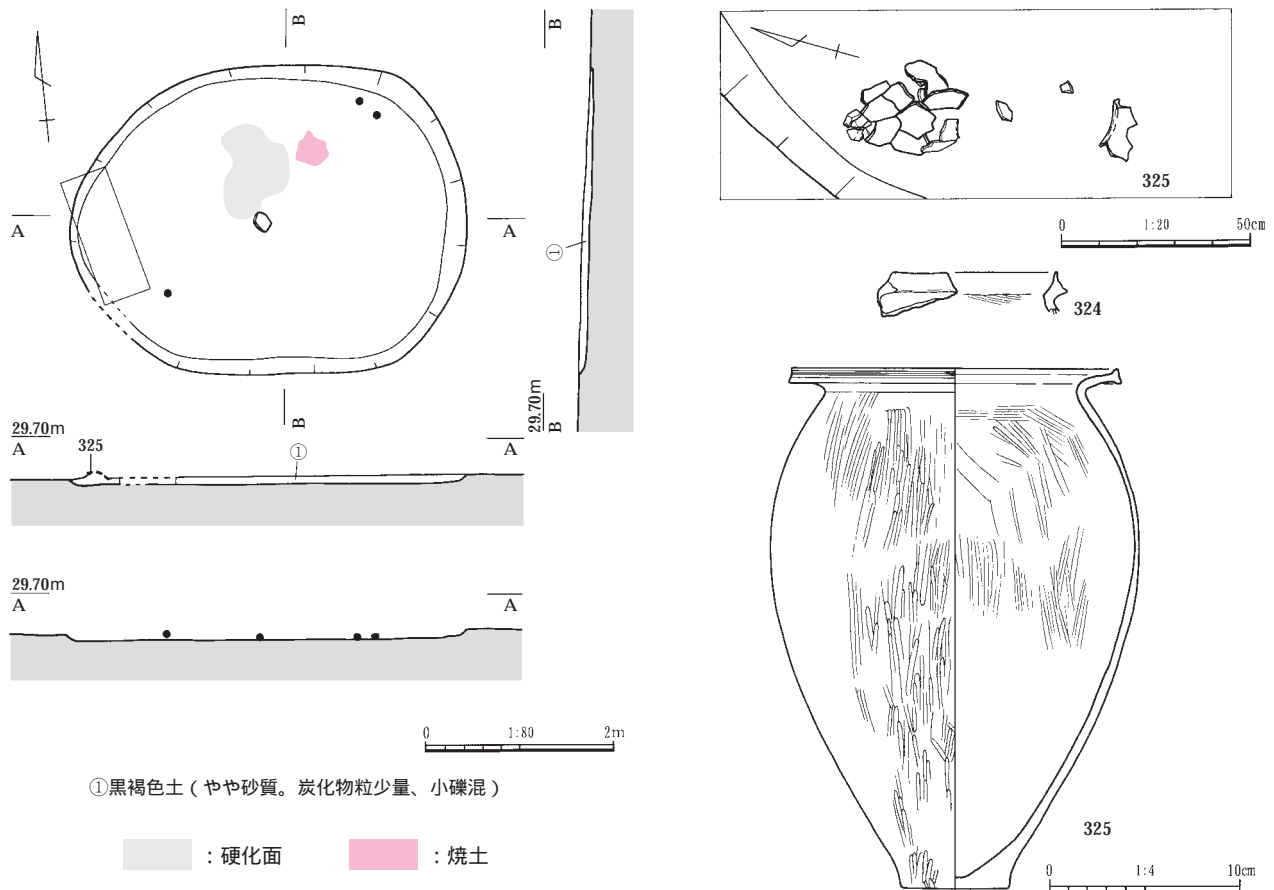


図79 竪穴4

面は上半がハケで調整されており、下半はケズリの後に丁寧にナデ消されている。いずれも清水編年 - 1 ~ 2 様式に収まるものであろう。

出土遺物からこの竪穴は弥生時代中期後葉のものと考えている。

(三木)

竪穴5 (図80・81、図版33・34・41・42・63・64、表42)

<形態と構造>

E区北端、M8・9グリッド、竪穴4の北側に位置する。遺構の1/3が調査地外に広がるため、正確な規模は不明だが、平面形が墮円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸5.6m、短軸3.6m以上、床面では長軸4.5m、短軸3.3m以上、検出床面積は12.6㎡で、17.0㎡程度の床面積規模になると推測できる。検出面からの深さは20cm程度で、床面の標高は29.0mでほぼ揃う。

埋土は黒褐色系の3層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

床面からはP1・P2と周壁溝を検出した。P1は径45×37cm、深さ31.2cm、底面の標高28.66m、P2は径48×43cm、深さ14.9cm、底面の標高28.85mで楕円形を呈し、共に黒褐色土の埋土である。周壁溝は幅12~18cm、深さ3.5~6.3cmで調査地内では南東の一部を除いて全周している。

床面では竪穴住居と同様な硬化面が確認されており、活動の場としての機能が考えられるだろう。先述の竪穴3・4と比べると規模がやや大きめであり、竪穴住居4・5とほぼ同規模であると想定できるため、竪穴3・4とは違った機能を持っていたのかもしれない。

<出土遺物>

遺物は床面直上出土のものではなく、①層上面で出土している。この事から、埋没過程に投棄され

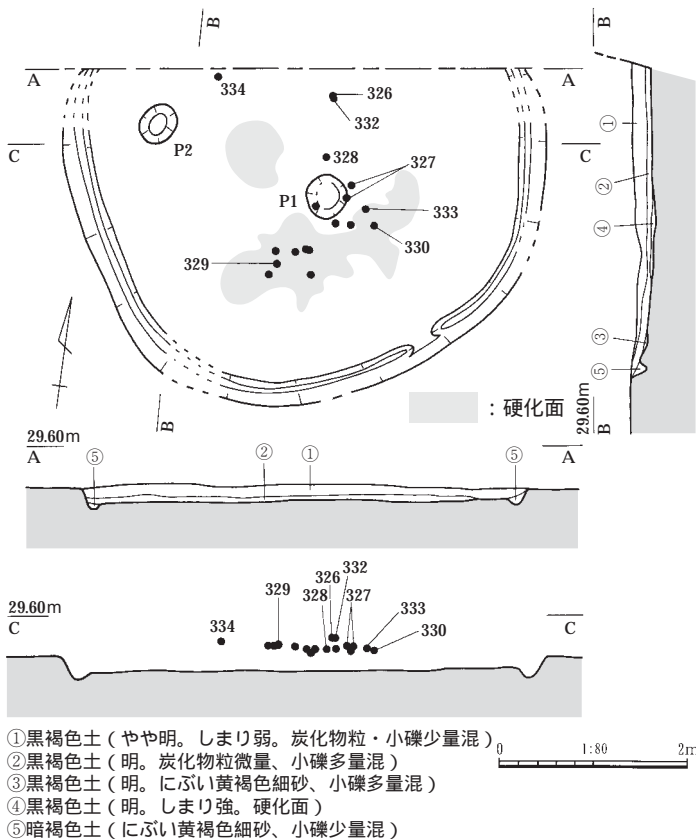


図80 竪穴5(1)

上げられ、体部はハケ後ナデで仕上げられている。肩部付近には指オサエの跡が多く見られる。328は壺の口縁である。口縁は上下に拡張され内傾している。端面には3～4条の凹線文の上から、貝殻腹縁で連続刺突文が施されている。頸部には断面三角形の貼付突帯が巡る。貼付突帯より上部はハケの後ナデられている。内面は風化が著しく不明瞭だが、ナデで仕上げられているのであろうか。329は甕で、上下に拡張され断面T字状の口縁に3条の浅い凹線が施されている。外面体部はハケで、内面は口縁ナデ、体部ハケ後ナデで調整されている。330～333は底部である。331～333は壺かやや体部の張るタイプの甕になるのであろうか。330は外面ハケ、内面ナデで仕上げられている。331は外面ハケ後ミガキ、内面はケズリ後ナデで丁寧に仕上げられている。332・333は共に外面ミガキ内面ケズリである。334は甕の体部下半である。外面の上半はハケ後下半ミガキで調整されており、煤の付着が認められる。内面は上半ハケ後下半ケズリで調整されている。底部の径はやや小さい。これらの遺物は清水編年 - 1～2 様式に収まるものであろう。

遺物の出土状況と時期からこの竪穴は弥生時代中期後葉以前のものと考えている。 (三木)

土坑20 (図82、図版64、表9・42)

E区西側、M10グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈する。検出面での規模は148×94cm、底径は128×72cm、検出面からの深さ19.2cmで底面の標高は29.20mを測る。埋土は暗褐色土の1層である。

遺物は検出面で出土しているが、ほとんどが同一個体の甕335のものであった。頸部から上は出土していない。体部は外面が上半細かいハケの後、下半のミガキが体部上半まで上がってきている。内面は上半ハケ、下半ケズリ、底部はナデで調整している。清水編年 - 3 - 1 様式頃のもの

た可能性が高い。図化可能なものはすべて掲載した。326は竪穴住居5出土の318と同様、台付き壺になると考えられる。体部の下半から脚柱部の一部のみが残存する。体部は強く張り、最大径部分には3条の凹線が施されている。外面の調整は体部・脚部共に風化が著しく不明であるが、内面には細かいハケ目がみられる。脚柱部はケズリ調整され、体部と脚柱部は円盤充填法で接合されている。327は壺で、頸部には浅く、やや幅の広いヘラ描き沈線でシカとみられる線刻画が描かれている(第7章参照)。肩部に4条の凹線が施され、胴部最大径が下に位置し、ややずん胴な器形となる。外面の調整は、頸部は上半が細かいハケ目で、下半はナデ消されている。体部はハケで調整されている。内面は頸部が横方向のハケで仕

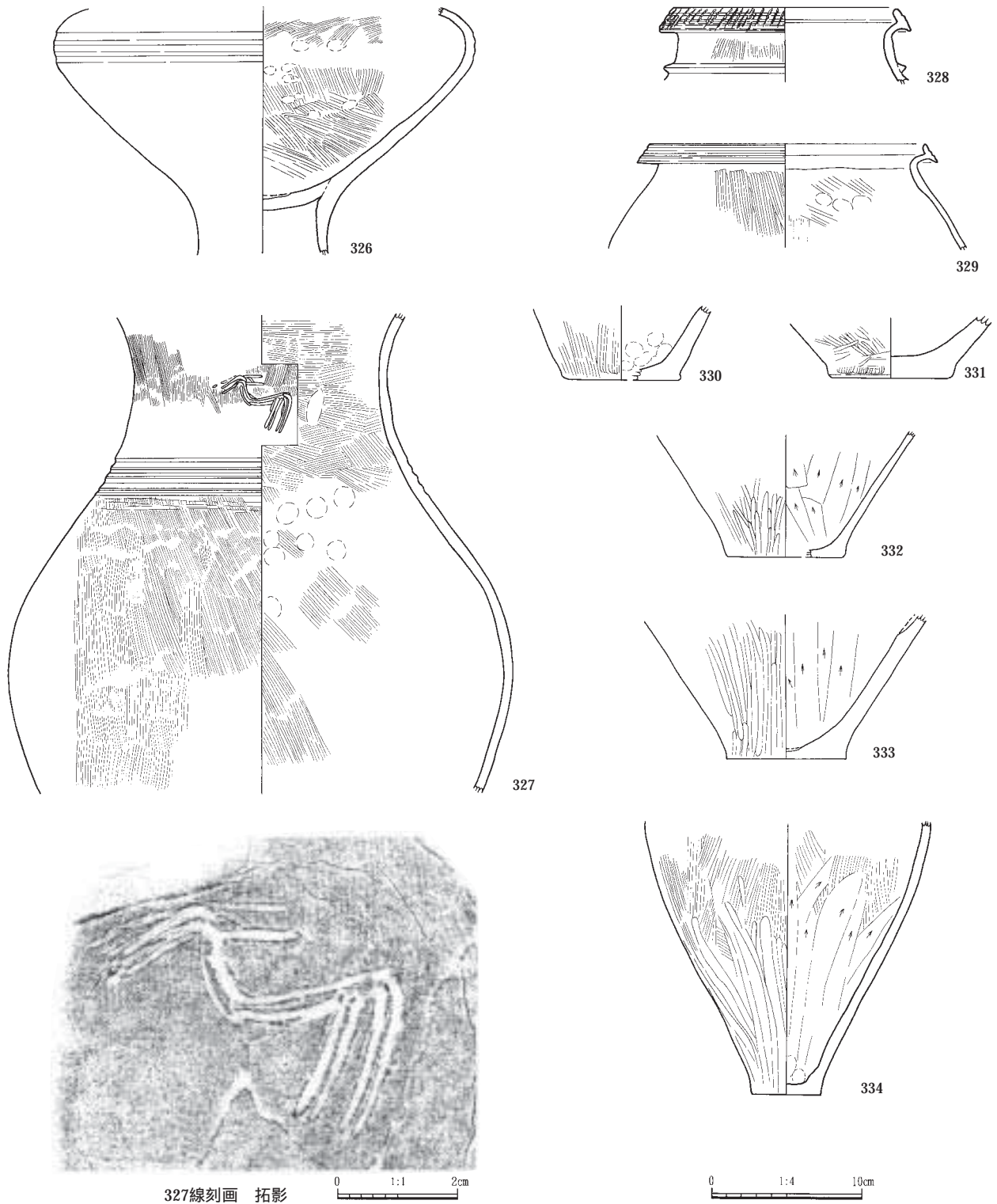


図81 竪穴5(2)

であろう。

出土遺物から弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

(三木)

土坑21(図82、図版44・64、表9・42・58)

E区西側、N10グリッドに位置する。平面形は不整形、断面は逆台形を呈する。東側にテラスをもつ。検出面での規模は160×122cm、底径は100×56cm、検出面からの最深は26.3cmで底面の標

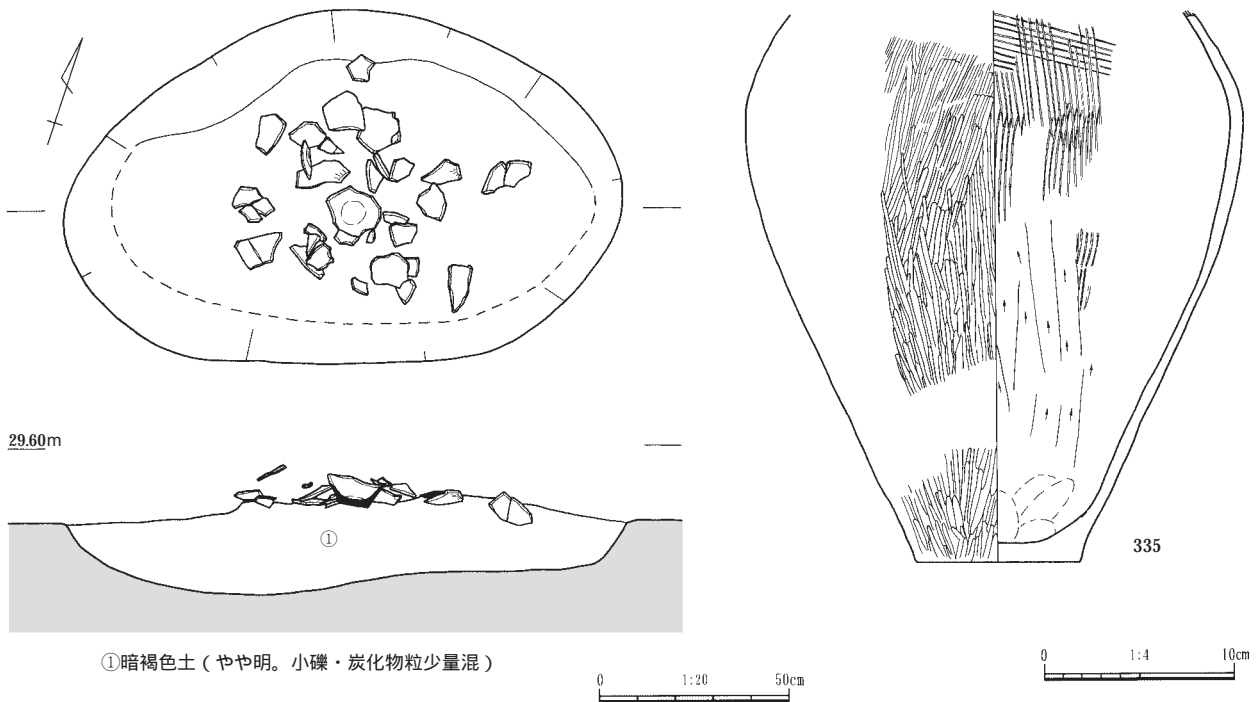


図82 土坑20

高は28.97mを測る。埋土は暗褐色土系の2層にわけられ、炭化物や焼土の含有がみられた。

遺物は埋土中から、土器が少量とガラス小玉6点が出土している。土器はいずれも小片で埋土内に混入したものの可能性がある。336は甕である。口縁には3条の平行沈線が施され、頸部の貼付突帯には刺突文が施された後、ナデられている。清水編年 - 2 様式に相当するものであろう。337は壺である。口縁部には4条以上の平行沈線が施され、頸部にはハケ調整後、凹線が施されている。凹線は螺旋状に頸部を回るものと思われ、この特徴から上東式土器の可能性はある。このことから吉備地方からの搬入品の可能性がある。清水編年 - 2 様式ごろのものであろうか。ガラス小玉は色調が大きく2色に分けられ、B20が濃紺のコバルトブルーの色調を呈している他は、淡青のスカイブルーの色調を呈している。大きさは最大径が0.29~0.42cm、厚さが0.15~0.38cmとばらつきがある。C区に位置する竪穴住居6からもガラス小玉が出土しており、何らかの関連性があった可能性がある。

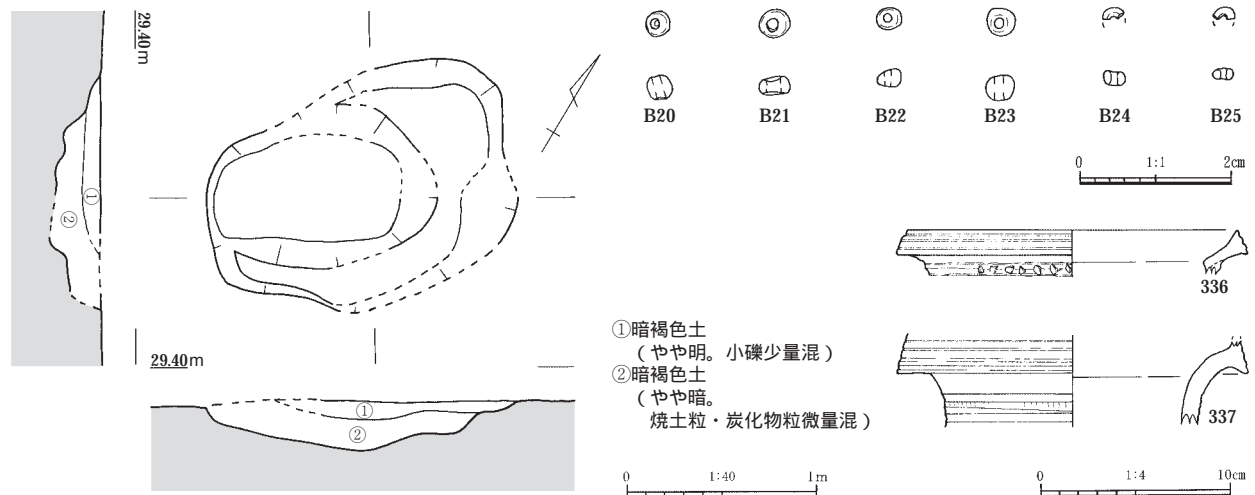


図83 土坑21

出土土器からは弥生時代後期の遺構と考えられるが、土器が厳密にこの遺構の時期を比定し得るとは断定できない。ガラス小玉が出土していることから、竪穴住居6と結びつきが強いと思われ、時期的にも竪穴住居6に近いものの可能性がある。(三木)

表9 土坑20～47計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑20	147×95	25	土坑30	114×100	17	土坑40	340×140	24
土坑21	164×130	28	土坑31	(98)×(38)	10	土坑41	197×100	18
土坑22	342×85	60	土坑32	82×65	14	土坑42	163×90	24
土坑23	150×136	9	土坑33	99×84	25	土坑43	160×81	18
土坑24	357×63	13	土坑34	79×59	14	土坑44	212×129	43
土坑25	142×72	100	土坑35	92×85	18	土坑45	104×102	22
土坑26	429×180	71	土坑36	142×62	19	土坑46	176×155	8
土坑27	119×62	27	土坑37	104×69	24	土坑47	117×98	30
土坑28	73×73	67	土坑38	106×84	14			
土坑29	82×(60)	65	土坑39	111×94	30			

3. 縄文時代の調査

縄文時代の遺物が出土した遺構のうち、良好な遺物出土状況をみせ、縄文時代に帰属する蓋然性が高いと判断できたものは土坑2基(土坑22・23)のみである。そのほか、出土遺物や遺構の形態から縄文時代に帰属する可能性があるものは土坑6基(土坑24～29)である。ただし、いずれも出土遺物は良好な出土状況でなく、包含層遺物の混入の可能性もある。このうち、土坑24～26は確実な時期決定は行えないが、遺物の出土量が多いことや、土器の遺存状態が良いことなどから、縄文時代に帰属する可能性がある。一方、土坑27・28は遺物の出土量が少なく縄文時代に帰属する蓋然性はかなり低い。また、土坑29は落し穴状の形態から判断しているのみで、時期の分かる良好な遺物を含んでいなかった。遺構の時期は、土坑22・23がともに早期末から前期初頭にかけてのもの、土坑24～26は出土遺物から単純に判断すると、土坑25・26が早期末～前期初頭のもので、土坑24が後期後葉のものである。(北)

土坑22(図84・85、図版42・69、表9・48・59)

A区、D1グリッドにおいて検出した。平面不整な隅丸長方形を呈した土坑である。横断面は逆台形を呈し、縦断面では掘り方の中央北辺がやや深くなっている。底面から壁面にかけて一部に基盤層中に含まれる握拳大の礫が露出する。埋土は黒褐色土1層からなるが、基盤土と近似し判別は困難なものであった。埋土中から遺構底面にかけてほぼ全域から縄文土器と石器が出土した。深鉢388の破片が東側でまとまって出土している。土坑が少し埋まった段階で投棄された可能性が高い。ほかに土器小片が多く出土しているが、埋土とともに流入したものが多いただろう。

土坑内からは土器と石器が出土している。土器は338の同一個体片を中心に破片が222点出土している。内訳は、早期末～前期初頭の縄文地隆帯文土器が5点、早期末～前期初頭の条痕地隆帯文土器が209点(大半が388の同一個体片)、前期初頭の西川津式土器の口縁片が7点(体部は隆帯文土器と区分できない)、後期土器の底部が1点である。338は深鉢の体部である。体部内外面とも貝殻腹縁によって条痕が施される。粘土帯の積み上げ痕跡が明瞭に観察でき、内面の粘土帯接合部には指頭圧痕が残る。胎土には繊維が混入される。早期末～前期初頭のものであろう。339～342は条痕

第5章 第3調査地の調査

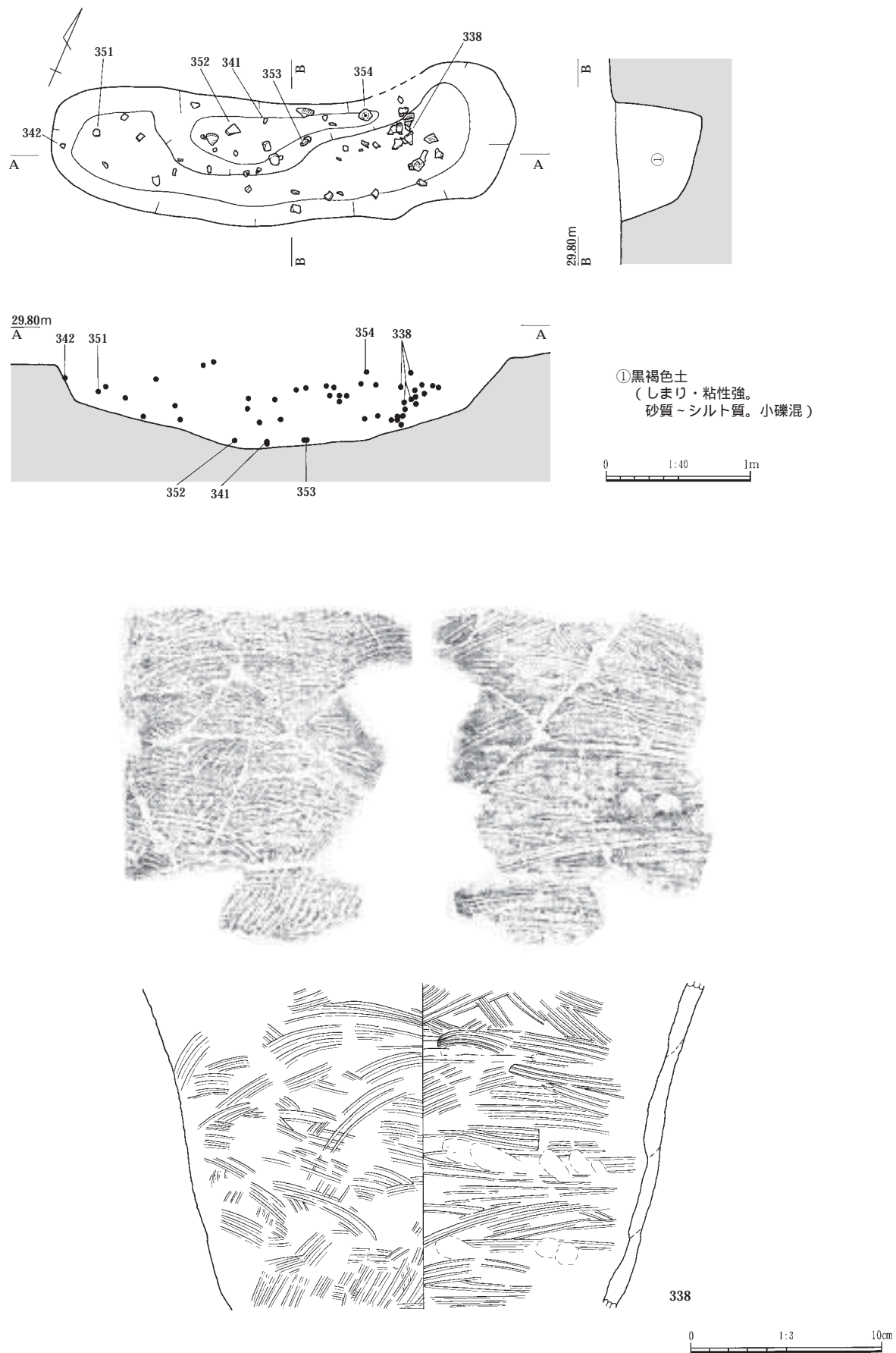


図84 土坑2(1)

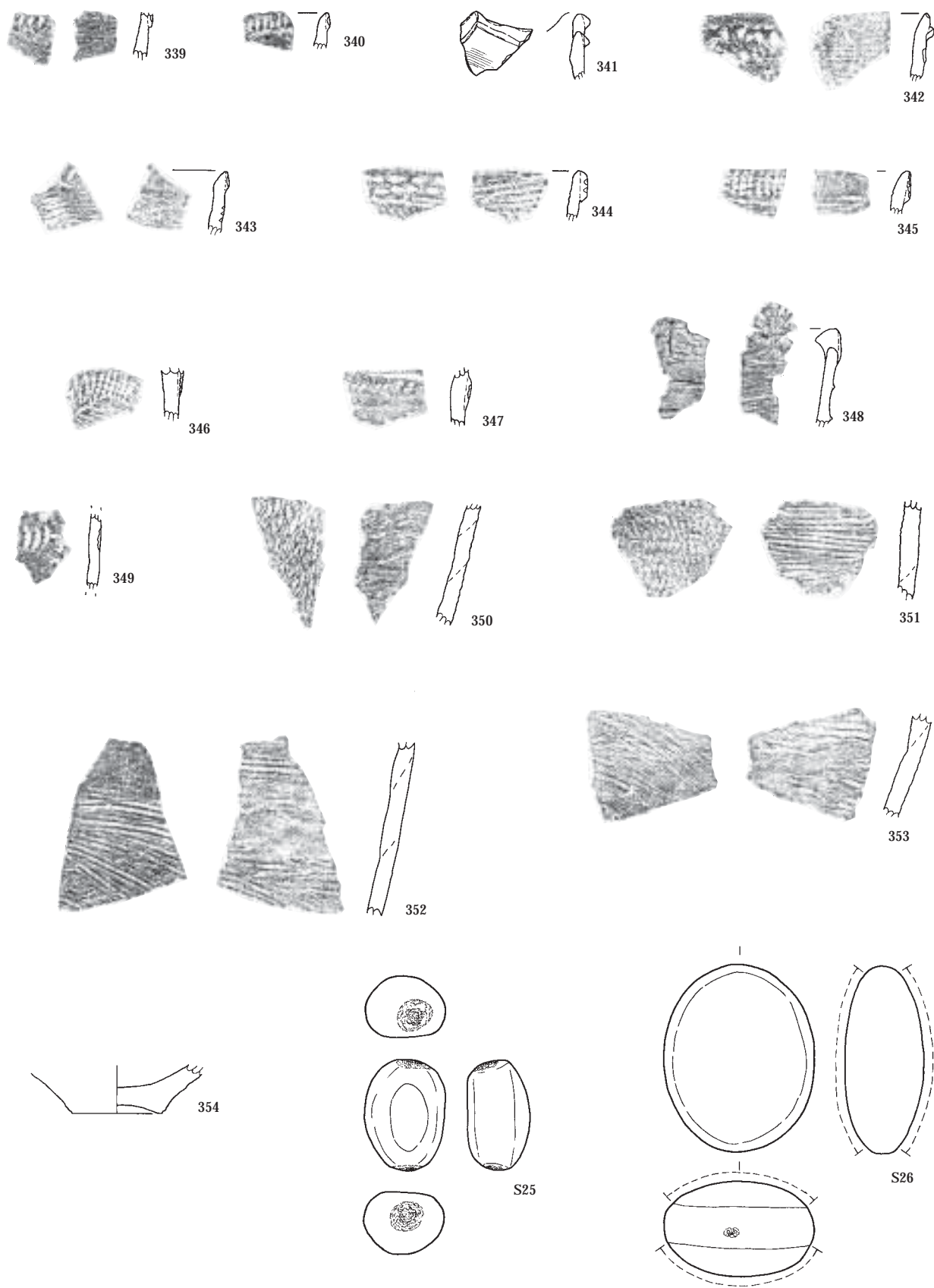
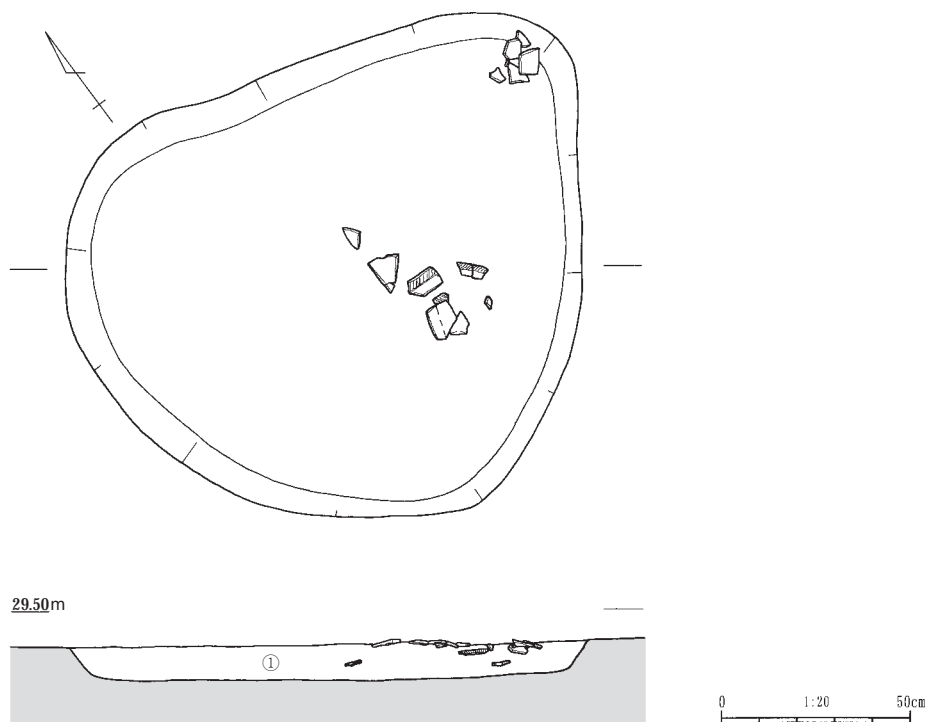


図85 土坑2(2)



①暗褐色砂礫

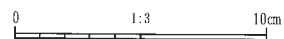
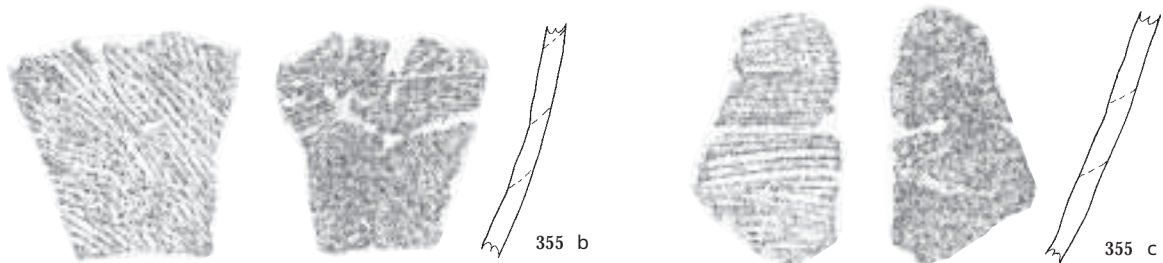
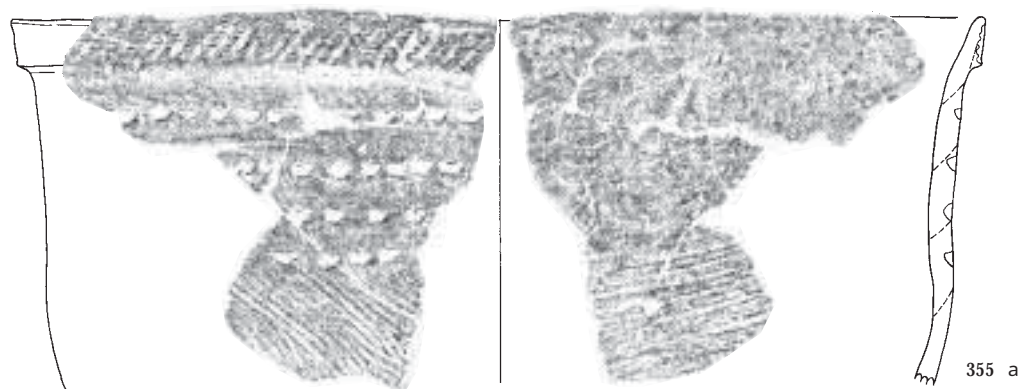


図86 土坑23

地文の隆帯文土器の口縁部片。340は波状口縁の波頂部片で無キザミの隆帯を口縁端に貼り付ける。343～345は西川津式A類の口縁部片である。343は口縁端に隆帯を付し内面を面取りして口縁端を尖らせる。隆帯下に縦方向の爪形刺突文列が施される。344は口縁端に幅広の隆帯をつけ、隆帯上に刺突文を施す。345は尖り気味の口縁端部に、幅広の低い隆帯を施す。隆帯には貝殻腹縁による刺突文を施す。346は体部片。幅広で低い隆帯がつく。貝殻腹縁による刺突を密に施す。347は体部片。繊維を含み、粘土帯は強く貼り付けられ隆帯をなさない。348は細い隆帯が付されることから西川津式B類と考えられる。口縁には突起がつく。349は貝殻腹縁による刺突文列が施される体部片。西川津式A類のもの。350・351は外面に縄文、内面に条痕を施す。早期末～前期初頭の隆帯文土器の体部である。352・353は同一個体で、内外とも貝殻条痕で調整される。早期末～前期初頭の隆帯文土器ないしは西川津式土器の体部である。354は後期土器の底部。これのみ他の土器とは時期が異なる。検出面近くでの出土であるため混入の可能性が高い。石器は88点出土した。内訳は楔形石器1点（黒曜石）剥片63点（黒曜石60、硬質安山岩3）碎片21（黒曜石）石核1（黒曜石）敲石2（粗粒安山岩）である。S25は敲石。S26は敲石と磨石の複合石器。

出土した土器から、この遺構は縄文時代早期末～前期初頭ごろのものと考えられる。（北・日置）

土坑23（図86、図版43・69、表9・48）

E区東部、M7グリッドに位置する。径約1.5mの平面不整円形を呈す浅い土坑で、フラットな底面をなす。埋土は単層で層に類似する暗褐色砂質土である。土坑内からは同一個体の縄文土器片がまとまって出土した（出土状況を図化していないものもある）。大半が検出面付近で確認したが、土坑底面付近でも出土している。出土した土器片は72点で、すべて355の同一個体の破片と考えられる。遺存状態は非常に良好で、接合できなかつた破片も相当数ある。こうした状況から、この355はこの土坑に廃棄されたものである可能性が高いと考える。

出土遺物は355の深鉢形土器である。355aは口縁から胴部屈曲部にかけての破片、355b・cはaより下位に位置する破片で、bは胴部屈曲部より下半の破片、cはbよりもさらに下位に位置する破片である。胴部が屈曲する器形で、口縁端に二枚貝の貝殻腹縁によって連続刺突が施された肥厚帯をもち、胴部屈曲部上半には平面D字形の刺突文列が4列施される。外面調整は胴部下半を二枚貝条痕、上半をナデで行い、内面は板状工具かと思われる植物質の工具による条痕調整の後、胴部屈曲部を残し、ほかの部位にはナデを加えて仕上げている。こうした特徴から、この土器は前期初頭の西川津式A類にあたると考える。

出土遺物から、この遺構は縄文時代前期初頭のものであると考える。（北）

土坑24（図87、図版43・70、表9・48）

B区、G1グリッドにおいて検出した。この付近は、地面がやや高くなっており、南東の丘陵に向かって地形が徐々に立ち上がる部分である。長細い溝状を呈する土坑である。土坑の埋土は黒褐色土1層からなる。基盤土との判別が困難であったため、掘り込み面よりもかなり下で検出しているものと思われる。縄文土器が3点出土した（356～358）。いずれも浮いた状態であるが、358は遺存状態のよい大型の破片であったため、この土坑にともなう可能性がある。ほかは包含層の混入遺物であろう。356・357は早期末～前期初頭の隆帯文土器。358は凹線文土器。頸部に向けてすばま

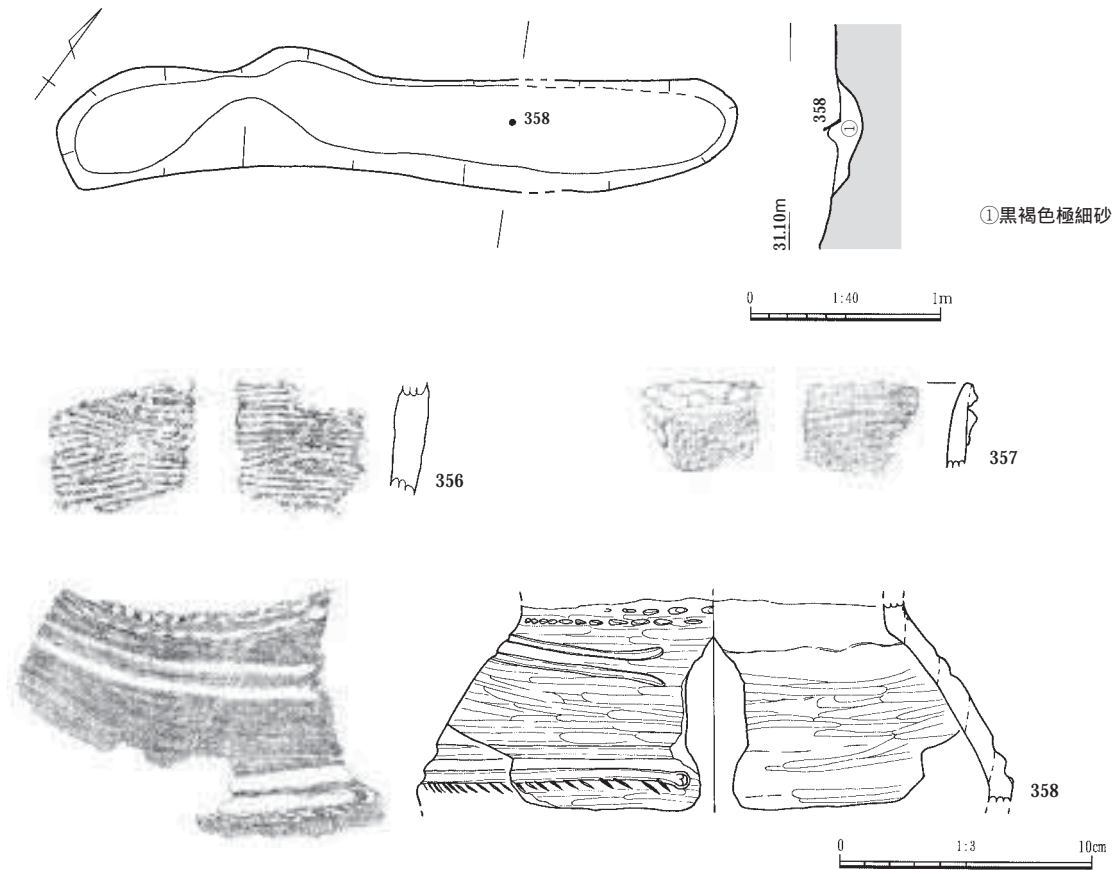


図87 土坑24

る器形をなす。注口土器ないしは壺形土器の可能性はある。頸部には刺突文列が2列施され、その下には凹線が2条横走する。胴部屈曲部には斜めのキザミが施され、その上に2状の凹線が施される。うち、1本の凹線は片端で途切れ、巻貝殻口部によるものかと思われる凹点をつけられる。内外面とも丁寧に磨かれている。元住吉山 式期のものであろう。

出土遺物からは縄文時代後期後葉の可能性はあるが、遺物は確実に時期を判定できる出土状況にない。(北・日置)

土坑25 (図88、図版43・70、表9・48・49・59)

B区、G3グリッドにおいて検出した。掘り方のほぼ中央がトレンチと重複するが、平面隅丸長方形、断面逆台形の土坑である。埋土は第2遺構面上に堆積していた層とほぼ同質で、層堆積時に自然堆積したようである。遺構内からは縄文土器片41点、石器5点が出土している。これらは埋土中に満遍なく含まれており、埋没中に流入した可能性が高い。出土土器は早期末～前期初頭のもののみに限られるため、埋没時期が限定できる可能性がある。359～362・364は隆帯文土器の口縁片。362は波状口縁波頂部で、垂下する隆帯が付される。その他は体部片。いずれも早期末～前期初頭の隆帯文土器の体部の可能性が高い。367・369が縄文地、他は条痕地のもの。石器は石鏃1点、剥片3点、碎片1点が出土している。すべて黒曜石製である。S27は凹基式の石鏃。

出土遺物が量的にも時期的にもまとまっていることから、これらが遺構の時期を示すものである可能性がある。確実な時期は決定できないが、縄文時代早期末～前期初頭ごろのもの可能性がある。(北・日置)

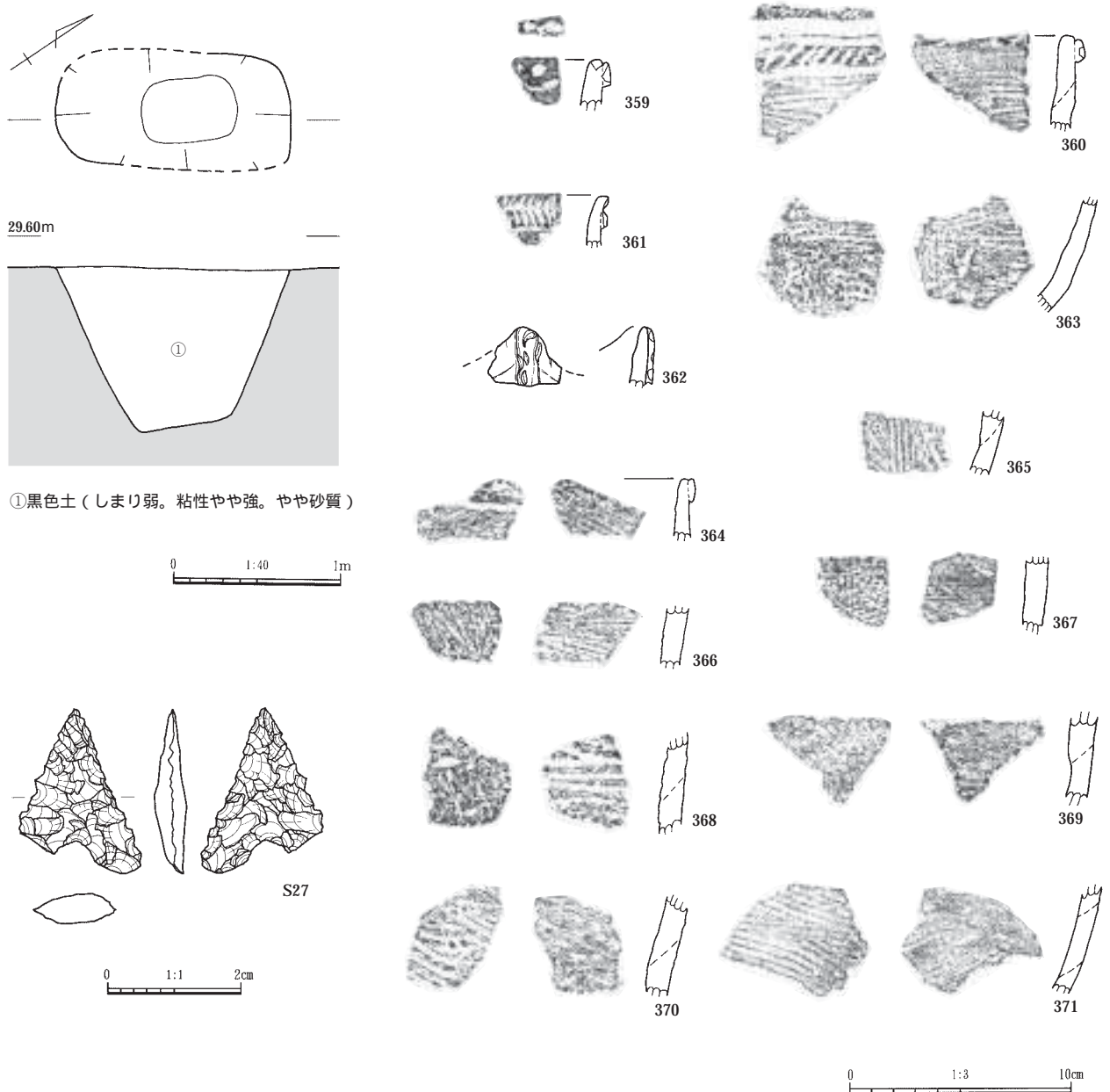


図88 土坑25

土坑26（図89、図版43・70、表9・49・59）

B区、F3からG3グリッドにまたがって検出した。不整な長楕円形の大型土坑。縦断面、横断面とも逆台形を呈する。底面の北東側には水が溜まっていた痕跡が残る。埋土は第2遺構面上に堆積していた層土とほぼ同質で、層堆積時に自然堆積したようである。遺構内からは土器片51点、土製品1点、石器24点が出土した。これらは埋土中に満遍なく含まれており、埋没中に流入した可能性が高い。出土土器は早期末～前期初頭ののものに限られるため、埋没時期が限定できる可能性がある。出土土器はすべて隆帯文土器である。376は口縁片で、外面に縄文が施される。隆帯は見られないが、縄文地の隆帯文土器のバリエーションのひとつであろう。377は条痕地の隆帯文土器口縁片。372～375は内外とも条痕調整で、隆帯文土器の体部片と思われる。378は円盤状の土製品。胎土に繊維を混入する点で早期末～前期初頭の土器と共通性がある。石器の内訳は石鏃1点（硬質安山岩）、スクレイパー2点（黒曜石）、楔形石器2点（黒曜石）、使用痕のある剥片1点（黒

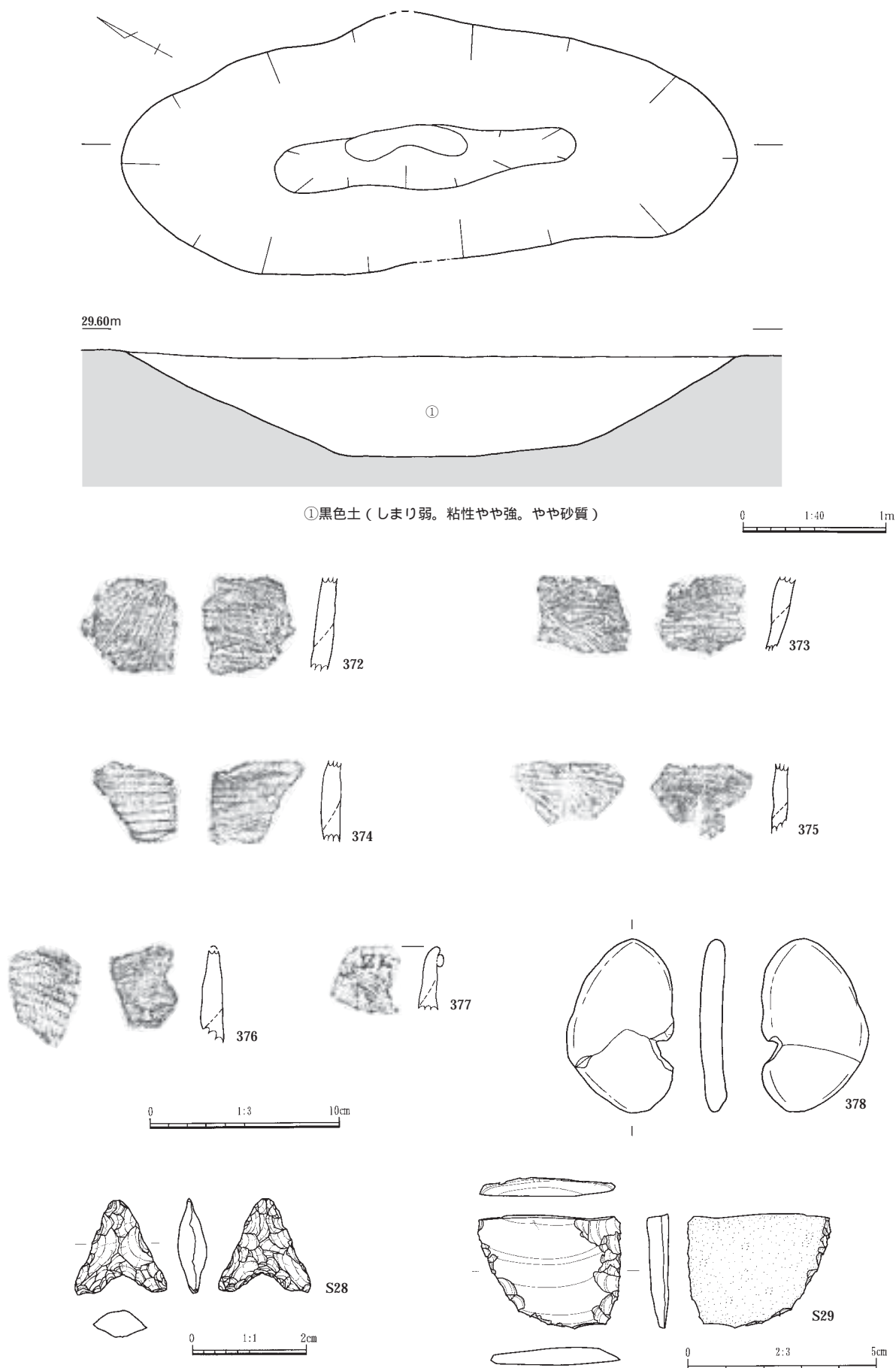


図89 土坑26

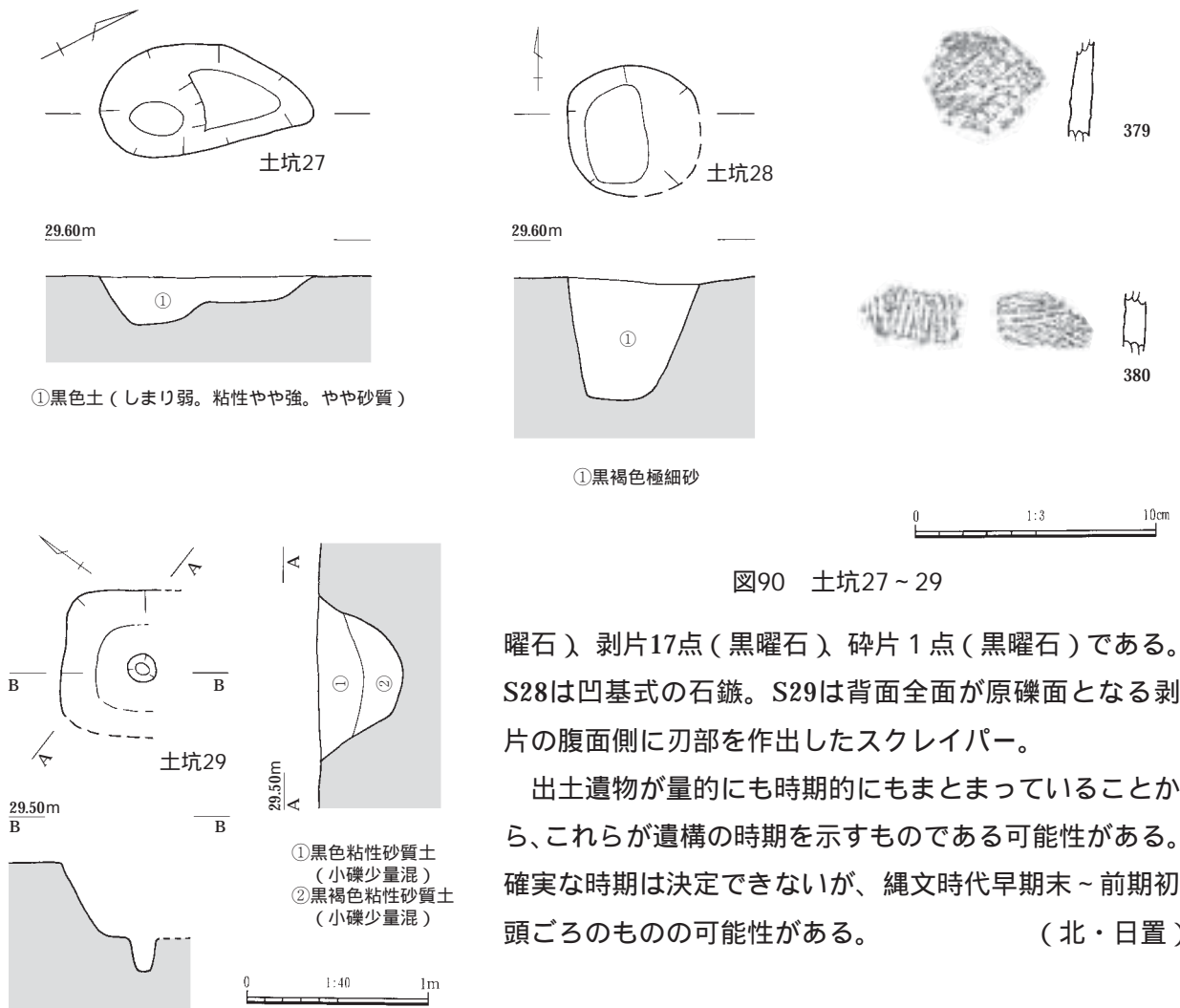


図90 土坑27～29

曜石) 剥片17点(黒曜石) 碎片1点(黒曜石)である。S28は凹基式の石鏃。S29は背面全面が原礫面となる剥片の腹面側に刃部を作出したスクレイパー。

出土遺物が量的にも時期的にもまとまっていることから、これらが遺構の時期を示すものである可能性がある。確実な時期は決定できないが、縄文時代早期末～前期初頭ごろのものの可能性がある。(北・日置)

土坑27 (図90、図版43・70、表9・49)

B区、G3グリッドにおいて検出した。平面やや不整な長楕円形を呈する土坑である。土坑のほぼ半分はテラスになっており、土坑の一端が下端となる。埋土は層堆積時に自然堆積したようである。縄文早期末～前期初頭の条痕文土器の細片が1点のみ出土した。埋没時の混入と思われる。(日置)

土坑28 (図90、図版43・70、表9・49)

A区、E1グリッドにおいて検出した。掘り方の一部はトレンチと重複する。平面やや不整な円形、断面は逆台形を呈する。底面は平坦であった。基盤層は握り拳大の礫を多量に含む部分に位置するが、埋土は第2遺構面上に堆積する層に近似する黒褐色の極細砂1層からなる。埋土のほぼ中位から縄文早期末～前期初頭の条痕文土器の細片が1点のみ出土した。埋没時の混入と思われる。(日置)

土坑29 (図90、図版43、表9)

A区、D4グリッドにおいて検出した。掘り方の大部分はトレンチと重複し、記録できなかった。トレンチ壁面の土層から、埋土は黒褐色土の粘度から2層に分けた。自然堆積である。トレンチの

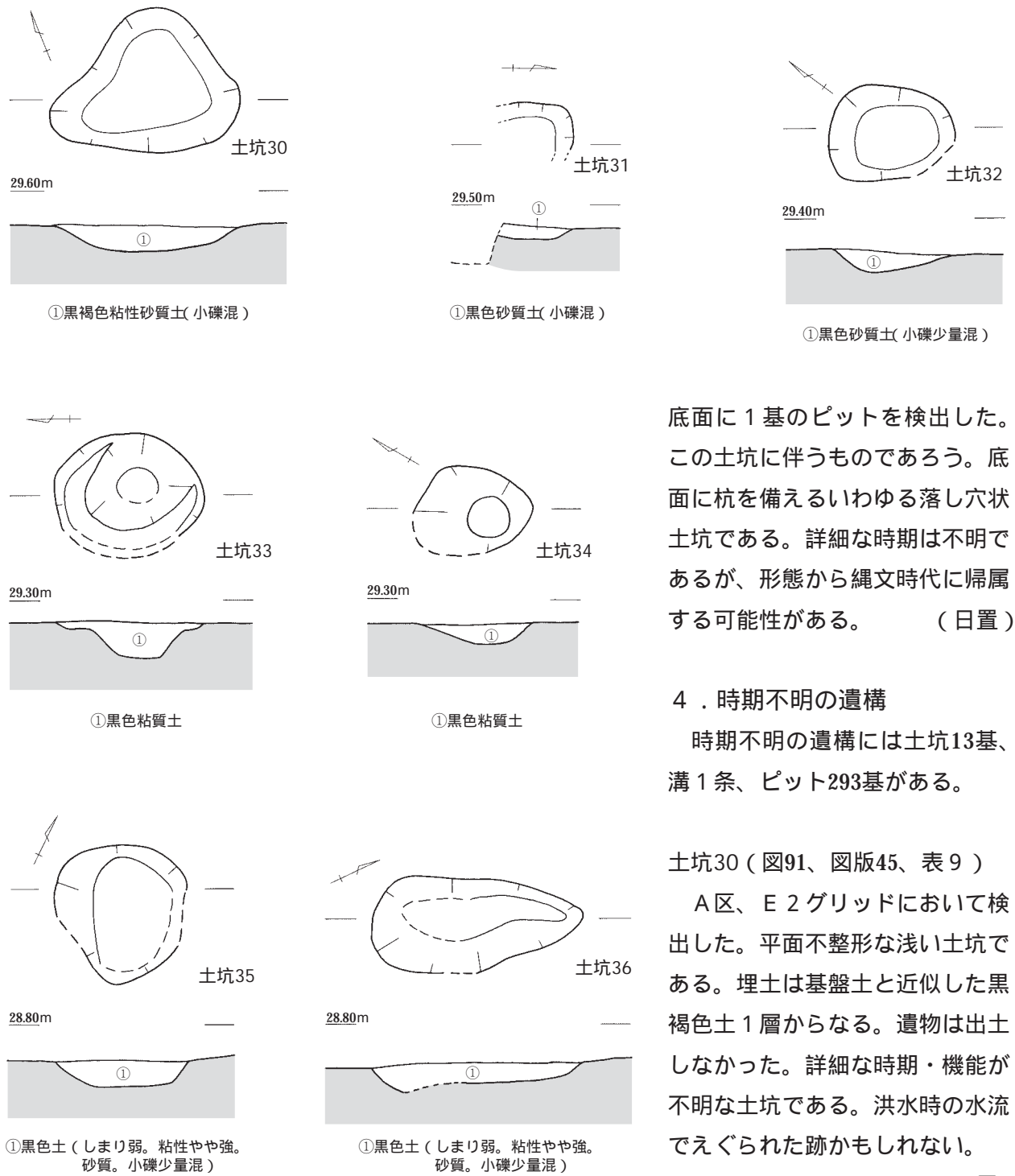


図91 土坑30～36



底面に1基のピットを検出した。この土坑に伴うものであろう。底面に杭を備えるいわゆる落し穴状土坑である。詳細な時期は不明であるが、形態から縄文時代に帰属する可能性がある。(日置)

4. 時期不明の遺構

時期不明の遺構には土坑13基、溝1条、ピット293基がある。

土坑30(図91、図版45、表9)

A区、E2グリッドにおいて検出した。平面不整形な浅い土坑である。埋土は基盤土と近似した黒褐色土1層からなる。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能が不明な土坑である。洪水時の水流でえぐられた跡かもしれない。

(日置)

土坑31(図91、図版45、表9)

A区、E2グリッドにおいて検出した。土坑の大部分がトレンチ

と重複し、全体形を記録できなかった。検出できた範囲では、ごく浅い土坑で、埋土は風化した安山岩細礫を含む黒色砂質土1層からなる。遺物は出土せず、詳細な時期や機能とも不明の土坑である。洪水時の水流でえぐられた跡かもしれない。(日置)

土坑32（図91、図版45、表9）

A区、D4グリッドにおいて検出した。一部がトレンチと重複する。平面不整形な土坑である。埋土は黒色砂質土1層からなる。詳細な遺物は出土しなかった。時期・機能など不明な土坑である。（日置）

土坑33（図91、図版45、表9）

A区、D4グリッドにおいて検出した。土坑34と隣り合う。掘り方の西端がトレンチと重複する。平面円形を呈する、段掘りの土坑である。埋土は黒色砂質土1層からなり、遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能とも不明の土坑である。（日置）

土坑34（図91、図版45、表9）

A区、D4グリッドにおいて検出した。土坑33と隣り合う。掘り方の西端がトレンチと重複する。平面不整な円形を呈する土坑である。土坑33と同様、埋土は黒色砂質土1層からなる。遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能とも不明な土坑である。（日置）

土坑35（図91、図版45、表9）

A区、E6グリッドにおいて検出した。この付近はより地形が低くなり、黒色土の基盤層には細礫を多く含み、南東から北西へと砂礫層が帯状に露出する部分である。平面不整な土坑である。底面は平坦である。埋土は黒色土1層のみである。自然堆積であろう。遺物は出土せず、詳細な時期や機能は不明の土坑である。（日置）

土坑36（図91、図版45、表9）

A区、E6グリッドにおいて検出した。平面不整な土坑である。埋土は土坑35と同様、黒色土1層のみである。自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能は不明の土坑である。（日置）

土坑37（図92、図版45、表9）

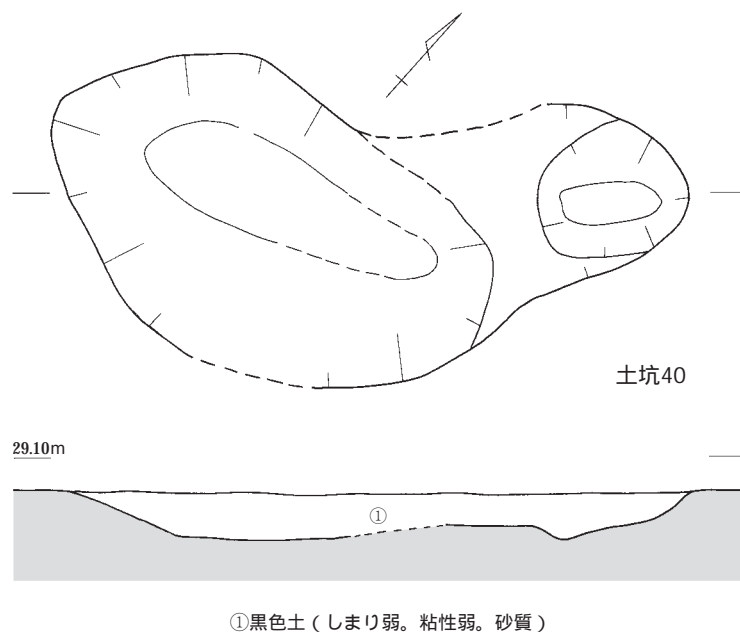
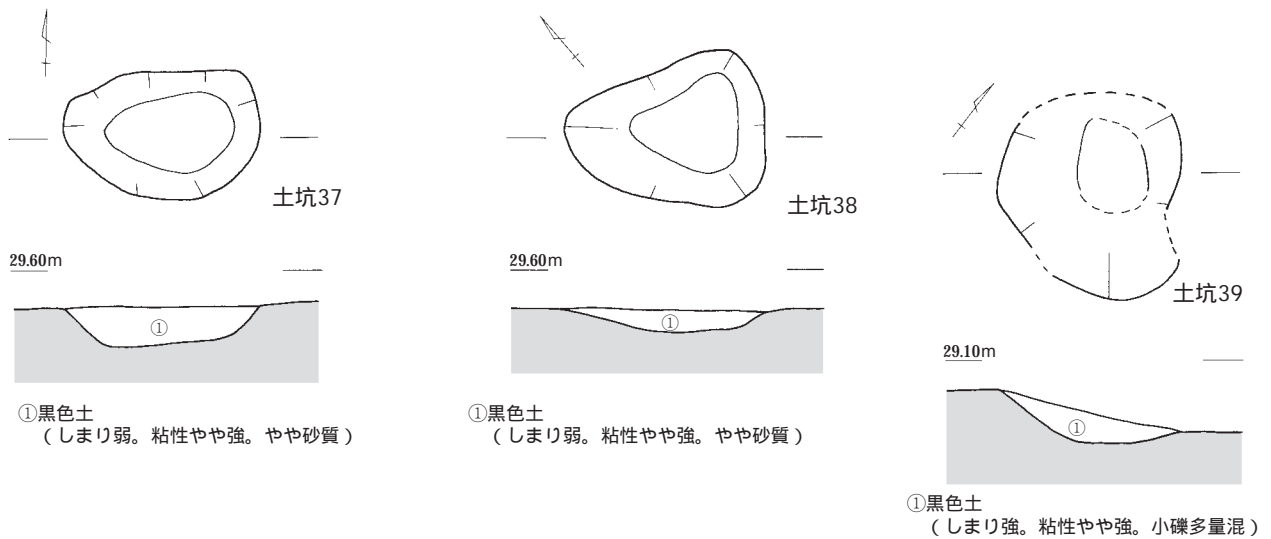
B区、G3グリッドにおいて検出した。平面不整な楕円形を呈する浅い土坑である。埋土は黒色砂質土1層である。底面は基盤層に含まれる多量の細礫が露出する。遺物は出土しなかった。詳細な時期、機能などは不明な土坑であるが、洪水時に水流でえぐられた跡の可能性もある。（日置）

土坑38（図92、図版46、表9）

B区、G3グリッドにおいて検出した。平面隅丸三角形を呈する浅い土坑である。埋土は黒色砂質土1層であるが、第2遺構面上に堆積していた層と同様である。層堆積時に自然に埋没したものとおもわれる。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明の土坑である。（日置）

土坑39（図92、図版46、表9）

B区、H6グリッドにおいて検出した。平面不整形な土坑である。埋土は黒色土層1層のみである。底面は層中に含まれる砂礫が露出する。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明な土坑である。（日置）

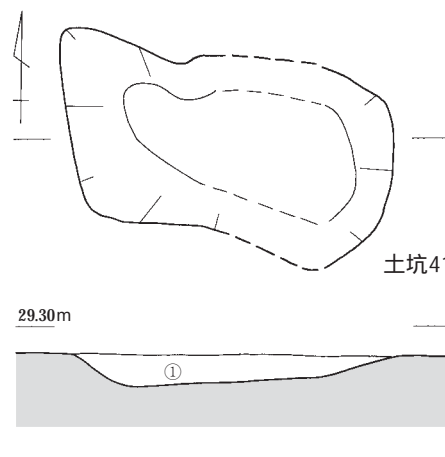


土坑40 (図92、図版46、表9)

B区、H7グリッドにおいて検出した。平面不整形の大型土坑である。埋土は、直径3cm程の円礫を多く含んだ黒色土1層である。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明な土坑である。(日置)

土坑41 (図92、図版46、表9)

B区、I7グリッドにおいて検出した。平面不整形な土坑である。埋土は砂が混じった黒色土1層であった。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明な土坑である。(日置)



土坑42 (図92、図版46、表9)

D区、M5グリッドにおいて検出した。一部は調査地外に外れる。検出した範囲では、平面L字形の土坑である。一部二段掘り状になっている。埋土は層土と同様の砂質土1層であった。層堆積時に自然に埋没したようである。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明な土坑である。

(日置)



図92 土坑37～41

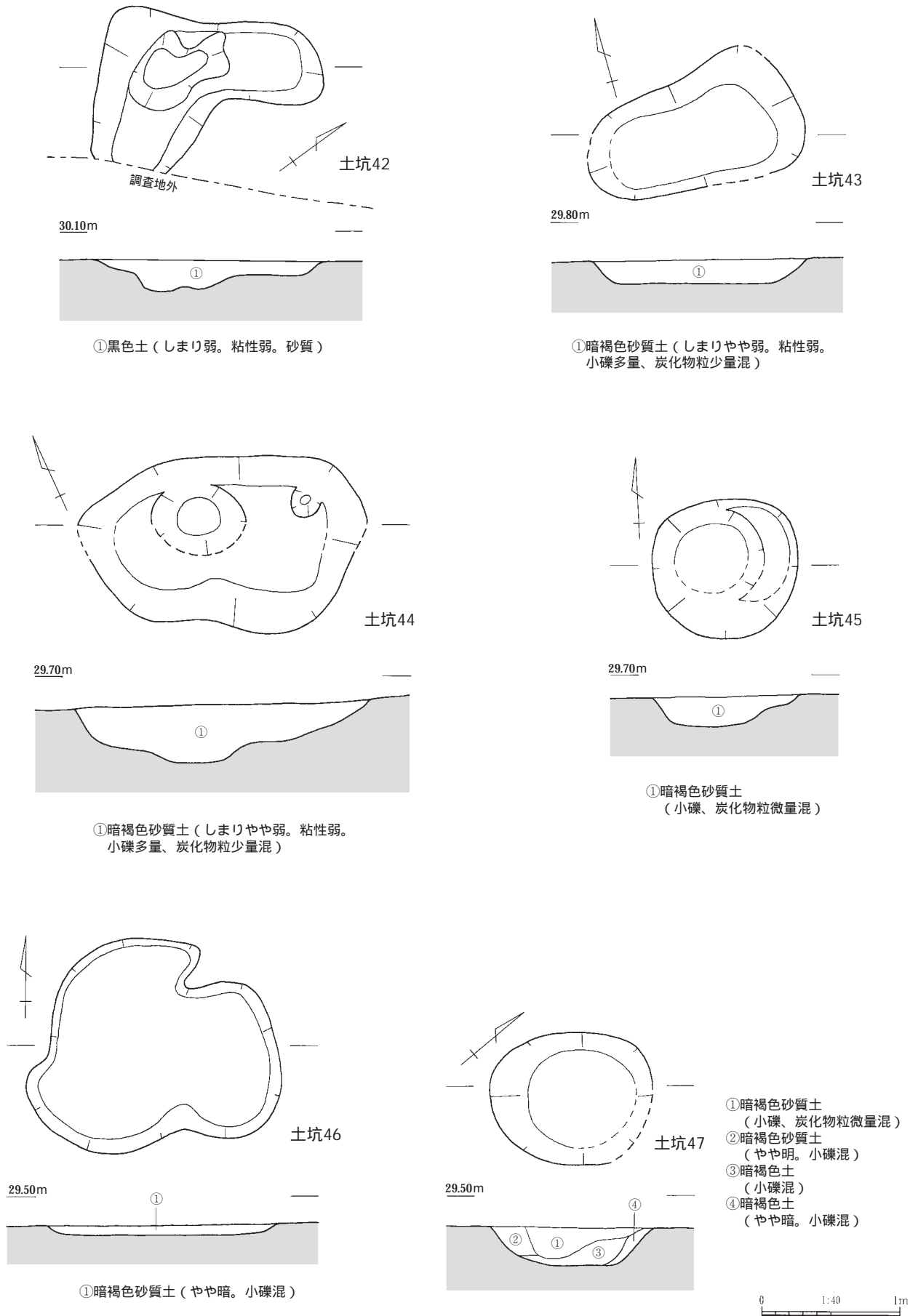


図93 土坑42～47

土坑43 (図93、図版46、表9)

E区東側、N7・8グリッド、竪穴住居5の西側に位置する。平面形が楕円形、断面は逆台形を呈する。遺物は出土しておらず、明確な時期は不明であるが、第2遺構面での検出である事から少なくとも弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑44 (図93、図版46、表9)

E区東側、N8グリッド、土坑43の西側に位置する。平面形が楕円形、断面は逆台形を呈する。底面には浅い掘り込みが2ヶ所確認できた。遺物は出土しておらず、土坑43と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑45 (図93、図版46、表9)

E区南東、O8グリッド、土坑44の南側に位置する。平面形が円形、断面は逆台形を呈する。東側には浅いテラスをもつ。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、土坑43・44と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑46 (図93、図版46、表9)

E区北東、M8グリッド、竪穴3の北側に位置する。平面形が不整形、断面は逆台形を呈する浅い土坑である。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、他の土坑と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

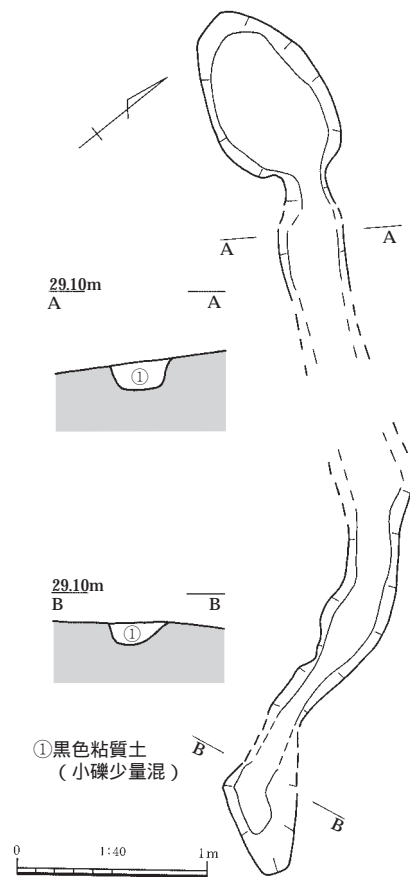


図94 溝2

土坑47 (図93、図版46、表9)

E区中央、N9グリッドに位置する。平面形が円形、断面は逆台形を呈し、暗褐色土系の4層から成る。堆積状況から掘り返された可能性がある。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、他の土坑と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

溝2 (図94、図版46)

B区、G6からG7グリッドにおいて検出した。平面不整形で、やや蛇行した溝状遺構である。南端部分に比べ、北端部分は広がっている。底面は一部で層中に含まれる砂礫が露出する箇所があった。埋土は黒色粘質土1層のみであるが、部分的に小礫を多く含み硬く締まった部分があった。流水の痕跡はなかった。遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明である。(日置)

ピット (図95・96-1・96-2、図版70、表31~33・49)

第2遺構面では計293基のピットを検出した。分布は、A区は東半、B区は東半と西端、D区にまとまりが見られるが、全体的

に深さは浅い。第2遺構面を覆う包含層が、A区では東半には縄文時代の遺物が、西半には弥生時代の遺物が多く見られる事から、東半のピット群は縄文時代のピットである可能性が高く、西半のピットは弥生時代のピットである可能性が高い。B区東半でピットのまとまりが見られる箇所では、縄文時代の可能性のある土坑がいくつか検出されており、包含層にも同時期の遺物が特に多く含まれる事から、ピット群も同時期に属する可能性がある。B区西端では包含される遺物の量は少ないものの、比率は弥生時代の遺物が多く、これらのピット群は弥生時代に属する可能性がある。D区では遺物の出土数が極めて少ないため、時期を判断する素材にはかけている。

これらのピットの中で遺物が出土しているものも多くあるが、ほとんどは細片で図化できる遺物は少なかった。P232～P233はA区東半ピット群に含まれるものである。P232はD1グリッド、P233はD2グリッドの北側、P234はC3グリッドの南東部にそれぞれ位置する。381はP232出土の粗製深鉢の底部。胎土や色調、調整から縄文時代後期～晩期のものである可能性が高い。丸底のため、他の時期のもの可能性もある。382はP233出土の突帯文土器の深鉢で、口縁部に無刻目突帯を貼り付ける。383はP234出土の小型の深鉢である。外面は貝殻条痕の後ナデ調整されている。縄文時代早期末～前期初頭の所産であると考えられる。(三木)

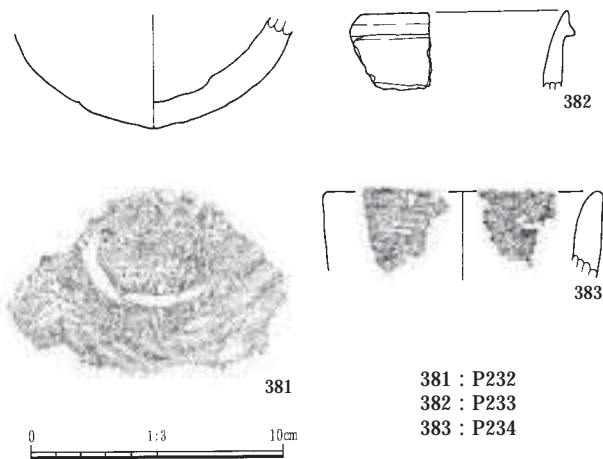


図95 第2遺構面ピット出土遺物

第5節 遺物包含層の調査

1. 概要

第1遺構面と第2遺構面の間に堆積する層には縄文時代早期から弥生時代後期にかけての遺物が大量に含まれていた。時期幅の広い遺物を含んでいるものの、遺物の時期による出土レベル差は見られず、層の上部から下部まで満遍なくすべての時期の遺物が見られた。このことから、層は二次堆積によって形成された遺物包含層で、包含される最新遺物から考えて弥生後期ごろに堆積したと推定できる。また、前述したように、第2遺構面の遺構は層堆積時に崩壊がおこっているので、それにとまって遺構内から流出した遺物も多数含まれていると思われる。

遺物は調査地全面から出土したが、出土量には粗密が見られる。B区の西半部やD区は全般に遺物出土量が少ない。ほかの地区ではいずれも多量の遺物の出土を見たが、中心となる出土遺物の時期に偏りがある。E区では弥生土器の出土量が極めて多い反面、縄文土器の出土量は少なかった。A・B・C区の東側では縄文土器や石器の出土量が非常に多く主体をなすが、弥生土器が出土していないわけではない。逆に、A・B・C区の西側では、弥生土器が主体になり、縄文土器や石器の出土量は非常に少ない。層は二次堆積層であるため遺物は原位置をまったくとどめていないが、こうした遺物分布の様相はある程度本来の遺物分布や遺構分布を反映していると思われる。包含さ